

第 1 号議案

2023 年度事業報告書

自 2023 年 4 月 1 日

至 2024 年 3 月 31 日

一般社団法人 電子情報通信学会

目 次

事業報告

1. 概況	1
2. 共通事業	4
3. ソサイエティ及びグループ事業	6
4. 支部事業	10
5. 選挙	12

事業報告（附属明細書）

I. 共通事業

1. 会議に関する事項	1
2. 出版に関する事項	2
3. 総合大会に関する事項	3
4. 選奨に関する事項	4
5. 会員に関する事項	9
6. 教育活動に関する事項	12
7. 国際活動に関する事項	13
8. 学会からの情報発信に関する事項	14
9. 規格調査会に関する事項	14
10. その他の事項	15

II. ソサイエティ及びグループ事業

1. ソサイエティ及びグループ事業概要	16
2. ソサイエティ大会に関する事項	29
3. 国際会議に関する事項	30
4. 出版に関する事項	31
5. 選奨に関する事項	32
6. 研究会等に関する事項	41
7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項	43

III. 支部事業

IV. 2022年度役員及び代議員の構成

V. 2023年度役員候補者及び代議員の選挙

2023 年度事業報告

1. 概況

昨今の社会情勢を振り返ると、今年度は COVIDO-19 の大混乱も 5 類に移行し、ニューノーマルとも言われる新たな生活様式を取り入れながら、徐々に経済社会活動を取り戻しつつある中、戦争の勃発、物価の高騰、世界各地で起こる異常気象等、我々を取り巻く社会情勢は厳しいものがある。このような状況において、アカデミックな本会の意義は益々問われており、学会というピュアな立ち位置で学術を磨き、そして諸々の社会課題を解決するイノベーションを興すことが期待されている。「変わらないもの」と「変わるもの」を考えながら、次世代に残す学会を議論し、限界打破のイノベーションにより、本会がコミュニケーションの夢とそれによって実現される豊かな未来社会に向けて挑戦し、革新的技術及びイノベーションを継続的に創出する学会として大きく飛躍することを目指し、以下の基本姿勢で活動を進めた。

1. 広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらく
2. 社会課題の解決に貢献し、新たな社会のビジョンを作成する
3. 技術倫理の向上に努め、社会に向けて発信する

本会の事業は、学会全体事業（以下、共通事業という）、ソサイエティ及びグループ事業、支部事業の三つに大別されるが、それぞれ以下のような取り組みを行った。

(1) 幅広い知の融合と人材の育成、及び、会員サービス・運営の質の向上

広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらき、会員サービスのさらなる拡充を目指して、次のような施策を推進した。主な成果を以下に示す。

① 広汎な知の交流

広汎な知が交流し、新たな学術領域をひらき、社会課題の解決や新たな社会のビジョンについて、議論や意見交換ができる機会作りを促進した。そのために、研究会・大会等の魅力あるイベントを開催し、HPやメール、SNSを活用し幅広く案内、周知し、会員サービスの向上、人材育成、及び、新規会員の獲得を目指した。

② ジュニア会員制度の充実

電子、情報通信分野に若い多感な時期より興味を持ってもらい将来のリーダー育成に貢献するため、ジュニア向けHPの充実、Lineによりコラムや時季に関する情報の配信（48回）、総合大会でポスターセッションの実施、ジュニア向けWebinarを1回実施した。

③ プラチナクラブの充実

主に40歳以上の会員を対象に、学会を自己実現の場に使い、人生を通した研究者・技術者としての充実感を高めるための後援会、見学会、意見交換会等の場や、経験と知識を活かした後継者支援の機会を提供する。今年度は2回の見学会（慶應義塾大学、NTT厚木研究所）を実施した。

④ ウェビナーシリーズの充実とビデオアーカイブ拡充

下記のシリーズを定期的に配信した。さらに、それらに加え、会長就任挨拶、研究会、大会の招待講演等を収集、アーカイブ化し、ビデオコンテンツの充実に努めた。

(ア) IEICE ICT Pioneer Webinar シリーズ：本会がカバーする ICT に関する技術分野において、10～20 年以上にわたり活躍された、専門分野・領域の第一人者に、当該技術の現在、過去、未来を語って頂く本シリーズを継続した。今年度は 14 回実施し、毎回数 100 名の参加があった。またそれらをアーカイブ化し youtube より配信している。

(イ) Distinguished Lecturer (DL) による英語講演：海外会員へのサービス向上、グローバル化の一環として、DL による英語講演の配信を 11 回実施し、youtube より配信している。

(ウ) IEICE 3 Minutes：豊かな未来社会に向けて果敢に挑戦している若手研究者の優れた研究活動を動画で広く内外に発信することを目的に、若手研究者・技術者の方が研究活動を 3～5 分で分かりやすく解説した動画を作成し、8 本をアーカイブ化した。

⑤ 維持員サービスの充実

本会を支えて頂く維持員の皆様に対して、感謝の意を表するため「維持員交流会」を3月に開催した。学会紹介、学会事業紹介、名刺交換会を実施し、本会の事業状況をご理解頂くことに努めた。

⑥ アソシエイトメンバー制度の推進

学会の利用者を増やすことで、様々な分野との連携活動、会員をハブとする活動の場を拡げ、学会の利用者を増やすため、アソシエイトメンバー制度をスタートさせ、初年度480人のメンバー登録があった。2～3通/月に学会情報（研究会開催、論文特集号、大会案内）をメールでメンバーに送付した。

⑦ IEICEアンバサダーの制度化の推進

会員に対して、アウトリーチすることをねらいIEICEアンバサダー制度を開始し、4人のアンバサダーを任命した。アンバサダーの個人アカウントSNSを利用した学会情報発信を担った。

⑧ 会員サービスサポート・運営体制の充実

学会業務のデジタル化の推進、最新ICTツールの活用により、学会業務の効率化を図った。シニア人材、学生アルバイトを活用したIEICEサポートチームにより、情報システムのクラウド化、各種オンラインイベントの支援を進めた。

(2) 新たな時代に向けた学会の在り方

① 情報通信エンジニアリングの検討

情報通信インフラは、現代の人々の生活を支え、将来の人々にも多大な恩恵をもたらす社会基盤・システムである。情報通信エンジニアリング分野の健全なる発展を図り、社会の発展に寄与していくため、情報通信インフラを総合的に運営することは学会に課せられた使命である。

このような背景を踏まえ、情報通信エンジニアリングの関係者でWGを構成し、議論を開始した。本活動の第一弾として、2024年総合大会において、「社会インフラをささえる情報通信エンジニアリングを目指して」というテーマで企画セッションを実施した。また、将来的には、情報通信エンジニアリングを総合的に扱うソサイエティ相当の組織を立ち上げることを目指し、次年度は、理事会配下に情報通信エンジニアリング部門準備委員会を設置することとした。

② 新たな学会の仕組み作りと研究会会計の見える化

新たな学会の仕組み作りの一環として、より魅力的な学会、研究会とするため、そして、10、20年後の学会を支えていただける中堅、若手の方々に当事者意識をもって学会、研究会に携わって頂ける仕組みの必要性を共有した。具体的には、活動することがわかりやすい形で自らにメリットとして感じられるように、研究会活動の見える化について検討を進めた。

③ 財務戦略

将来の会員数減少、学会としての活動規模縮小に対する戦略を明確化するため、現状の見える化と、将来予測の情報を広く共有した。マクロで見れば会員数の減少傾向は続く予想されることから、無駄を排した効率的な組織運営を徹底しつつも、財務強化、すなわち会費以外の会議収入増加など活動規模拡大に向けた施策を検討・実施する必要性を共有し、学会の持続性を担保する新規取り組みについて検討を開始した。

④ 企業イニシアティブ分科会

ICT分野で活躍する企業は、業種を超えたDX、社会の仕組みのDX等、社会課題の解決がビジネスの主戦場になっている。そのような企業の期待に応えるために、特定の専門領域の枠を超えた議論の場、機会の提供が必要と考え、昨年度立ち上げた3分科会（ビジネスインキュベーション分科会、AIが相互運用される社会システム検討分科会、カーボンニュートラルICT分科会）に続き、今年度はライフスタイルデザイン分科会を立ち上げ、4分科会体制で分科会活動を実施した。ビジネスインキュベーション分科会ではアイデアソンを、カーボンニュートラルICT分科会及びAIが相互運用される社会システム検討分科会ではシンポジウムを実施した。平行して、ソサイエティ大会、総合大会の大会企画、東京支部シンポジウムにおいて、これらの活動状況について報告を行った。

⑤ 学会トランスフォーメーション

PoCについては以下の2つの検討を進めた。

- ・世界中のプロ研究者と出会うためのプロ研究者プラットフォーム
- ・会員の研究開発活動を可視化し、その知識を共有することを目的にしたモノグラフ

また、これまでPoCとして進めてきた「トップ研究者の対外アピールを目的にした弾丸プレゼン」をIEICE 3Minutesとして事務局に業務を引き継ぎ、研究会DXの一環として進めてきた研究専門委員会の会計幹事の事務業務を、2021年度から2年間の試行期間を通して、今年度すべての研究専門委員会の会計業務の事務局への集約を完了した。

(3) 論文誌の価値向上

英文論文誌のインパクトファクター向上に向け、非会員による論文投稿、学会HPのトップペ

ージより主要論文の紹介、論文アクセス数上位の論文の周知等のこれまで実施してきた取り組みを継続している。オープンアクセスについても積極的に対応を進め、J-STAGE において次の 3 誌がオープンアクセスに対応した。(ED(2020 年 1 月より)、EA (2022 年 10 月より)、EC (2023 年 8 月より)) さらに ComEX が、2023 年 10 月より、EB 誌が、2024 年 2 月より、IEEE Xplorer を利用してオープンアクセスに対応した。また、多言語翻訳サービスを英文論文誌に適用することで、海外の方が母国語で英文論文誌を参照することが出来るため、大幅なアクセス数の増加が期待でき、インパクトファクター向上につながると考え、2024 年 4 月より英文論文誌を多言語展開するための準備を進めた。

2. 共通事業

(1) 各種会議

2023 年 6 月 8 日の定時社員総会において、森川会長、山中次期会長を代表理事とする 2023 年度役員体制を発足させた。理事会 9 回開催をはじめ、理事会傘下の各種委員会等を開催し、学会の円滑な運営を行った。また、支部との連携強化を目的に、支部長が理事会にオブザーバーとして参加した。

(2) 出版

本会の「実施事業」の柱である会誌発行事業については、2023 年度は、12 冊、合計 187,300 部（月平均 15,608 部）を発行配布した。読みやすく、親しみやすい会誌を目指して、企画を行い、特集・小特集の毎号化を実施した。また、2024 年 3 月号は、1200 号記念特集として「100 年後の情報通信が支える未来予想図」をテーマに、応募作品を基にした記事を有識者に執筆頂いた。

知識ベースアクセス件数は累計で 7,560,000 件となり広く利用されている。

出版事業として、単行本の重版 1 点、大学シリーズの重版 2 点、レクチャシリーズとして重版 5 点を発行した。また、紙版ではなく電子版による提供について、一部の書目で試行的に開始した。

(3) 総合大会

総合大会を 2024 年 3 月 4 日(月)～8 日(金)に広島大学 東広島キャンパスで開催した。企画セッションのみオンライン配信を行い Zoom での聴講も可とした。本年度もプログラム委員会を組織して企画・準備を行い、大会の活性化、魅力向上を図った。大会初日には、International Reception Party、2 日目には全ソサイエティ合同による Welcome Party と懇親会を合同で開催した。プレナリーセッションを開催し、会長講演、基調講演、セッション内で学術奨励賞授賞式・教育功労賞授賞式・フェロー称号贈呈式を行った。参加者数 4,348 名、公募講演数 2,025 件であった。

(4) 選奨

第 85 回功績賞を 5 名に、第 61 回業績賞イ号を 3 件 5 名に、第 61 回業績賞ロ号を 3 件 9 名に贈呈することを決定した。第 61 回業績賞ハ号は該当無しであった。

第 80 回論文賞を和英論文誌 8 誌から選んだ 12 編に、第 6 回最優秀論文賞をその中の最も優

秀と認めた 1 編に贈呈することを決定した。

第 10 回末松安晴賞を 2 名に贈呈することを決定した。

第 86 回学術奨励賞を 44 名（基礎・境界ソサイエティ 6 名、通信ソサイエティ 25 名、エレクトロニクスソサイエティ 8 名、情報・システムソサイエティ 5 名）に対し贈呈した。

第 8 回教育優秀賞を 3 名に贈呈することを決定し、第 8 回教育功労賞を 10 名に贈呈した。

(5) 会員に関する事項

定款に基づき、名誉員に 9 名を推薦することとした。

規則に基づき、フェロー称号を 23 名に、シニア会員称号を 53 名に贈呈した。

会員数（名誉員・正員・学生員、維持員、購読会員）合計については、2023 年度末で 23,486 名となった。

(6) 教育関連活動

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持、向上を目的とし、日本工学会の ECE プログラムの認定を受けた「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を実施した。今年度は、コロナ禍において実施できなかった FPGA 講習及び工場見学を初めて実施した。2023 年度の受講者数は、36 名であった。

JABEE の学部認定審査については、2023 年度も定常的な活動を行った。JABEE 本体へ委員を派遣して JABEE の運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系 CPD 協議会については、情報交換を中心に実施した。また、日本工学会の CPD 協議会・CPD プログラム委員会には委員を派遣して継続的に議論に参画した。

小中高校生を対象とした科学教室は、2023 年度は会員及び大学等の協力の下に実施した。開催回数は 1 回、参加者合計は 28 名であった。

(7) 国際活動

国際委員会では、Distinguished Lecturer (DL) による英語 Webinar を継続的に実施し、それらのアーカイブを行った。

次期会長・副会長・国際委員会委員が出席し、国際セクション代表者と意見交換を行う場として、3/4 (月) All Sections Meeting をハイブリッド形式で開催した。また、主に留学生を対象としたネットワーキングのための英語のポスターセッションを 3 月 4 日 (月) に広島アステールプラザにて開催した。

(8) 情報発信

2024 年 3 月の総合大会を活用し、プレナリーセッション、「社会インフラをささえる情報通信エンジニアリングを目指して」をはじめとした 41 の企画セッション、ランチョンセミナー、スポンサードセッション、インダストリアルセッション、オプションツアー、IEICE Expo 広島 2024 (企業展示) を実施し、多くの方に発信した。ライブ Webinar として、IEICE ICT Pioneers Series を 2020 年 6 月より継続し、コンテンツを、本会ホームページから Web ブラ

ウザで視聴可能とした。

(9) 規格調査会

規格調査会活動として、委員会議を4回、専門委員会及び小委員会を40回開催した。国際標準化に関して取り扱ったIEC文書は70件であった。

(10) 外部機関との連携等

ICT分野では従来の範囲を超えた他分野との連携が重要となってきたおり、府省や他学会との連携活動を推進した。府省関連では、ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「科学技術・イノベーションの推進に向けた日本の取組と電子情報通信技術への期待」というテーマで、内閣府、デジタル庁、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。2024年2月には、総務省国際戦略局幹部と会長を初めとする本会役員、支部長ら27名との第15回意見交換会を開催し、国の技術政策と学会の役割等について情報交換を行った。

日本機械学会：日本機械学会2023年度年次大会先端技術フォーラムにて、連携企画セッションを実施

・情報処理学会：倫理綱領を会員に浸透させるための事例集の動画コンテンツ制作を共同で実施

・電気学会：役員懇談会において、両会の問題意識、取組状況の共有し、意見交換を実施

さらに、電気・情報関連学会連絡協議会活動を継続した。また、他団体等との連携については、関連学術団体等に対して200件の協賛・後援等を行った。MCPCとの相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP上のバナー交換を行った。

3. ソサイエティ及びグループ事業

(1) ソサイエティ及びグループ事業

2023年度も、各ソサイエティ及びグループごとに、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に、特色のある活動を推進した。

① 基礎・境界ソサイエティ (ESS) は、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしており、新しい研究分野を創造するとともに、重要な研究分野を一層活性化させることに基礎・境界ソサイエティの使命があると考えている。しかしながら、昨今の会員の減少やコロナ禍における活動を考えると、研究面のみならず、ソサイエティのビジネスモデルの改革等に関しても検討することが不可欠となっている。2023年度は、2019年度にソサイエティ運営委員会の下に「サブソ・研専会議」が設けられた体制のさらなる定着と発展を図るとともに、コロナ禍によって図らずも実施せざるを得なくなった、研究会のリモートもしくはハイブリッド開催の有効性を検証し、今後の改革に関する議論を推し進めていく。

② 通信ソサイエティ (CS) は、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、およびその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2023年度はコロナ禍が終息し、社会全体が通常

の社会活動に戻ってきた。通信ソサイエティの活動もハイブリッド型の活動から対面型の活動が増え、コロナ禍以前のアクティビティに戻りつつある状況である。

研究会活動においては、コロナ禍の収束状況を踏まえながら対面とハイブリッド形式の研究会を活発に行うとともに、海外渡航制限撤廃後は一部で海外での研究会開催が再開されるなど、国内外で研究会本来の姿を取り戻しつつある。また、通信ソサイエティのフラグシップ国際会議である ICETC も定例化し、2023 年 11 月の札幌開催ではオンサイトを中心とした運営を行うとともに、バンケットを初めて開催し、大変盛況の内に終了することができた。

出版活動においては、英文論文誌 (EB) および ComEX の掲載プラットフォームとして新たに IEEE Xplore と契約を締結し、2023 年 6 月 1 日以降の投稿分から移行を開始した。EB は 2024 年 2 月以降、ComEX は 2023 年 10 月以降、IEEE Xplore 上でオープンアクセス論文としての掲載が開始された。また、2023 年 6 月より ComEX にインパクトファクタが付与された。これらにより、EB 及び ComEX 両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。

会員事業企画においては、ICETC の運営やシスターソサイエティ協定の締結、メーリングリストや web ページでの情報発信で重要な役割を担うとともに、通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として、海外会員に対して紙媒体による情報提供を行うトライアルを実施した。今後も、オンラインツールを活用した情報発信を国内外の会員に対して継続的に行うとともに、海外会員がアクセスしやすいポータルサイトの整備等、通信ソサイエティの国際化に向けた活動も積極的に進めていく予定である。

- ③ エレクトロニクスソサイエティ (ES) は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員 (研究者) の研究成果発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の 3 会議体制で上記活動を効率よく実施し、会員の満足度向上を目指している。平成 28 年度から研究技術会議内に立ち上げた 3 つの領域委員会 (電磁波基盤技術領域委員会、フォトニクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会) に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動にかかわる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。さらに、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の活性化に関する共通の課題は、領域連携会議にて議論を進めている。

2023 年度は、エレスプレナリーセッションでは研究活性化のための他分野からの情報提供を意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「世界を変える宇宙通信」と題して最新の宇宙通信開発動向にとどまらず、宇宙通信に関わるビジネスの最前線動向を含む 3 つの特別講演、総合大会のプレナリーセッションでは、「量子コンピュータのグローバル動向および産業創出の挑戦」と題して、量子コンピュータの実用化をビジネスサイドから引き上げる営みの状況等に関する特別講演を行った。いずれも、単なる技術の最新動向を伝えるだけでなく、産業界、ビジネス観点の内容を含める事

で社会実装に向け、研究開発方針策定の参考となる要素を含めた。今後、情報通信用エレクトロニクスの中後の展開（あらたな研究テーマ）を考えるトリガーとなることを期待している。また、学生員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の提供を目指して、総合大会の懇親会を、大会委員と全ソサイエティ共催の **Welcome Party** との合同開催として、エレスがオープニングの企画・司会を務め実施した。

また、組織自体のサステナビリティを担保、つまり将来にわたり魅力あるエレス活動を目的として、委員会等活動の効率化施策を実行した。例えば、これまで 2.5 時間かかっていた執行委員会を要点のみに絞る事で、議論をメインとし 1 時間程度で終了するよう運営し、資料準備時間の削減を含めて運営効率化を進めた。さらには、川西会長自ら、研専の在り方の議論を持ち掛け、エレス独自の組織形態である領域での事務作業の集約化等を目指し、研専代表者と時間をかけ直接対話する施策も行った。意見集約が今年度実施完了できたため、次年度以降に具体化を進める予定である。加えて、効率化の施策としては、これまでエレス独自のファイル共有サーバーや、アーカイブ公開サーバーを有していたが、これらの継続はコスト、金銭的成本だけでなく維持管理の稼働コストも考え、本部サーバーへの集約を推し進める方針を決め具体的に進めている。今年度は 5 回の執行委員会も、ハイブリット会議と、完全オンライン会議でメリハリをつけるソサイエティの運営を行い、より次世代に繋げられるよう効率化を進めた。

- ④ 情報・システムソサイエティ (ISS) は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISS が、同研究分野の活動の基盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2023 年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。
- ⑤ NOLTA ソサイエティ (NLS) は、COVID-19 に伴う制限が緩和されたことを受け、研究会、大会、国際会議等は完全オンライン形式あるいはハイブリッド形式を原則とする開催から、完全対面形式を原則とする開催に移行した。また、国際会議等の準備状況や方針の確認を各回の委員会にて定期的に行った。その他、協賛や技術共催など、他学会への協力を積極的に推進するとともに、MoU の新規締結や更新に関する検討も行った。また、2018 年度よりソサイエティ次期会長の選挙を、学会の選挙システムを用いて行うことになったが、選出の手続き等の事務処理の実態にあわせて、申し合わせの見直しを行った。
- ⑥ ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として 1995 年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由に開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、他分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入口的役割を果たしている。

2023年度は、運営委員会をオンラインで開催したものの、各研究会やHCGシンポジウムでは対面のみでの開催も増え、ハイブリッド開催の良さも活かした企画・実施がなされた。論文誌での特集号の企画は従来通り継続され、学際研究の発表・議論の場を提供した。今年度は、HCGの紹介のため、3月に開催された総合大会において企画セッションを実施した。ただ、研究会の存在意義を再確認した結果、2つの特別研専を解散した。

(2) ソサイエティ大会

- ・ソサイエティ大会を2023年9月12日(火)～15日(金)の4日間、名古屋大学 東山キャンパスで開催した。参加者2,626名、公募講演数は1,198件であった。
- ・FIT2022(第21回情報科学技術フォーラム)を情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して、2023年9月6日(水)～8日(金)に大阪公立大学 中百舌鳥キャンパス(ハイブリッド開催)で開催した。参加者2,256名(現地来場者1,062名)、講演件数は545件であった。

(3) 国際会議

16件の国際会議を開催した。

(4) 論文誌等出版

- ・和・英論文誌8誌のオンラインジャーナルを以下のとおり公開した。
 - ◇ 和文誌：掲載総ページ数：1,853ページ(参考：前年2,207ページ)
 - ◇ 英文誌：掲載総ページ数：5,996ページ(参考：前年5,817ページ)
- ・ソサイエティごとの電子ジャーナルとして、NOLTA(NOLTAソサイエティ：年4回)、ComEX(通信ソサイエティ：月1回)、ELEX(エレクトロニクスソサイエティ：月2回)をそれぞれ発行した。
- ・各ソサイエティ及びグループから、それぞれニューズレターやソサイエティ誌が出された。

(5) 選奨

- ・基礎・境界ソサイエティ：功労賞2名、貢献賞35名
- ・NOLTAソサイエティ：貢献賞4名
- ・基礎・境界ソサイエティ/NOLTAソサイエティ：Fundamentals Review ベストオーサー賞1編
- ・通信ソサイエティ：ソサイエティ論文賞11編、マガジン賞1編
- ・エレクトロニクスソサイエティ：ソサイエティ賞3件、レター論文賞1件、ELEX Best Paper Award 2件、招待論文賞1件、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 総合大会6名、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 ソサイエティ大会6名
- ・情報・システムソサイエティ：ソサイエティ論文賞 該当なし、活動功労賞10名、査読功労賞10名、ジュニア&学生ポスターセッション優秀ポスター賞6名、ジュニア&学生ポスターセッション特別賞(協創)4名、ジュニア&学生ポスターセッションジュニア奨励賞3名、船井業績賞1件、船井ベストペーパー賞2編、FIT論文賞7編、FITヤングリサーチャー賞8名

- ・ヒューマンコミュニケーショングループ：ヒューマンコミュニケーション賞 6 件、HCG シンポジウム賞 20 件

(6) 研究会

各ソサイエティ、グループで開催された第一種研究会の開催数と発表件数は下記のとおり。

(ただし共催、連催等の場合は、それぞれで重複集計。)

・基礎・境界ソサイエティ／NOLTA ソサイエティ	102 回	2,128 件
・通信ソサイエティ	139 回	2,270 件
・エレクトロニクスソサイエティ	85 回	1,173 件
・情報・システムソサイエティ	111 回	1,642 件
・ヒューマンコミュニケーショングループ	20 回	403 件

(7) 会員数 (2022 年度末)

・基礎・境界ソサイエティ	4,261 名
・通信ソサイエティ	8,333 名
・エレクトロニクスソサイエティ	4,338 名
・情報・システムソサイエティ	8,271 名
・NOLTA ソサイエティ	363 名
・ヒューマンコミュニケーショングループ	720 名

4. 支部事業

国内 10 支部 (北海道、東北、東京、信越、東海、北陸、関西、中国、四国、九州) は、各地域に密接した活動として、支部 (連合) 大会、各種講演会、シンポジウム、見学会、学生向け・小中高生向けのイベント、学生会活動、選奨等の事業を展開した。各支部の活動概要は以下のとおり。

(1) 北海道支部

- 一般事業：講演会 2 件。支部連合大会 1 回 (公立はこだて未来大学)。専門講習会 1 回、総務省と意見交換会。
- 教育事業：応用物理学会企画の小中高生向けイベントの共同主催。
- 学生会事業：学生会主催講演会 3 件、学生会研究発表会 (インターネットシンポジウム) 1 回、学生ランチ活動として講演会開催。支部連合大会で学生交流会を企画。
- 選奨：学生奨励賞 11 名、学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞 3 名、支部学生ランチ顧問表彰 (発表賞) 2 名、支部連合大会若手優秀論文発表賞 11 名

(2) 東北支部

- 一般事業：講演会 8 件 (ハイブリッド 2 件、対面 6 件)、見学会 1 件、学生と地域企業によるパネルディスカッション 1 件、支部連合大会 1 件、協賛・講演事業 3 件。
- 教育事業：小中高生向け事業 3 件開催。

- 学生ランチ活動：東北大学学生ランチ活動。
- 選奨：学生優秀論文賞 2 名、学生優秀発表賞 2 名、優秀学生表彰 22 名

(3) 東京支部

- 一般事業：講演会 1 回、シンポジウム 2 回を開催。また、見学会 1 回を実施。
- 教育事業：学校、企業、NPO と連携した共同主催の教育イベントを公募し 5 件を採択し、実施。SSH 指定校の生徒に対する本会の先端研究分野を紹介する講演会 1 回。
- 学生会事業：講演会 1 回（オンライン）、見学会 1 回（オンライン）を開催。学会誌 11 月号「学生会だより」の記事執筆。学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、研究発表会（オンライン）を開催（発表件数 114 件、うちジュニア会員 8 件）。学生ランチの 5 校が子供科学実験教室、講演会、交流会を実施。
- 選奨：学生奨励賞対象者 11 名、学生功労賞 3 名。

(4) 信越支部

- 一般事業：支部大会 1 回(オンライン)、講演会 6 回（新潟地区 1 回、長岡地区 1 回、長野地区 4 回）。
- 学生会事業：研究交流会 1 回開催（新潟大・信州大学・公立諏訪東京理科大学）。
- 選奨：学生奨励賞 16 名、優秀論文発表賞 10 名、ベストプラクティス賞 3 研究室。

(5) 東海支部

- 一般事業：講演会 2 回(ハイブリッド、オンライン)、見学会（中止）、小中高校生向け理科教育講座 1 回、専門講習会 1 回、女子学生向けイベント 1 回（オンライン）、支部連合大会 1 回(オンライン)。
- 学生会事業：講演会 2 回、学生研究発表会 1 回、卒業研究発表会。
- 選奨：学生研究奨励賞 20 名、卒業研究発表会表彰 9 名、学業成績優秀賞 30 名。

(6) 北陸支部

- 一般事業：講演会 2 回、見学会 1 回。シンポジウム、講演会等の共催、協賛、後援を 3 件。支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：未実施。
- 選奨：優秀論文発表賞 20 名、優秀学生賞 11 名。

(7) 関西支部

- 一般事業：講演会 1 回、見学会 1 回、講習会 4 回開催。
- 教育事業：講演会 1 回。学校、企業、NPO と連携した共同主催の教育イベント(開催見送り)。
- 学生会事業：講演会 1 回、研究発表会 1 回開催。
- 選奨：学生会奨励賞 6 名、優秀論文発表賞 3 名、学生会功労賞 17 名。

(8) 中国支部

- 一般事業：講演会 20 回（主催・共同主催 9 回、共催等 11 回）、見学会 1 回（電気学会共催）、専門講習会 1 回、シンポジウム等の後援 2 回、電気記念日行事共催、支部

連合大会 1 回。

- 教育事業：学生を対象にしたアイデア・作品のコンテストを主催
- 学生会事業：学生向け講演会。学生自主活動としてフレッシュ I T あワード実行委員、支部ホームページの維持、管理、改訂。
- 選奨：連合大会奨励賞 19 名、優秀卒業生表彰（高校・高専・短大）58 校 90 名、学生功労賞 10 名

(9) 四国支部

- 一般事業：講演会 6 回（主催 4 回、共催 2 回）、専門講習会 2 回、支部協賛・後援事業 2 回、支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：学生向け講演会 1 回開催。2 校の学生ランチが講演会、見学会、交流会等の活動を実施。
- 選奨：電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞 53 名

(10) 九州支部

- 一般事業：特別講演会 1 回（ハイブリッド）、一般講演会 7 回開催。協賛・後援の講演会/シンポジウム 6 件。専門講習会 2 回開催（ハイブリッド）、アンテナ伝搬基礎講座 1 回開催（オンライン）、支部連合大会 1 回、総合通信局連携企画 1 回。
- 教育事業：子供の科学教室 2 回、ものづくり教室 1 回、科学体験プロジェクト 1 回（熊本高専と共催）。
- 学生会事業：学生会講演会 1 回、学生ランチ交流会の実施。11 ブランチが講演会や交流会実施。
- 選奨：連合大会講演奨励賞 9 名、学生会講演奨励賞 13 名、成績優秀賞（学生）64 名、学術奨励賞 27 名

5. 選挙

2024 年 2 月 6 日～3 月 5 日に、Web 投票により 2024 年度役員候補者及び代議員の選挙を実施した。2024 年度代議員として 108 名が選ばれた。

以上

2023 年度事業報告（付属明細書）

I. 共通事業

1. 会議に関する事項（定款 第 4、6、9 章）

1. 1 2023 年定時社員総会

2023 年 6 月 8 日（木）午後 2 時から機械振興会館において 2023 年定時社員総会を開催した。代議員総数 106 名に対し、出席代議員数 85 名（委任状を含む）で、定款第 19 条に定める代議員総数の過半数に達した。川添会長を議長として以下議案を付議して、審議事項はいずれも原案どおり可決承認された。

- 第 1 号議案 2022 年度事業報告
- 第 2 号議案 2022 年度決算（審議事項）及び監査報告
- 第 3 号議案 公益目的支出計画実施報告及び監査報告
- 第 4 号議案 2023 年度事業計画
- 第 5 号議案 2023 年度収支予算
- 第 6 号議案 新理事・監事の選任（審議事項）

1. 2 理事会

年度内に 9 回の理事会を開催した。

1. 3 理事会傘下の委員会等の開催状況

- ・企画戦略室：7 回
- ・選奨委員会：メール審議 1 回
- ・論文賞・学術奨励賞委員会：メール審議 4 回
- ・教育賞委員会：2 回
- ・シニア会員審査委員会：メール審議 1 回
- ・ロードマップ委員会：0 回
- ・男女共同参画委員会：2 回
- ・アドホック会合：13 回
- ・大会委員会：4 回
- ・編集連絡会：4 回
- ・出版委員会：0 回、メール審議 1 回
- ・ハンドブック／知識ベース委員会：6 回
- ・財務委員会：5 回
- ・研究会連絡会：4 回
- ・教科「情報」の入試に関する検討 WG：0 回
- ・若手 WG からの提言に対する検討アドホック：0 回
- ・倫理委員会：メール審議 1 回
- ・功績賞・業績賞委員会：2 回
- ・末松安晴賞委員会：1 回
- ・フェローノミネーション委員会：1 回
- ・コミュニケーション委員会：0 回
- ・ア krediyation 委員会：メール審議 2 回
- ・サービス委員会：6 回 メール審議 1 回
- ・国際委員会：3 回、メール審議 9 回
- ・著作権管理委員会：3 回、メール審議 6 回
- ・会誌編集委員会：6 回
- ・教科書シリーズ特別委員会：0 回
- ・支部会議：2 回
- ・規格調査会委員会：4 回

1. 4 その他の会議等

- ・名誉員・歴代会長を囲む懇談会：2023 年 10 月 16 日機械振興会館にて開催。

2. 出版に関する事項

2. 1 会誌の発行状況（定款 第4条 イ号）

全会員に共通の場として重要なメディアである会誌は、2023年4月から2024年3月まで12冊、合計187,300部（月平均15,608部）を発行配布し、読みやすく、親しみやすい会誌を目指して企画・編集を行い、特集・小特集の毎号化を実施した。

また、2024年3月号は、1200号記念特集として「100年後の情報通信が支える未来予想図」をテーマに、一般（小学生～20歳以下）から作文、絵画／イラストの2部門に分けてテーマを募集、最優秀賞1件、優秀賞6件を表彰、また応募作品を基にした記事を有識者に執筆頂いた。

電子化の対応としては、前年度にリリースした会誌アプリ v5 に基づき、毎月順調に会誌記事を配信した。

2023年度の会誌記事の内容・件数及びページ数は次のとおりである。

種 類	件数	ページ数	種 類	件数	ページ数
4月小特集			講 演	4	28
（「今、だからこそ！」電子工作の	11	53	編集長退任にあたって	0	0
すすめ—未来の技術者を育てる			解 説	30	194
電子工作ブームを再び—）			講 座	0	0
5月特集			総 合 報 告	0	0
（非地上系ネットワークの将来）	13	80	ジュニア会員のページ	2	9
6月小特集			寄 書	0	0
（Beyond 5Gを支えるフォトニク	6	33	回 想	1	7
ス技術とその展望）			学生／教養のページ	1	3
8月小特集			オピニオン	2	8
（接近するバーチャルとリアル—	10	57	コラム	0	0
メタバース・デジタルツインの			ニュース解説	22	40
現在と未来—）			ニュースフラッシュ	0	0
9月小特集			知識の森	25	52
（セルフリー通信技術の最新動向）	5	27	ソサイエティのページ	4	5
10月特別小特集			EiC 記事	0	0
（Artificial Intelligence of Things	5	42	情報ネット今学会では-	0	0
（AIoT） for Smart Farming）			学生会だより	10	34
11月特集			予 定 目 次	12	0
（耐量子計算機暗号の最新動向）	13	66	学会ニュース	0	0
12月小特集			慶 賀	1	1
（そのとき研究の歴史が動いた—	8	34	追 悼 抄	2	2
画像認識の発展の歴史を振り返っ			国 際 会 議	14	6
て—）			図 書 紹 介	18	9
12月小特集			国内文献目次		2
（「共生社会」実現に資する「誰でも	6	30	図書寄贈一覧		
参加」の学会・研究会を共につくろ			本会だより		19
う—「論文作成・発表アクセシビ			編 集 室	12	12
リティガイドライン」の活用—）			役員等口絵		8
1月特別小特集			総会・選奨		110
（DAO（分散型自律組織）の可能性	5	22	フェロー口絵		2
について）			会誌総目次		11
1月小特集			会 報		
（通信障害と社会）	4	20	会 告	12	79
2月小特集			そ の 他	1	0

(自動運転を支える情報通信技術の最新動向)	6	38	計	1,208
3月1200号記念特集			巻頭言	12
(100年後の情報通信を支える未来予想図)	12	65	目次	36
			合計	1,256

*その他：広告（カラー、前付等）83.5ページ

2. 2 ハンドブック（定款 第4条 ト号）

知識ベースアクセス件数（累計）は、756万件で広く利用され続けている。2023年度以降は維持員向けサービスとして希望に応じてサイトにバナー広告を掲載している。

また、知識ベースの新たな試みとして、2023年4月号から会誌に「知識の森」欄を新設、毎号2件、年間24件の記事の掲載を開始した。それらのコンテンツについては、各ソサイエティ・グループを通じて各研究専門委員会からの提案を基に1年間分の内容を検討した。あわせて、新サイトの在り方も検討し、12月1日リニューアル公開した。

2. 3 単行本（定款 第4条 ト号）

重版1点を刊行した。

また、監査法人からの指導に従い適切な在庫整理を行った。

2. 4 教科書「電子情報通信学会大学シリーズ」（全59巻）（定款 第4条 ト号）

重版2点を発行した。（コロナ社委託出版）（昭和55年8月第1回配本以降既刊書目52点）

2. 5 教科書「電子情報通信レクチャーシリーズ」（全64巻）（定款 第4条 ト号）

大学院及び学部の学生を対象とし、併せて一般勉学者の参考に供するための教科書シリーズとして重版5点を発行した。（コロナ社委託出版）（2002年3月第1回配本以降通算40点）

また、紙版ではなく電子版による提供について、一部の書目で試行的に開始した。（コロナ社委託出版）

3. 総合大会に関する事項（定款 第4条 ロ号）

下記の期日・会場において5ソサイエティ（ヒューマンコミュニケーショングループは基礎・境界ソサイエティに含まれる）が合同して、現地開催した。なお、企画セッションのみ、Zoom配信を行った。

期 日 2024年3月4日(月)～8日(金)

会 場 広島大学 東広島キャンパス(東広島市)

参加者 8,692名

懇親会・Welcome Party 合同開催 西第2食堂【西第2福利会館】

I S S企画のジュニア&学生ポスターセッションについては、154件の講演を行った。

期 日：2024年3月7日(木)～8日(金)

会 場：学士会館2階

(a) 企画セッション数

企画種別	大会委員会	ソサイエティ					合計	実数
		基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス	情報・システム		
大会委員会企画	3	—	—	—	—	—	3	3
ソサイエティ特別企画	—	3	0	1	1	0	5	5
パネルセッション	—	0	0	2	0	1	3	3
チュートリアルセッション	—	1	0	2	1	0	4	4
依頼シンポジウムセッション	—	2	1	18 §	9 §	0	30	26
合計	3	6	1	23 §	11 §	1	45	41

(2024年)

§ 通信とエレクトロニクスの共催企画4件を含む。

(b) 公募セッション講演数

	ソサイエティ						合計
	基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス	情報・システム	その他	
一般セッション	287	42	947	311	342	—	1929
シンポジウムセッション	6	0	21	13	19	—	59
ポスターセッション	0	0	33	0	0	4	37
合計 [共催含む]	293	42	1001	324	361	4	2025

4. 選奨に関する事項 (定款 第4条 ホ号、ヘ号)

今年度の各選奨は所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり受賞者を決定した。

4. 1 功績賞 (第85回)

阿部 正幸 (NTT)
 大平 孝 (富士ウェーブ)
 菊間 信良 (名工大)
 小山二三夫 (東工大)
 佐藤 亨 (京大)
 以上5名

4. 2 業績賞 (第61回)

【選奨規程第9条イ号】

(業績の50音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
空間伝送型ワイヤレス給電の研究開発と実用化	篠原 真毅 (京大)
シリコン基板上メンブレンレーザの先駆的研究	松尾 慎治 (NTT) 武田 浩司 (NTT) 藤井 拓郎 (NTT)
ネットワーク情報理論ならびに情報理論的セキュリティに関する先駆的研究	大濱 靖匡 (電通大)

【選奨規程第9条ロ号】

(業績の50音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
映像符号化技術の研究開発とその MPEG 国際標準化の推進	松尾 翔平 (NTT) 坂東 幸浩 (NTT) 高村 誠之 (法政大)
オープン RAN の世界的な先導と推進	安部田 貞行 (NTT ドコモ) 増田 昌史 (NTT ドコモ) ウメシュ アニール (NTT ドコモ)
高速な発見型映像検索技術の開発と実用化	劉 健全 (NEC) 山崎 智史 (NEC) 佐々木洋平 (NEC)

4. 3 論文賞 (第80回)

(分冊別掲載年月順・敬称略)

A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	APVAS: Reducing the Memory Requirement of AS_PATH Validation by Introducing Aggregate Signatures into BGPsec Ouyang JUNJIE、矢内 直人、竹村 達也 (阪大)、岡田 雅之 (長崎県立大)、岡村 真吾 (奈良高専)、Jason Paul CRUZ (阪大) 2023年3月号(EA)
A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	A Unified Design of Generalized Moreau Enhancement Matrix for Sparsity Aware LiGME Models Yang CHEN、山岸 昌夫、山田 功 (東工大) 2023年8月号(EA)
A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Equivalences among some information measures for individual sequences and their applications for fixed-length coding problems 植松 友彦 (東工大)、松田 哲直 (埼玉大) 2024年3月号(EA)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	スペクトラムアナライザの線形性評価法 藤井 勝巳 (NICT) 2023年8月号(B)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Receive Beamforming Designed for Massive Multi-User MIMO Detection via Gaussian Belief Propagation 土井 隆暢、式田 潤、白瀬 大地、村岡 一志、石井 直人 (NEC)、高橋 拓海 (阪大)、衣斐 信介 (同志社大) 2023年9月号 (EB)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Practical Implementation of Motion-Robust Radar Imaging and Whole-Body Weapon Detection for Walk-Through Security Screening 有吉 正行、小倉 一峰 (NEC)、住谷 達哉 (エムシーデジタル)、Nagma S. KHAN、山之内慎吾、野村 俊之 (NEC) 2023年11月号 (EB)
C	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	A 28GHz High-Accuracy Phase and Amplitude Detection Circuit for Dual-Polarized Phased-Array Calibration 山崎 雄大、Joshua ALVIN、Jian PANG、白根 篤史、岡田 健一 (東工大) 2023年4月号 (EC)
C	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Single-Power-Supply Six-Transistor CMOS SRAM Enabling Low-Voltage Writing, Low-Voltage Reading, and Low Standby Power Consumption 榎本 忠儀 (中大)、小林 伸彰 (日大) 2023年9月号 (EC)
C	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Variable-Gain Phase Shifter with Phase Compensation Using Varactors 平井 暁人 (三菱電機)、津久井裕基 (三菱電機エンジニアリング)、堤 恒次、森 一富 (三菱電機) 2023年11月号 (EC)
D	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	学習データの忘却を最適化する Hypernetwork を組み込んだ DeepIRT 堤 瑛美子、郭 亦鳴、植野 真臣 (電通大) 2023年2月号(D)
D	論 文 名 著 者 名	人物再同定における教師なしドメイン適応への大域・局所特徴の利用 鵜飼 祐生 (グローリー)、藤吉 弘亙 (中部大)

	掲載年月	2023年3月号(D)
D	論文名 著者名	A Principal Factor of Performance in Decoupled Front-End 出川 祐也 (東大)、小泉 透 (名工大)、中村 朋生、塩谷 亮太、門本淳一郎、入江 英嗣、坂井 修一 (東大)
	掲載年月	2023年12月号(ED)

((A)、(B)、(C)、(D) : 和文論文誌、(EA)、(EB)、(EC)、(ED) : 英文論文誌、所属は:掲載時)
以上 12 編

4. 4 最優秀論文賞 (第6回)

(敬称略)

論文名	Practical Implementation of Motion-Robust Radar Imaging and Whole-Body Weapon Detection for Walk-Through Security Screening
著者名	有吉 正行、小倉 一峰 (NEC)、住谷 達哉 (エムシーデジタル)、Nagma S. KHAN、山之内慎吾、野村 俊之 (NEC)
掲載年月	2023年11月号 (EB)

以上 1 編

4. 5 末松安晴賞 (第10回)

(敬称略)

カテゴリ	受賞者 (所属)	研究・開発の題目
学術界貢献	太田 香 (室蘭工業大)	無線通信システムにおけるリソースの管理と最適化および 6G への展開
産業界貢献	手島 邦彦 (NTT ドコモ)	移動通信システムの無線リソース管理機能及びオープン RAN インターフェースプロトコルの標準化

以上 2 名

4. 6 学術奨励賞 (第86回)

基礎・境界ソサイエティ : 6 名

(50 音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演番号
足立 亮介	山口大	分散事象駆動制御のためのセンサネットワーク設計	ソ大	A-16-3
谷津 帆乃果	同志社大	クラウドソーシングにおける回答方式の影響ーリアルタイム性と精度の比較実験ー	ソ大	A-10-4
塚本 陽太	東京理科大	周期入力に対する Izhikevich ニューロンモデルの応答ーカオスニューロンの場合ー	総大	N-1-7
		カオス応答を呈する Izhikevich ニューロンに正弦波入力を印加した場合の応答解析	ソ大	N-1-24
富田 友太	三重大	確率共鳴を適用した非線形システムの利用による逐次干渉除去における信号検出の低消費電力化の可能性	総大	N-2-11
鯨井 慎也	法政大	逐次干渉除去受信機における低消費電力化のための確率共鳴を利用した ADC 低ビット化の検討	ソ大	A-13-8
豊岡 祥太	関西大	ANC システムにおけるバーチャルセンシング技術の消音領域に関する検討	ソ大	A-8-2
山口 智也	金沢大	高速画像処理用の光リザバーコンピューティングの実証	ソ大	N-2-2

通信ソサイエティ : 25 名

(50 音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
相原 直紀	KDDI 総合 研究所	CF-mMIMO 環境におけるユーザ移動を考慮した AP 選択手法	総大	B-5-43
大戸 琢也	KDDI 総合 研究所	分散 CPU を用いた Cell-Free massive MIMO に おけるマルチホームフロントホール構成	ソ大	B-5-25
赤松 孝俊	三菱電機	光伸長・圧縮による高周波数移行技術に向けた整 形パルス光の強度揺らぎ測定	ソ大	B-12- 17
今田 諒太	NTT	結合型マルチコアファイバにおける曲げ損失特性 および設計指針	総大	B-13-3
		結合型マルチコアファイバにおけるモード結合が 遮断波長特性に与える影響	ソ大	B-13-5
大谷 花絵	NTT	IEEE 802.11be における競合端末の伝送レートを 考慮したマルチリンク選択手法に関する一検討	総大	B-5-89
		IEEE 802.11bn におけるチャネル占有率を考慮 した同時接続 AP 選択手法	ソ大	B-5- 124
小此木 謙一	KDDI 総合 研究所	自律飛行ドローンのための衛星・セルラー通信動 的切り替えシステムの検討	総大	B-7-5
蕪木 碧仁	電通大	複数送信周期環境における自律分散型リソース割 当法の検討	ソ大	B-5-76
神渡 俊介	KDDI 総合 研究所	実環境を想定したミリ波 Cell-Free massive MIMO のアクセスポイントのビームチルトに関 する一検討	総大	B-5-40
酒井 優	NTT	複数 RF chain を有する AP を用いるミリ波 Cell-Free Massive MIMO に適したクラスタリン グ方式の検討	ソ大	B-5-26
蒲原 健一郎	三菱電機	周波数ホッピング方式の伝送路推定値の結合によ る到来方向推定の精度評価	総大	B-5-35
佐々木 翼	古河電工	高 Δ MCF を用いた狭ピッチ 4 コア FIFO	総大	B-10-4
瀧川 将弘	KDDI 総合 研究所	4 コア MCF 用 FIFO の低反射化検討	ソ大	B-10-4
佐藤 千尋	NTT	ネットワーク構成情報を用いた警報メッセージの ベクトル化手法	ソ大	B-14-5
鮫島 景子	三菱電機	QoS 連携した異種無線ネットワークにおける経 路冗長化方式	総大	B-5- 123
白幡 晃一	東北大	28 GHz 帯マイクロストリップアレイアンテナを 用いた 16 Gbits-256 QAM 信号の SMF10 km、 無線 10 m フルコヒーレント伝送	ソ大	B-10- 11
関川 柊	KDDI 総合 研究所	F-CPS に向けた高可搬型 WebAssembly コンテナ の検討	総大	B-6-87
辻井 明日香	日本特殊陶 業	F-CPS における Unikernel を用いた軽量型実行 基盤の検討と評価	ソ大	B-7-9
高木 裕貴	ソフトバン ク	通信とワイヤレス電力伝送の融合/連携の実現に 向けた高効率電力増幅器	ソ大	B-20- 14
辻本 志保	三菱電機	時系列画像データ内の低 SNR 移動目標検出にお ける推移確率制御型 DP アルゴリズムの適用	総大	B-2-12
中本 悠太	ソフトバン ク	ワイヤレス電力伝送機能を実装したミリ波通信シ ステムの実証実験	総大	B-20- 23

		ワイヤレス電力伝送機能を実装したミリ波通信システムにおける WPT フィードバック制御	ソ大	B-20-19
中森 真輝	NTT	結合型マルチコアファイバにおける電力結合係数と空間モード分散の曲げ依存性	ソ大	B-13-6
林 直輝	NTT	複数指標の時系列共起性に着目したサービス品質低下検知技術の提案	総大	B-14-10
藤田 勝美	NTT	電力を判断基準とする省電力パケット処理コア数スケーリング	ソ大	B-6-51
保前 俊稀	ソフトバンク	300 GHz 帯屋内基地局アンテナの水平面内マルチビームの実験的検討	総大	B-1-137
前迫 敬介	ソフトバンク	有線給電ドローン無線中継システムを用いた遭難者位置特定システム	総大	B-5-53
宮本 克真	NTT	フロー情報を考慮した NAPT 処理のハードウェアオフロード手法	総大	B-6-84
八木 康徳	NTT	スケーリングリフレクタアンテナを用いた Sub-THz 帯 OAM 多重伝送実験	ソ大	B-17-3
吉川 慧司	KDDI 総合研究所	液晶 IRS の応答時間に基づくユーザ及び反射方向のスケジューリング方式の検討	ソ大	B-5-79
李 頤	NTT	ネットワーク故障対応 AI モデル生成のための環境模擬に関する考察	総大	B-14-3
		ルールベース故障箇所推定の高速度化方法に関する考察	ソ大	B-14-4

エレクトロニクスソサイエティ：8名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
新井 紀香	名工大	吸収電力密度におけるアンテナモデル間相互結合に関する一検討	総大	C-15-6
齋木 研人	三菱電機	28GHz 局所ばく露における温度上昇解析	ソ大	C-15-1
小松 憲人	東大	メタサーフェスによる空間・偏波多重コヒーレント受信器の実証	ソ大	C-3/4-21
下津 裕生	東工大	導波路型光ニューロンに向けた光磁気変換メモリの作製	ソ大	C-3/4-3
田口 巴里絵	三菱電機	広帯域増幅器に向けたデジタル信号制御による 2 波の変調波信号の相互変調歪み抑圧の検討	総大	C-2-9
竹添 慎司	三菱電機	4.3Vpp の出力電圧とパルス幅制御機能を備えた高速 GaN スイッチング型エンベロープ増幅器用 45nm SOI-CMOS ドライバ回路	ソ大	C-2-9
種村 匠真	名大	半磁束量子回路のパラメータ設計指針	総大	C-8-2
		半磁束量子回路の D フリップフロップの動作実証	ソ大	C-8-3
中坂 日南	法政大	周期長を考慮したプラズモニックグレーティングカップラの結合特性	総大	C-15-12
		有限周期構造におけるプラズモニックグレーティングカップラの FDTD 解析	ソ大	C-15-14

梶富 直人	九大	高速波長可変レーザとアレー導波路回折格子を用いたテラヘルツパルス波発生	総大	C-3/4-9
		高速波長可変レーザを用いた高速掃引 THz-FMCW	ソ大	C-3/4-71

情報・システムサイエティ : 5名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
佐藤 篤樹	東大	Fast Partitioned Learned Bloom Filter	総大	D-1-9
孫 卓凡	東大	Dream-NeuS: 滑らかな表面を持つ3次元オブジェクトのテキストからの生成	総大	D-12-4
中塚 智尋	KDDI 総合 研究所	相互作用を考慮した条件付きオートエンコーダによる多様な3次元人物動作予測	総大	D-12-16
山西 博雅	東大	グラフモデリングによる観光地の人気要因の解釈	総大	D-12-26
吉田 周平	NTT	AI 推論を用いた高精細画像に対する姿勢推定手法	総大	D-12-24

4. 7 教育優秀賞 (第8回)

(50音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
宇野 亨 (農工大)	電磁気学理論およびその応用技術の啓発に対する貢献
中西 通雄 (追手門学院大)	技術者倫理・情報倫理教育の新方法論の提案および実践
巳波 弘佳 (関西学院大)	AI 活用人材の育成のための教育プログラム開発と普及

計 3名

4. 8 教育功労賞 (第8回)

(50音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
井上 忠照 (香川高専)	技術者教育認定活動における審査への貢献
大久保賢祐 (岡山県立大)	日タイの学生研究発表会のコロナ禍における継続への貢献
櫛田 貴弘 (立命館大)	関西支部 ICT 基礎講座「画像処理講座」への貢献
佐藤 正知 (鹿児島高専)	技術者教育認定活動における審査への貢献
園田 潤 (仙台高専)	エレクトロニクスシミュレーションにおける学生論文指導会の推進
高野 恭弥 (東京理科大)	日タイの学生研究発表会のコロナ禍における継続への貢献
田口 光雄 (長崎大)	アンテナ伝搬基礎講座のアンテナ理論分野講師としての貢献
林 和則 (京大)	無線通信システム研究会基礎ワークショップ講師および実行委員会幹事としての貢献
森田 翔太 (福山大)	学生会イベント「フレッシュ IT あわ〜ど」への長年の支援活動
山田 寛喜 (新潟大)	アンテナ伝搬基礎講座の電波伝搬分野講師としての貢献

計 10名

5. 会員に関する事項 (定款 第3章)

5. 1 名誉員の推薦

定款の定めにより以下の9名を名誉員に推薦した。

荒川 泰彦 (東大)

上田 修功 (理研)
 齋藤 洋 (実践女子大)
 永妻 忠夫 (阪大)
 中野 義昭 (東大)
 松山 泰男 (早大)
 村岡 裕明 (東北大)
 村瀬 淳 (ドコモ・テクノロジー)
 横矢 直和 (奈良先端大)

5. 2 フェロー称号の贈呈

[基礎・境界ソサイエティ：4名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
Luigi Fortuna	Research of Designing Circuits and Systems by Exploiting their
鎌部 浩	環境整備によるソサイエティの研究会活動のさらなる発展の促進
清本 晋作	暗号技術ならびにプライバシー保護技術の研究開発及び国際標準化
國廣 昇	数理的な手法に基づく現代暗号の安全性評価に関する先駆的研究

[通信ソサイエティ：8名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
朝枝 仁	情報指向ネットワークアーキテクチャ及びプロトコルの研究開発
飯田 勝吉	QoS とセキュリティを考慮したネットワークアーキテクチャ研究
亀田 卓	時空間同期を活用する無線端末多数同時接続技術の研究
高野 誠	ビジネスプロセスに基づくオペレーションシステムの研究・実用化
寺田 純	高速光アクセスネットワークシステムの商用化・高度化
長谷川 浩	フォトニックネットワーク・ノードの最適設計に関する研究
馬場崎忠利	電子情報通信用直流給電システム技術に関する開発と標準化
山登 庸次	オープンソースクラウド高度化の研究と実用化

[エレクトロニクスソサイエティ：3名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
九鬼 孝夫	液晶材料を用いた高周波機能デバイスに関する先駆的研究
小林 一哉	電磁波の散乱・伝搬・回折問題に対する厳密解法の開発
高橋 亮	高速光スイッチおよび光スイッチネットワークにおける先駆的研究

[情報・システムソサイエティ：8名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
入江 英嗣	高性能・省電力プロセッサアーキテクチャの研究
大須賀昭彦	エージェント技術に関する研究活動と普及活動の推進
岡田 真人	理論神経科学とデータ駆動科学に関する研究
鯉渕 道紘	相互結合網へのランダム性導入に関する先駆的研究
高橋 寛	VLSI の高品質化のための故障検査法に関する研究
内藤 整	テレビジョン技術の高度化に関する研究開発と実用化
松田 一朗	画像データの無歪み圧縮アルゴリズムの研究開発
山西 健司	情報論的学習理論の創出とそのデータサイエンスへの応用

5. 3 シニア会員称号の贈呈

〔基礎・境界／NOLTA ソサイエティ：8名〕

石井 光治 佐藤 隆英 杉本 恒美 高井 重昌 新田 尚隆
野崎 隆之 三村 和史 八木 秀樹

〔通信ソサイエティ：20名〕

天野 良晃 新井イスマイル 荒川 豊 石津健太郎 猪原 涼
亀井 雅 川原 亮一 窪田 歩 土川 公雄 長岡 智明
中川 雅弘 沼田 晋作 林 高弘 稗圃 泰彦 黄 元柱
水谷 圭一 三好 優 巳波 弘佳 森山 敏文 若山 雄太

〔エレクトロニクスソサイエティ：10名〕

池内 裕章 今井 翔平 上田 哲也 片山 光亮 川口 秀樹
柴田 幸司 須藤 薫 陳 春平 平井 暁人 福田 敦史

〔情報・システムソサイエティ：15名〕

池田 和史 泉 知論 今泉 祥子 宇野 裕之 小形 真平
長名 保範 小林 悠記 五味 秀仁 酒井 哲也 佐藤 幸紀
柴田裕一郎 鈴木 優 原口 亮 藤戸 敏弘 馬 強

5. 4 会員の現況

(1) 会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数

会員種別	名誉員	正員	学生員	ジュニア会員	購読会員	維持員	合計
2022年度末 会員数	103[79]	18,909[859]	1,993	370	284	143	21,802[938]
2023年度末 会員数	100[80]	19,091[871]	3366	487	285	157	23,486[951]
前年度末との差	-3[+1]	+182 [+12]	+1373	+117	+1	+14	+1684 [+13]

(注1) 名誉員の黒川 兼行氏は2023年9月30日、羽鳥 光俊氏は2023年10月30日、飯島 泰蔵氏は2023年11月14日、村谷 拓郎氏は2023年12月10日、後藤 尚久氏は2023年12月14日、岩崎 昇三氏は2024年2月14日に逝去した。

(注2) 年度末退会日を3月31日から4月1日に変更により、年度末退会は翌年度の退会数にカウントする。

(2) 各支部における年度末会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数

会員種別 支部	名誉員	正員	学生員	ジュニア 会員	購読 会員	維持員	合計
北海道	2【2】	366【13】	112	19	5	3	507【15】
東 北	9【5】	626【47】	114	34	11	1	795【52】

東 京	65 【52】	11078 【562】	1378	273	135	112	13041 【614】
信 越	1 【1】	359 【10】	109	5	9	4	487 【11】
北 陸	0 【0】	358 【7】	114	9	6	0	487 【7】
東 海	6 【5】	1227 【52】	334	13	29	15	1624 【57】
関 西	13 【12】	2343 【116】	494	66	32	17	2965 【128】
中 国	【0】	657 【20】	201	28	9	1	896 【20】
四 国	【0】	302 【8】	96	15	3	2	418 【8】
九 州	2 【2】	927 【28】	288	25	12	2	1256 【30】
海外在中	2 【1】	848 【8】	126	0	34	0	1010 【9】
合 計	100 【80】	19091 【871】	3366	487	285	157	23486 【951】

5. 5 学生事業に関する事項（定款 第4条 へ号）

(1) 会誌「学生会だより」欄の掲載記事

各支部学生会・学生ランチの活動状況等を会誌「学生会だより」欄に掲載した。

(2) 学生ランチについて

ホームページに学生ランチ設置校の活動紹介記事及び設置申込みから報告書作成までの資料、流れを掲載し、学生ランチ設置校の拡大を図った。

支部活動として実施するため、設置校の申請、報告を各所属支部を通じて受け付けた。

6. 教育活動に関する事項（定款 第4条 ロ号、ハ号、へ号）

教育関連サービス（生涯教育の意味の検討、活性化、内容のアップデート、CPDの啓発・利活用、電子情報通信分野へ子供への興味を持たせる教育の検討などを含む）に関しては、サービス委員会の所掌として以下のような活動を行った。

6. 1 学会主催の技術講座に関する事項

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持・向上を目的として、2020年度に「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を開設した。このプログラムは、今後中核となる若手技術者に電気電子通信領域で必要となる高度な技術・知識を身につけて頂くことを目的としており、産業界・学界から最先端の研究・開発を進めておられる方々を講師としたスクーリング形式の教育プログラムである。コロナ禍では実施できなかったFPGA講習、工場見学を初めて実施した。なお、2023年度は36名が受講した。

6. 2 技術者教育認定活動（日本技術者教育認定機構：JABEEの一員としての活動）

JABEEの学部認定審査については、2023年度も定常的な活動を行った。JABEE本体へ委員を派遣してJABEEの運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

6. 3 技術者の継続的な教育・能力開発

CPD情報の管理については、電気学会・情報処理学会と連携した試行システムから、よりコスト効率のよいASP型システムへの切り替えを2015年10月に行って以来、2023年度も運用した。また、本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系CPD協議会については、情報交換やCPD制度の有用性訴求に関する連携を中心とした活動を行うこととしているが、2023年度は打ち合わせを1回開催した。

我が国においてCPDプログラムを中心的に行っている日本工学会のCPD協議会・CPDプログラム委員会に、委員を派遣して継続的に参画した。

6. 4 IEICE 先端セミナー

これまで電子情報通信分野の第一人者に、話題のテーマにおける現状と展望を講演いただく「テクノロジートレンドシリーズ」と、重要なテーマに関して非専門家の方向けに基礎的な内容から最新技術までを解説いただく「チュートリアルシリーズ」のWebinarを実施してきた。この両シリーズのコンセプトに基づく教育講座「IEICE 先端セミナー」を実施した。初年度は、「AI 社会実装の最先端と技術動向」及び「量子コンピュータと量子情報通信入門」を実施した。2023年度は、43名の受講があった。

6. 5 小中高校生を対象とした科学教室

小中高校生を対象とした科学教室は、2023年度は会員及び大学等の協力の下に実施した。開催回数は1回、参加者合計は28名であった。

7. 国際活動に関する事項（定款 第4条 へ号）

7. 1 国際セクションの活動

(1) 各セクションにおける講演会等の実施件数

セクション	件数	セクション	件数
バンコク	1	上海	0
北京	0	シンガポール	0
韓国 (Communication)	0	台北	0
韓国 (Electronics)	0	ヨーロッパ	0
韓国 (Information)	0	インドネシア	0
ベトナム	0	マレーシア	0
インド	0		

合計1件

(2) 国際セクションが主催・共同主催した国際会議 なし

(3) 国際セクションホームページ SSL化未対応の国際セクションに対してセキュリティ対策を依頼、現在、対応中である。

7. 2 国際委員会活動

国際委員会では、英語Webinarを継続的に実施し、動画のアーカイブを行った。

7. 3 All Sections Meeting

次期会長・副会長・国際委員会委員が出席し、国際セクション代表者と意見交換を行う場として、3月4日(月) All Sections Meeting を広島アステールプラザと Zoom とのハイブリットとして開催した。

7. 4 Global Net WorkShop

主に留学生を対象としたネットワーキングのための英語のポスターセッションを3月4日(月)に広島アステールプラザにて開催した。

8. 学会からの情報発信に関する事項 (定款 第4条 口号、へ号)

8. 1 総合大会の場の活用

2024年3月の総合大会では、プレナリーセッション、Welcome Party (懇親会)、「社会インフラをささえる情報通信エンジニアリングを目指して」をはじめとした41の企画セッション、ランチョンセミナー、スポンサーセッション、インダストリアルセッション、オプションツアー、IEICE Expo 広島2024(企業展示)を実施した。

8. 2 IEICT ICT Pioneers シリーズ (Webinar)

ライブ Webinar への最初の取り組みとして、IEICE ICT Pioneers Series を2020年6月より開始した。毎回多数の聴講申込みがあり、諸事情によりライブ配信を聴講できなかった方からオンデマンド配信の希望も多いため、Webinar コンテンツをアーカイブし、本会ホームページから Web ブラウザで視聴可能としている。

9. 規格調査会に関する事項 (定款 第4条 二号)

規格調査会会議を4回、専門委員会及び小委員会を40回開催した。国際標準化に関して取り扱った IEC 文書は70件であった。

委員会名		委員長名	委員数		開催数
規格調査会委員会		浅谷 耕一	21		4
専門委員会名		専門委員長名	専門(委)	小(委)	開催数
1	通信用伝送線及びマイクロ波受動部品	岸川 諒子	11	38	11
2	周波数制御・選択・検出デバイス	作田 幸憲	21	82	4
3	光ファイバ	大橋 正治	42	63	7
4	電子実装技術	高橋 満	18	0	4
5	無線通信用送信装置および受信装置	小川 博世	21	22	10
6	電子通信用語	—	0	0	0
7	電子通信記号	—	0	0	0
8	複雑システムの安全検討委員会	—	0	0	0
9	標準化教育検討委員会	中西 浩	15	10	4
合計			138	215	40

10. その他の事項

10.1 外部機関との連携に関する事項（定款 第4条 ロ号、へ号）

(1) 関連他学会との連携

電気・情報系関連5学会とは2004年に「電気・情報関連学会連絡協議会」を発足させ、協力してきている。2022年度も、2回の定例会議を開催し、各学会の会員数動向、財務問題、情報システムの課題を含め諸活動状況の報告に加え、会員増強の取り組み、公益目的支出計画の課題、大会活性化への取り組み等に関して情報交換・情報共有を行った。

電気学会については、企画戦略室を中心に意見交換を継続した。2024年2月に両会長をはじめとする電気学会6名、本会9名による役員懇談会を実施した。日本機械学会2023年度年次大会先端技術フォーラムにて、連携企画セッションを実施した。

(2) 関連学術団体との連携

2023年度は、関連学術団体等に対する協力・連携活動として、200件の協賛・後援等を行った。

(3) 府省との連携

ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「Society5.0によるデジタル社会の設計構築に向けた科学技術イノベーション政策」というテーマで、内閣府、デジタル庁、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。内閣府科学技術・イノベーション推進事務局（統合戦略担当）と『『総合知』の基本的考え方及び戦略的な推進方策』について意見交換を実施し、内閣府は当会との意見交換を含めた有識者議論向け報告を行った。2024年2月には、総務省国際戦略局幹部と会長を初めとする本会役員、支部長ら27名との第15回意見交換会を開催し、国の技術政策と学会の役割等について情報交換を行った。

(4) モバイルコンピューティング推進コンソーシアム(MCPC)との相互協力

MCPCとの相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP上のバナー交換を行った。

Ⅱ. ソサイエティ及びグループ事業

1. ソサイエティ及びグループ事業概要

2023 年度も、各ソサイエティ及びグループごとに特色のある企画等を実施し、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に活動した。

1. 1 基礎・境界ソサイエティ

基礎・境界ソサイエティは、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしており、新しい研究分野を創造するとともに、重要な研究分野を一層活性化させることに基礎・境界ソサイエティの使命があると考えている。しかしながら、昨今の会員の減少やコロナ禍における活動を考えると、研究面のみならず、ソサイエティのビジネスモデルの改革等についても検討することが不可欠となっている。2023 年度は、2019 年度にソサイエティ運営委員会の下に「サブソ・研専会議」が設けられた体制のさらなる定着と発展を図るとともに、コロナ禍によって凶らずも実施せざるを得なくなった、研究会のリモートもしくはハイブリッド開催の有効性を検証し、今後の改革に関する議論を推し進めていく。

(1) 新会議体制の定着

2019 年度に設けられたサブソサイエティ・研究専門委員会に関する議論を行う「サブソ・研専会議」の設置によって、必要に応じた検討内容の会議間の移行によって重複議論の回避ができ、効率的にソサイエティ運営ができるようになってきた。2023 年度もこの体制を維持し、ソサイエティ全般に亘る事項の議論をより適切に行うとともに、研究専門委員会の活性化、サブソサイエティの編成の議論も活発に行った。

新体制の定着を進める一方で、ソサイエティが定める各種の規程・内規を精査し、運用実態に即した規程類への見直しを行った。まず、和英論文誌について、論文誌編集委員長および編集幹事が両誌をハンドリングする一体体制に編集体制を移行したことに伴い、ソサイエティ編集規程および関連規程を見直し、改訂した。また、後述するようにサブソサイエティ制度の目的や在り方の改革等に関する議論を開始したことに伴い、サブソサイエティ運営規程を一部改訂した。更に、規程類の見直しに併せ、組織運営についても一部改革を行った。具体的には、活動実態のなかった事業委員会を廃止し、代わりにソサイエティに関する企画・立案を行う組織として企画委員会を新設した。これに伴い、事業委員会規程を廃止するとともに企画委員会規程を制定している。そして、上述した諸々の見直しを反映し、ソサイエティ運営規程も改訂した。

(2) サブソサイエティ・研究会活動の活性化

現在、基礎・境界ソサイエティには 3 つのサブソサイエティがあり 7 研究専門委員会がその 3 つのサブソサイエティに属している。一方、サブソサイエティに属していない研究専門委員会が 12 あり、必ずしも基礎・境界ソサイエティ内においてサブソサイエティ制が浸透しているとは言えない状況にある。サブソサイエティ制度は新しいソサイエティの設立をサポートするために設けられた制度であったが、2015 年度に NOLTA がサブソサイエティからソサイエティとなり独立して以降、サブソサイエティのソサイエティ化に向けた具体的な動きはない。このような現状から、サブソサイエティ制度の在り方に関して検証が必要な時期にきていると考えられる。

他方、研究会活動の活性化のためには、研究専門委員会の枠を超えた分野横断型の活動を促進していくことが必要不可欠である。そのためにも、複数の研究専門委員会がグループとして連携して活動することを促進するための仕組みが必要である。

以上のような背景を踏まえ、2023 年度は、サブソサイエティ制度の目的や在り方の改革、あるいは、同制度とは別に研究専門委員会の連携活動を推進するためのグループ化制度に関する議論を開始した。

(3) グローバル化と国外会員へのサービスの充実

国外会員へのサービスの一つとして、基礎・境界ソサイエティのアクティビティを毎月メールによって情報発信を行っている。2023 年度は、この活動も含め、これまでに実施してきた国際的なプレゼンス向上に向けた取り組みを継続した。更に、国際セクションやシスターソサイエティとの国際会議共催な

ど共同企画の実施や、国外の学会との連携企画などについても議論を進めた。

(4) 論文誌・機関誌の充実

基礎・境界ソサイエティでは、和英論文誌に加え、2014年10月よりNOLTAソサイエティとの共同機関誌として**Fundamentals Review**を発行している。**Fundamentals Review**は良質の解説論文に定評があるものの、ほぼすべての記事が日本語で執筆されている。そのため、これらの解説論文を多言語で翻訳・展開することができれば、海外の多くの研究者の興味を惹く可能性があり、特にアジア諸国の研究者に対する本学会のプレゼンス向上への寄与が期待される。2023年度は、**Fundamentals Review**の多言語化に向けた検討・作業を行った。

論文誌、機関誌は研究者に対して最も重要なサービスであり、その価値の向上は永続的な課題である。英文論文誌EAは2022年10月からJ-STAGE上においてオープンアクセスとなったことで、今後より多くの論文などで引用される機会が増えることが期待される。2023年度は、編集作業の効率化や上質の招待論文の掲載など、種々の施策を推し進め、コンテンツの質の向上とともに論文誌の知名度を上げ、インパクトファクタなどの指標の向上を図るための施策について議論を深めた。和英論文誌の編集体制においては、論文誌編集委員長および編集幹事が和英論文誌の両方をハンドリングする体制に変更することにより、完全な一体編集体制へと移行した。編集体制の変更のほかにも、2022年10月号からの英文論文誌オープンアクセス化に続き、2024年1月号からは和文論文誌を隔月化させるといった、論文誌発行に関する改革を継続的に実施した。

(5) 研究会の円滑な運営

基礎・境界ソサイエティでは2019年度に技報の完全電子化を実施し、2020年度に技報アーカイブを学会の共通システムへ移行した。2020年度から2022年度はCovid-19の影響でほとんどの研究会がオンラインもしくはハイブリッド開催されていたが、2022年度においては一部、対面のみで開催も実施された。2023年度は、ほとんどの研究会が対面のみで開催あるいはハイブリッド開催で実施された。

会議運営の議論については、研究会の運営形態のありかたや、技報が電子化された状態での研究会の円滑な運営、参加費、掲載料、参加者のアクセスしやすさ等についての検討を引き続き実施した。

また、NOLTAソサイエティと共同でハイブリッド研究会実施のための機材を保有・運用する取り組みを開始した。

(6) その他の活動

2012年度から実施している基礎・境界ソサイエティの活動に貢献した人々の表彰制度を円滑に継続した。特に2023年度はソサイエティ大会においてNOLTAとの共同贈呈式を対面で実施した。

2020年度から2022年度はCovid-19の影響により対面による会議実施が難しくソサイエティ運営委員会やサブソ研専会議はオンラインで実施されたが、2023年度は対面での開催と併せたハイブリッド会議を実施した。

1. 2 通信ソサイエティ

通信ソサイエティは、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、およびその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2023年度はコロナ禍が終息し、社会全体が通常の世界活動に戻ってきた。通信ソサイエティの活動もハイブリッド型の活動から対面型の活動が増え、コロナ禍以前のアクティビティに戻りつつある状況である。

研究会活動においては、コロナ禍の収束状況を踏まえながら対面とハイブリッド形式の研究会を活発に行うとともに、海外渡航制限撤廃後は一部で海外での研究会開催が再開されるなど、国内外で研究会本来の姿を取り戻しつつある。また、通信ソサイエティのフラグシップ国際会議であるICETCも定例化し、2023年11月の札幌開催ではオンサイトを中心とした運営を行うとともに、バンケットを初めて開催し、大変盛況の内に終了することができた。

出版活動においては、英文論文誌(EB)およびComEXの掲載プラットフォームとして新たにIEEE Xploreと契約を締結し、2023年6月1日以降の投稿分から移行を開始した。EBは2024年2月以降、ComEXは2023年10月以降、IEEE Xplore上でオープンアクセス論文としての掲載が開始された。ま

た、2023年6月より ComEX にインパクトファクタが付与された。これらにより、EB 及び ComEX 両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。

会員事業企画においては、ICETC の運営やシスターソサイエティ協定の締結、メーリングリストや web ページでの情報発信で重要な役割を担うとともに、通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として、海外会員に対して紙媒体による情報提供を行うトライアルを実施した。今後も、オンラインツールを活用した情報発信を国内外の会員に対して継続的に行うとともに、海外会員がアクセスしやすいポータルサイトの整備等、通信ソサイエティの国際化に向けた活動も積極的に進めていく予定である。

以下、今年度の活動の詳細を記す。

(1) 財務管理

通信ソサイエティの 2023 年度の収入は 1 億 8,580 万円、支出は 1 億 8,160 万円であり、420 万円の黒字の見込みである。2022 年度との比較では、収入、支出いずれも増加しているが、収支は、2022 年度の 1,430 万円の黒字に対して 1,010 万円の減収となる。

以下、各事業の 2023 年度の収支見込みの概要を述べる。通ソの主な収入源としては、受取会費、出版活動、研究会等の事業が挙げられる。その内訳は受取会費が 2,500 万円、出版活動が 5,000 万円、研究会等の事業が 1 億 1,000 万円である。受取会費に関しては、会員数の減少により年々予算案が削減されているが、2023 年度は予算案に対して微増であった。出版活動に関しては、和英論文誌の収入が最も多く 4,500 万円の収入に対して支出が 1,000 万円であり 3,500 万円の黒字であった。研究会等の事業に関しては、全国大会(総合大会/ソサイエティ大会)の収入 4,000 万円に対して支出が 2,700 万円であり 1,300 万の黒字、研究会(技術研究報告/研専活動)の収入は 6,000 万円に対して支出が 3,200 万円であり 2,800 万円の黒字であった。

2024 年度予算案は、収入が 2 億 4,440 万円、支出は 2 億 4,490 万円のほぼイーブンを見込んでいる。2023 年度との差異として国際会議の費用が多く計上されており、2023 年度の実績見込み 1,000 万円に対して 2024 年度は 6,000 万円の収入が見込まれている。これは国内での国際会議の開催予定が大きく影響している。これ以外では 2023 年度実績見込みと比較して、受取会費は 7%減、和英論文誌は 14%減に対して、総合大会は 11%増、ソサイエティ大会は 29%増を見込んでいる。

例年、予算立案時の精度向上は、長らく予算管理の課題として挙げられていた。特に執行委員会で指摘のあった研専の予算立案においては、過去 3 年間の実績値を平均化するなど予実差が出ないように取り組みを検討すべきである。また来年度に向けて、通ソ活性化資金の産学活性化への活用も要望されており、企業と学生の交流促進の機会の提供や、選奨費の拡充などが提案されており、通ソ活性化資金の増額も検討すべきである。

(2) 研究専門委員会

2023 年度の研究専門委員会による研究会活動は、コロナ禍の収束と共に通常の研究会運営を再開する年度となった。ハイブリッドでの研究会開催を機動的に残しつつ、対面参加者が主流となり、現地での活発な議論や懇親会の再開によるネットワーキングも盛んになるなど、研究会本来の姿を取り戻しつつある。また、海外渡航制限が撤廃され、一部で海外での研究会開催の取り組みが再開されるなど、国際化に向けた動きも徐々に活性化している。一方で、コロナ禍の 3 年間で幹事団内での研究会運営の知見が十分に引継ぎできない例も散見されており、若手の幹事・幹事補佐を中心に、会場確保や懇親会運営に苦慮している様子も見られるなど、幹事団の負荷低減が急務になっている。そこで、通信ソサイエティでは幹事団の負荷低減や若手研究者へのインセンティブ施策として、2023 年度に「幹事・幹事補佐研究会年間登録費免除トライアル」、招待講演者などを対象とした「研究会参加費免除トライアル」、「研究会推薦論文掲載料補助トライアル」など新たな取り組みを行った。加えて、若手研究者へのモチベーション向上を目指した通信ソサイエティ奨励賞の新設に向けた取り組みなど、研究会に参加したくなる取り組みも目指している。通信ソサイエティのフラグシップ国際会議 ICETC も定例化し、研究専門委員会でも当該分野の専門性を活かした招待講演への貢献など、その成功に寄与している。このように、2023 年度は、コロナ前を超える活発な研究会活動により、研究者が楽しんで研究会に参加・運営できるその基盤を整え、次年度以降の飛躍に向けた準備をする年度になったものと考えられる。

(2-1) 新型コロナウイルス終息後の研究会運営

1. 分野横断的な研究会の活性化

通信ソサイエティでは、研専間の連携による研究活動の活性化に取り組んでいる。例えば、第二種研究会等のイベント企画に通信ソサイエティの名称を付与し、広い研究分野からの参加を促している。例えば、国際ワークショップ Asian Wireless Power Transfer Workshop (AWPT) 2023 や情報ネットワーク研究会とネットワークシステム研究会の合同ワークショップが本制度を利用し開催された。

また、第三種研究会である革新的無線通信技術に関する横断型研究会 (Multiple Innovative Kenkyukai Association for wireless communications; MIKA)、超知性ネットワークに関する分野横断型研究会 (Cross-Field Research Association of Super-Intelligent Networking; RISING) が、合計 6 回の研究会・講演会 (発表・講演数合計 163 件、参加者延べ 331 名) を実施し、分野横断的なテーマについて、活発な討議を行った。

さらに、通信ソサイエティがカバーする全研究分野を対象とした通信ソサイエティフラグシップ国際会議 ICETC はこれまでオンラインやハイブリッドで開催されてきたが、ICETC 2023 では北海道立道民活動センターかでの 2・7 にて対面開催し、参加登録者 231 名、現地参加者 212 名となった。各研専から 33 名が技術プログラム委員として参加するとともに、研専委員長 26 名がテクニカルアドバイザーとして運営に貢献、研専による招待講演 13 件を推薦し、会議の成功に貢献した。

2. ハイブリッド開催の取り組み

2023 年 5 月 8 日より、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、5 類感染症へと移行された。これにより、出張や会議開催に関する規制は撤廃された。しかし、感染症の観点ではなく、DX 化の取り組みや利便性の観点より、多くの研究会が Zoom などを用いたオンラインと対面を同時に行うハイブリッド開催で実施した。2023 年 4 月～2023 年 12 月の期間で、99 回ほど研究会が開催されたがこのうち 84 回がハイブリッド開催であった。発表件数は 1,441 件であり、新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前の水準に回復基調が継続している。オンライン参加可能な研究会は手軽に参加できることや通ソの研究会に参加できる一括年間登録が普及したことにより、新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前の 130% 程度の参加者があり、昨年度と同じ程度となっている。

3. 国際交流イベントの復活

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが 5 類感染症へ移行したことに伴い、国際交流イベントが復活した。アンテナ・伝播研究専門委員会 (A・P 研) では、2023 年 6 月 29 日～7 月 1 日に大阪で日本・タイ・韓国の 3 か国の研究者が参加し、国際会議 AWAP2023 (Asian Workshop on Antennas and Propagation 2023) が開催された。また、衛星通信研究専門委員会 (SAT 研) は、2023 年 10 月 10～11 日の日程で韓国釜山において海外 2 種研 Joint Conference on Satellite Communications 2023 (JC-SAT2023) を開催した。発表件数は日本 12 件、韓国 19 件であり盛況に開催された。

(2-2) 研究専門委員会の変更

2023 年度は、通信ソサイエティの基幹分野を担う 20 の研究専門委員会と新規分野を担う 6 つの特別研究専門委員会が活発な研究会活動を行った。2023 年度で 4 つの特別研究専門委員会の設置期間が満了となるが、(1) 水中無線技術特別研究専門委員会 (UWT 特別研専)、(2) 光通信インフラの飛躍的な高度化に関する特別研究専門委員会 (EXAT 特別研専)、(3) ICT 分野における国際標準化と技術イノベーション特別研究専門委員会 (SIIT 特別研専)、それぞれの特別研究専門委員会から延長申請があり、研専運営会議での審議の結果、これらは全て承認された。期間は 2024 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日である。(4) 光応用電磁界計測特別研究専門委員会 (PEM 特別研専) は設置期間満了で活動終了となった。

(2-3) 活性化資金関係

研究会活動の活性化と会員増強を図るための研専運営活性化資金に対して、下記の 6 件の企画の応募につき研専運営会議での審査を経て採択された。

1. 若手研究者が参加しなくなる研究会の実現に向けた施策 (AP 研専)
2. 研究分野間交流のための若手・学生主体型ワークショップの開催 (CQ 研専)
3. ハイブリッド EMC 設計コンテストによるモノづくり技術育成と研究会活性化 (EMCJ 研専)
4. ハイブリッド環境におけるディスカッションを促進するカンファレンスシステムの拡充 (IN 研専)

5. データセンタを題材としたワークショップ開催によるソサイエティ活性化 (EE 研専)
6. 無線電力伝送コンテスト (WPT 研専)

これら活動については計画通りに実施し、実施後に研専運営会議内での紹介と報告を行い、その効果の確認や施策の水平展開を図っている。

(2-4) 研究会開催実績

2023年度は12月までに、第一種研究会を99回(講演数合計1,441件)実施した。研専、特別研専併せて54回の第二種研究会を実施し、技術の普及や新たな技術に対する展開を図った。なお、第一種研究会の99回のうち、ハイブリッド開催は84回であった。

(2-5) 大会活動実績

2023年ソサイエティ大会(名古屋大学)では、一般セッション20分野/公募シンポジウム5課題合わせて講演数772件と企画セッション18課題を実施した。2024年総合大会(広島大学)では、一般セッション20分野/公募シンポジウム2課題合わせて講演数1,001件と企画セッション23課題を実施した。総合大会のWelcome Partyは開催形式が懇親会との合同開催に変更となり、全ソサイエティ合同で対面にて実施した。研専紹介は、若手会員・学生員がIEICEの重要な構成組織である研究専門委員会を身近に感じていただけるよう、パネル展示の形態で実施した。ポスターを貼り出して、若手会員や他研専の方々と交流することができた。通ソとしては、3研専が研専紹介に参加した。研専紹介の他に、学生ポスター発表が行われ、約250名の参加となり盛況だった。

(2-6) 研究会連絡会

研究会連絡会は、研究会に関する課題についてソサイエティ・グループ横断で情報共有し意見交換する場であり、通信ソサイエティからも継続的に参画している。本年度も、他ソサイエティ・グループと研究会運営に関する諸課題について議論を行った。通信ソサイエティからは非会員に対する発表参加費を設定することを提案し、いくつかの他ソサイエティとともに来年度から実施することになった。また、通信ソサイエティで検討している研専推薦論文に対する掲載料補助(減免)トライアルや研究会で発表した若手を対象とした賞の新設、幹事・幹事補佐との意見交換会で出た意見、研専幹事団へのインセンティブ、研究会発表参加費免除についての施策、研専会計事務の学会事務局への集約トライアルについての情報を提供した。

(3) 出版活動

2023年6月1日以降の投稿分から、EBおよびComEXの論文をオープンアクセスとし、EBは2024年2月以降、ComEXは2023年10月以降、IEEE Xploreへの掲載が開始された。また、2023年6月よりComEXにインパクトファクタが付与された。これらにより、EB及びComEX両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。2009年3月から総合大会/ソサイエティ大会で継続的に開催している「論文の書き方講座」は、毎回聴講者から好評を博しており、対面開催が復活した2023年度においても、多数の参加があった。また、英文論文誌をはじめとする通信ソサイエティ論文誌の投稿数増加に向けて、各種施策を実施した。オープンコール特集号企画トライアルは、より柔軟で魅力ある特集号企画の実現を目指した施策である。編集会議推薦発表は、論文誌に掲載された優れた論文の著者を研究会等での発表に推薦する施策である。通信ソサイエティが主催の国際会議ICETC 2023では、編集会議から推薦した13件の招待講演が実施された。推薦論文制度に関しては、より多くの論文の推薦を目指し、研専運営会議と連携して、掲載料補助のトライアルを開始した。

(4) 本部論文賞候補、および、通信ソサイエティ論文賞

2022年10月から2023年9月までの間に通信ソサイエティの論文誌に早期公開された論文の中から、本部論文賞候補3編を選定した。これら3編の中で最も支持を集めた論文を最優秀論文賞候補とした。また、通信ソサイエティ論文賞として、同期間に和英論文誌、和文マガジンおよびComEXに掲載された論文の中から、優秀論文賞3編、チュートリアル論文賞3編、Best Paper Award 5編、Best Tutorial Paper Award 1編、ComEX Best Letter Award 1編、和文マガジン論文賞1編の計14編を選定した。また、通信ソサイエティマガジン賞を1編選定した。選定された15編の著者に対しては、

2024年5月の通信ソサイエティ活動キックオフにて表彰が行われる予定である。

(5) 国際会議

(5-1) 通信ソサイエティフラグシップ国際会議 ICETC2023

2023年11月29日～12月1日の3日間、電子情報通信学会ソサイエティ主催によるフラグシップ国際会議 2023 International Conference on Emerging Technologies for Communications (ICETC 2023) をかでの2・7(北海道立道民活動センター：札幌市)にて対面開催した。通信ソサイエティがカバーする全研究分野を対象とした国際会議であり、通信ソサイエティ執行委員会、研専運営会議、研究専門委員会、編集会議等の通信ソサイエティを運営する会議体が連携・協同し準備・実施した。

参加登録者242名、Keynote 6件、Invited/Specialセッション26件、一般投稿からのOralセッション21件、Poster Presentationセッション101件の発表があった。優れた論文・優れたプレゼンテーション・活発な投稿に対して、Best Paper Award for Oral Session 4件、Best Paper Award for Poster Session 4件、Student Presentation Award 15件、Outstanding Contribution Award 4件を授与した。

Oralセッション、Poster Presentationセッションの全原稿はIEICE Proceeding Series上でオープンアクセスとして公開した。

(5-2) ICETC2023以外の国際会議

2023年度においては、通信ソサイエティ(研究専門委員会を含む)が主催・共同主催の国際会議2件が開催された。その他、10件の国際会議に対し技術協催、2件の国際会議に対し協賛を行った。この結果、通信ソサイエティが関与した国際会議は2022年度19件に対し14件であった。主催・共同主催の国際会議数は2021年度2件、2022年度で3件に対して、2023年度は2件であり、例年通りの開催件数となった。2024年度については2023年度末の時点で8件の国際会議への関与が予定されている。主催・共同主催・技術協催向けの国際活動資金の活用実績は1.5千円、余剰金は79.85万円である。国際会議の開催準備費用補助を目的とした主催・共同主催団体向けの資金貸与制度については、活用実績無しであった。

(6) 国際活動(シスターソサイエティ協定について)

通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として、海外会員に対して紙媒体による情報提供を行うトライアルを実施した。海外会員に対して紙媒体を郵送することにより、通信ソサイエティとのつながりを意識していただくとともに、本会論文誌や本会主催の国際会議への投稿を促す狙いがある。今後、海外会員がアクセスしやすいポータルサイトの整備等、海外会員向けコンテンツの充実化を実施する予定である。

通信ソサイエティでは、国際活動の一環として、現在以下の6つの海外学会・ソサイエティとシスターソサイエティ協定を締結し、各ソサイエティとの連携を推進している。

IEEE Communications Society (ComSoc)

Korean Institute of Communication Sciences (KICS)

Korean Institute of Electromagnetic Engineering and Science (KIEES)

Informationstechnische Gesellschaft within the Verband Der Elektrotechnik Elektronik Informationstechnik (VDE/ITG)

China Institute of Communications (CIC)

IEEE Electromagnetic Compatibility Society (EMCS)

上記のうち、2023年度に協定更新時期を迎えるKIEESとCICについて更新に向けた先方学会との調整に着手し、CICについては具体的な協定書内容の協議中で年度内の更新完了をめざす一方、KIEESについては調整を継続中で更新は次年度になる見込みである。

また、昨年度協定更新を実施したComSocについては、ComSoc側のシスターソサイエティ紹介Webページにおいて、通信ソサイエティの主要な国際活動(EB/ComEXのXplore掲載、国際会議ICETCの主催等)を新たに追記した紹介文を提案・協議しWeb反映を完了した。

(7) ホームページ・会員サービス

ホームページについては、各情報のページへの安定的なアクセスに加え、2023年6月1日のIEEE Xploreとの連携にあたり、6月1日前後には著者向け情報のページへのアクセスが大きく増加したが、現在は更新以前と同程度の状態に落ち着いて、安定的に推移している。CSアーカイブスサービスでは、

例年通り、2023年総合大会ならびに2023年ソサイエティ大会における通信ソサイエティ企画セッションの講演資料の一部を閲覧できるサービスを実施した。これらの資料はそれぞれ5月中旬、11月下旬に公開している。Eメールニュースでは、研専企画や国際会議、出版物目次などを含め、2023年度は合計28件（2022年度は60件）とコロナ禍前の水準（50件程度）の半分ほどの配信を行っている。新型コロナウイルス感染症の未曾有の経験を経て、まったく開催できなかった対面のイベントが増えつつある。しかしながら今後も、その利便性の高さからオンラインツールを活用した情報配信が活発化していくことが予想され、サービス向上や利用者拡大の検討を行っていく所存である。

(8) 通信ソサイエティ Welcome Party

Welcome partyは、学生会員や若手会員の方々が、諸先輩方と自由にコミュニケーションできる場の提供を目的として2008年から始まり、2023年度が15回目となる。2017年度からは全ソサイエティ合同での開催と規模を拡大してきたが、2019年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止を余儀なくされた。2020年度は緊急事態の状況下であっても会員同士の交流の場が失われてしまわないよう、通ソ単独にてオンラインによる開催、2021年度は通ソが主導し、全ソサイエティ合同でのオンライン開催を行った。2022年度は総合大会のハイブリッド開催の決定を受け、対面開催を基本方針に、企業紹介をメイン企画として、2017年度のものを踏襲しながら実施した。2023年度は、2022年度に引き続き対面開催となったが、学会会場の制約もあることから、懇親会との合同開催という形となった。主たる企画として、懇親会で実施される主たるイベントと並行して、各研専からのポスター展示（19研専参加）を実施した。懇親会と合同であることから、多くの学会参加者が参加しており、会場の定員の最大数である200名を大きく超える参加希望があった。現在、参加者及び各研専に対してアンケートを実施しており、このフィードバックに応じて、今後の学生会員や若手会員の学会活動参加推進のための施策を検討していく予定である。

(9) 通信ソサイエティ表彰

ソサイエティ大会期間中の9月13日に、2019年以來4年ぶりとなる特別講演および表彰式を開催した。ソサイエティ功労顕彰状（17名）、活動功労賞（115名）の贈呈式を行うとともに、会長企画特別講演として、ヤフー株式会社 Yahoo! JAPAN 研究所上席研究員の五味秀仁様による招待講演「Yahoo! JAPAN のパスワードレス認証の実現に向けた取り組み」を実施した。また、新型コロナウイルス感染症の影響で2020年から中止していた通信ソサイエティ論文賞表彰式も、これまで実施していた5月ではなくソサイエティ大会期間中の9月13日に開催した。

(10) 規程類の改定について

国際会議支援を含む国際活動全般、及び、国内における関与イベント全般において通信ソサイエティのPR効果を狙って積極使用できるよう、通信ソサイエティのロゴマークについての規程および利用マニュアルの見直し・整備を行った。

1. 3 エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティ（以下、エレソと略す）は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員（研究者）の研究成果発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の3会議体制で上記活動を効率よく実施し、会員の満足度向上を目指している。平成28年度から研究技術会議内に立ち上げた3つの領域委員会（電磁波基盤技術領域委員会、フォトニクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会）に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動にかかわる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。さらに、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の活性化に関する共通の課題は、領域連携会議にて議論を進めている。

2023年度は、エレソプレナリーセッションでは研究活性化のための他分野からの情報提供を意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「世界を変える宇宙通信」と題して最新の宇宙通信開発動向にとどまらず、宇宙通信に関わるビジネスの最前線動向を含む3つの

特別講演、総合大会のプレナリーセッションでは、「量子コンピュータのグローバル動向および産業創出の挑戦」と題して、量子コンピュータの実用化をビジネスサイドから引き上げる営みの状況等に関する特別講演を行った。いずれも、単なる技術の最新動向を伝えるだけでなく、産業界、ビジネス観点の内容を含める事で社会実装に向け、研究開発方針策定の参考となる要素を含めた。今後、情報通信用エレクトロニクス今後の展開（あらたな研究テーマ）を考えるトリガーとなることを期待している。また、学生員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の提供を目指して、総合大会の懇親会を、大会委員と全ソサイエティ共催の Welcome Party との合同開催として、エレソがオープニングの企画・司会を務め実施した。

また、組織自体のサステナビリティを担保、つまり将来にわたり魅力あるエレソ活動を目的として、委員会等活動の効率化施策を実行した。例えば、これまで 2.5 時間かかっていた執行委員会を要点のみに絞る事で、議論をメインとし 1 時間程度で終了するよう運営し、資料準備時間の削減を含めて運営効率化を進めた。さらには、川西会長自ら、研専の在り方の議論を持ち掛け、エレソ独自の組織形態である領域での事務作業の集約化等を目指し、研専代表者と時間をかけ直接対話する施策も行った。意見集約が今年度実施完了できたため、次年度以降に具体化を進める予定である。加えて、効率化の施策としては、これまでエレソ独自のファイル共有サーバーや、アーカイブ公開サーバーを有していたが、これらの継続はコスト、金銭的コストだけでなく維持管理の稼働コストも考え、本部サーバーへの集約を推し進める方針を決め具体的に進めている。今年度は 5 回の執行委員会も、ハイブリッド会議と、完全オンライン会議でメリハリをつけるソサイエティの運営を行い、より次世代に繋げられるよう効率化を進めた。

以下、本年度のソサイエティの主な活動を 3 つの会議ごとに記す。

(1) 企画会議：例年通りエレソ全体の財務立案と把握、企画の取りまとめと発信、会員サービスの充実、对外広報などを担当した。

(1-1) 予算：今年度に引き続き次年度も「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」に関する予算を確保し、会員活性化・増加施策の強化を図った。2023 年度については、コロナ禍の影響を想定しつつも大型の国際会議の開催や実施事業調整後において予算案段階では約 558 万円の黒字であった。12 月末時点での執行状況は、2022 年度と比較して収支ともに増加傾向にあり黒字を見込んでいるが、黒字額は減少する見込みである。学会活動が対面で実施できるようになり活動そのものは活性化し収益が増加しているが、昨年度の収支差額に応じた管理費の支出増額が大きく本年度の黒字額の圧縮につながっている。2024 年度については、国際会議の収益が現時点で計上されていない点と実施事業調整等を反映して約 933 万円の赤字を見込んだ予算案を策定した。会員減少による収益減少傾向が続いており、引き続き「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」の有効活用を図るとともに、コロナからの回復を踏まえて財務の安定を図る必要がある。

(1-2) 顕彰：エレクトロニクスソサイエティ活動功労表彰として 29 名の表彰を行った。例年通り、令和 5 年度（第 27 回）エレクトロニクスソサイエティ賞の選考を実施し、3 分野において表彰を行う予定である。また、2023 年度エレソフェロー推薦候補者を 3 名、2023 年度シニア会員候補者を 10 名選定した。2023 年ソサイエティ大会での発表に基づき 6 名の優秀な学生を選考し、2023 年総合大会（ハイブリッド開催）においてエレソ学生奨励賞を授与した。

(1-3) 広報：エレソ Newsletter は年 4 回発行した。各号において、各領域委員会の活動紹介、各賞受賞者、技術解説の寄稿などを編集し、記事内容の充実を図った。

(2) 編集出版会議：例年通り出版戦略、編集出版関係財務の立案と把握、著作権管理方法、3 論文誌発行を担当した。エレソ各論文誌の存在感が一層高まるよう、以下の施策を進めた。

(2-1) 和文誌：総合大会、ソサイエティ大会で発表のあった注目研究をピックアップし、招待論文の依頼・掲載を継続して進め、論文誌の魅力増大を図った。これは多くを占める本会の日本人会員（特に学生や若手研究者）に対し、母国語による効率的な教育・知識普及、最新技術動向の把握の効果が望めるためである。また、論文誌活性化の一環として、学生を対象とした「学生論文特集」、それぞれの分野の第一人者の研究者に執筆を依頼した「エレクトロニクス分野におけるシミュレーション技術の進

展論文特集」 「LiDAR 関連技術とその応用論文特集」 「マイクロ波ミリ波論文特集」 を企画し、それぞれ、J106-C No.4、J106-C No.5、J106-C No.6、J107-C No.1 に掲載した。また、新たな論文投稿増加施策として、2023 年 4 月から技術研究報告様式での和文誌投稿を受け入れ、研究会技報と和文誌の同時投稿による論文掲載料の割引を開始した。

(2-2) 英文誌：引き続き投稿件数の増加を図るため、投稿ウェブサイトで投稿促進を行うと共に、各国際会議と連携して、論文誌としての注目度の向上が期待される特集号を中核とする方針の下、編集活動を進めた。投稿数、閲覧数の増加、および論文誌のステータス、インパクトファクタ向上を目的に、引用論文数の下限設定や、JSTAGE におけるオープンアクセス化などを実施した。各施策の効果は、インパクトファクタなどの数値に反映されるのに一定の時間がかかるものと考えられるため、効果検証を行うために敢えて新規の施策は行わず、特集号を中核とした施策を着実に推進・実施した。

(2-3) ELEX：全面オープンアクセスという特長を堅持し、発刊以来、速報性の維持・向上につとめてきた。近年はインパクトファクタの向上を目指して編集体制の強化や最低引用論文数の厳格化など様々な施策を実施してきている。今年度も引き続き、インパクトファクタのさらなる向上を目指して、国際的な認知向上に向けた海外査読員への積極査読依頼、著名な研究者によるレビュー論文の増加施策などを検討、実施した。CC マークの付与に際してテンプレート改訂を実施した。加えて、Gold OA 化 (Open Access)、DOAJ (Directory of Open Access Journals) への ELEX 誌の採録に向けた取り組みを進めている。

(3) 研究技術会議：今年度も 3 つの技術領域委員会と領域連携会議が協力して、研究専門委員会 (研専) の活性化策立案、新規/特別研専の設立/継続審議、研専財務掌握、全国大会統括、国際会議支援、対外活動支援を実施した。具体的な施策の一つとして、回路・デバイス・境界技術領域にて、韓国における半導体分野の学会とのシスターソサイエティ締結および Korea Electronics Section における実質的な活動計画の策定および準備作業に着手した。

(3-1) 研究専門委員会等の活動： 15 の研究専門委員会、5 の特別研究専門委員会、6 の国際会議国内委員会が、各種の研究会や全国大会セッションの企画運営、国際会議などの研究学術活動を行った。

(3-2) 国際会議：2023 年 4 月から 2024 年 3 月にかけて、エレクトロ協催・協賛・後援として 7 個の国際会議 (IEEE Symposium on Low-Power and High-Speed Chips and Systems (COOL Chips 26), The 9th International Symposium on Organic and Inorganic Electronic Materials and Related Nanotechnologies (EM-NANO 2023), 2023 Asia-Pacific Workshop on Advanced Semiconductor Devices (AWAD2023), 28th Microoptics Conference (MOC2023), 2023 International Topical Meeting on Microwave Photonics (MWP2023), 2023 International Workshop on Dielectric thin Films for Future ULSI Devices: Science and Technology (IWDTF2023), Asia-Pacific Microwave Conference (APMC 2023)) を開催した。

(3-3) 2023 年 (令和 5 年) ソサイエティ大会では一般講演 240 件に加えて、シンポジウム講演 10 件、ソサイエティ特別企画 1 セッション、依頼シンポジウム 4 セッション (共催 1 セッション含む) を実施した。2024 年 (令和 6 年) 総合大会は一般講演 309 件に加えて、シンポジウム講演 13 件、ソサイエティ特別企画 1 セッション、チュートリアル 1 セッション、依頼シンポジウム 9 セッション (共催 4 セッション含む) を実施した。

(3-4) リーダーズ・ミーティング (研専幹事意見交換会) を 2023 年 7 月に開催し、研究専門委員会運営に関わる幹事、幹事補佐及び運営委員を対象に、各会議から研専への施策や依頼事項の説明及び質疑を行い、研専運営に関する手続き、情報等に関する理解を深めた。今年度は説明を簡素化して必要な情報がどこにあるのか、という点に絞って説明した。残りの時間は今後のソサイエティ運営に関して議論した。この議論を参考にし、施策を検討していく。

1. 4 情報・システムソサイエティ

情報・システムソサイエティ (以下、ISS と略す) は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISS が、同研究分野の活動の基

盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2023年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。

(1) 運営委員会の体制

会員数増強、会員サービス向上、ダイバーシティ向上等の課題は、本会全体にまつわる重要な課題であると同時に、ISS内でも集中的な検討が必要な喫緊の課題である。ISSでは、こうした中長期的な課題を検討するため、2022年度からISS未来企画委員会を設けている。

(2) 論文誌（和文論文誌・英文論文誌）

(2-1) 和文誌

投稿数の確保の対策として継続的な特集号の企画を行っており、2023年度は3件の特集号を発行した。例年、和文誌編集委員会が特集編集委員会となって企画している「学生論文特集」については、2023年度も編集作業を進め、2024年4月に12件の論文を掲載予定である（投稿数45件）。現在、和文論文誌Dへの投稿件数は減少傾向にあり、さらに特集号の企画提案数も昨年と比較して減少している。そのため、2023年度は編集委員が関連する研究専門委員会に特集号の企画提案を依頼する試みを行っている。臨時査読委員の査読の質の記録と、査読の質が高い委員を常任査読委員として推薦するプロセスも継続して実施しており、開始時から常任査読委員が115名増加（2023年度中に1名増加）した。数年にわたるコロナ禍もある程度の落ち着きを見せてきたが、2023年度も編集委員会はすべてオンライン開催を継続している。一方で、判定報告書の質すなわち査読の質を維持するための幹事団による全数チェックや、編集委員の編集能力向上のための委員会への出席率改善策などは継続実施できている。また、編集作業へのSNSの利用についても検討を行っている。現在はメールベースで判定報告書案に関する審議や幹事団によるチェックを行っているため、メールの見落としやスパムフィルタの誤検出による不達のため著者通知に時間を要することがあった。そこでこれらの作業にSlackを導入することで、見落としや不達を防ぐとともに、作業の効率化を図る。本年度はSlack上で編集作業を行うためのルール制定および試行を行い、2024年度から本格的に導入を行う予定である。

(2-2) 英文誌

英文誌では他分冊と同様にJ-STAGEに早期公開版を掲載することにした。これにより引用件数の増加が期待される。またWeb of ScienceのIFは、0.411（2016）、0.5（2017）、0.576（2018）、0.449（2019）、0.559（2020）、0.695（2021）、0.72（2022）と増加しており、投稿数の増加にも繋がると考えられる。また特集号については、12件が発行され、ほぼ例年どおりの発行件数となった。投稿数の多い特集号は、“Deep Learning Technologies: Architecture, Optimization, Techniques, and Applications”（投稿数89件、内Letter12件、採録数24件、内Letter6件）、“Information and Communication System Security”（投稿数22件、内Letter1件、採録数10件、内Letter0件）などであった。特に海外編集委員による特集には投稿が多かった。さらに、投稿者へのサービス改善の1つとして、査読日数の削減を目指しており、査読委員の割り当てが遅れ気味の編集委員に対し、週一回の自動メールとは別に担当幹事から直接催促メールを出している。これに返信して作業を急ぐ編集委員も多く、平均査読期間の短縮が期待される。

(3) 研究会

2023年度は、23の研究専門委員会と、4つの特別研究専門委員会により活発な活動を行った。第一種研究会開催総数は111回（前年比98.2%）、発表総件数は1,642件（確定前の速報値、前年比89.8%）であった。1つの特別研究専門委員会が継続を廃止した一方、1つの特別研究専門委員会が来年度から常設研究専門委員会として運営を行っていく予定である。外部資金受け入れは計2件（20万円）（前年比200%）を承認・実施した。またFIT2023で開催された併催（同会場・会期内で開催した）研究会（計8件）において、12の研究専門委員会が運営に関わった。

after コロナ時代における研究会のあり方として、ハイブリッド開催が挙げられる。発表者・参加者両方にとって参加形態の自由度が上がる一方、運営側の負担増大が問題となる。負担軽減策の1つとして、前年度整備したハイブリッド開催に係る配信機材について貸出しを実施した。今後、ハイブリッド開催の継続について研究専門委員会の意向を最大限尊重しつつ、ソサイエティとして可能なサポートを行っていく。

研究会の運用面においては、研究会に対する非会員発表者に対する参加費設定の議論を進め、2024年度より非会員一般および非会員学生に対して必須で参加費の支払いをするように規定の変更を実施した。また、第一種研究会の開催はこれまで年4回以上を暗黙とし規則として運用してきたが、研究会開催回数を減らしたいという要望を研専より受け、開催回数を減らしても1回当たりの人数が多ければ費用対効果などに影響はないとの結論に至り年3回以上の開催を必須とするよう規定の変更を実施した。

(4) 大会・FIT

(4-1) FIT2023 (情報科学技術フォーラム)

ソサイエティ大会 (ISS/HCG) と情報処理学会 (IPSJ) の秋の全国大会を統合した FIT2023 を、2023年9月6日～8日の3日間でハイブリッド開催した。参加者数は2,256名 (前年2,181名) であった。現地来場者は1,062名となっており、ハイブリッド開催に対する一定の需要が窺えた。選奨論文104件、一般論文463件、の計567件 (前年538件) の研究発表が行われたほか、トップコンファレンスセッションの17セッション・98講演を含め、計25件の企画セッションが実施された。FITの参加者の他、研究会のみとして160名の参加者があった。学術賞表彰式も開催し、FIT2023 船井業績賞 (1件)、および船井ベストペーパー (2編)、FIT 論文賞 (7編)、ヤングリサーチャー賞 (8名) を表彰した。

FIT2024 は、広島工業大学 (五日市キャンパス) で2024年9月4日～6日にハイブリッド形式にて開催予定である。引き続き、各種企画の一層の充実など参加者に対するメリットの訴求を図る予定である。

(4-2) 2024年総合大会

2024年3月4日～8日に対面で開催された総合大会に合わせ、ISSは1件のパネルセッション、1件の依頼シンポジウムセッション、及びソサイエティ特別企画であるジュニア&学生ポスターセッションを実施した。ジュニア&学生ポスターセッションの申込総数は191件であり、高専生 (専攻科を含む) の発表が31件、高校生の発表が12件、小学生の発表も1件含まれていた。選奨枠セッションには96件 (うち小学生～大学3年相当のジュニア会員世代43件) の発表があり、表彰式では優秀ポスター賞 (6件)、特別賞 (4件) ジュニア奨励賞 (3件) を表彰した。

(5) 国際化施策

本ソサイエティの活動の国際化に向けた取り組みとして、2023年度は、以下の国際会議の主催・協賛を実施した。

- 18th International Conference on Machine Vision Application (MVA 2023), July 23-25, 2023, Hamamatsu, Japan (本ソサイエティ主催)
- International Symposium on Highly-Efficient Accelerators and Reconfigurable Technologies (HEART 2023), June 14-16, 2023, Shiga, Japan (本ソサイエティ技術協賛)

特に、MVA 2023はPRMU研究専門委員会が窓口となり、ISSが主催し、IEEE Robotics and Automation Society (IEEE RAS) による Technical co-sponsorship と International Association for Pattern Recognition (IAPR) による Endorsement を受けて開催された国際会議であり、ISSの活動の国際化の重要なモデルケースとなるものである。今後は、ISSの研究専門委員会が深く関係する国際会議をベースに、ISSが主催・共催・協賛する国際会議を増やすことにより、本学会の国際的プレゼンスの更なる向上を目指していく。

また、ISSが若手研究者育成と国際競争力強化のための施策として運用を開始したメンター制度とリンクする形で、国際会議参加支援制度の整備を進めた。ISS国際会議参加支援制度規程案を既に作成済みであり、今年度内もしくは次年度の早い段階での運用開始に向けた手続きを進めている。

(6) その他

(6-1) ソサイエティ誌

本年度もソサイエティ誌は、5回/年 (通常号4回と特別号) の発行を継続し、研究会活動を紹介するためのインタビュー記事、研究会の会議報告等を掲載した。さらに、ソサイエティ活動の活性化を目的として、研究会、国際会議、コンテスト等の幅広い活動内容の情報発信を積極的に研究会に呼びかけることで、多彩な記事が掲載され、after コロナ時代におけるソサイエティ会員の情報共有、円滑な連携を支援した。

(6-2) 選奨

ISS では、ソサイエティの独自性向上と活性化のための施策として、サーベイ論文、先見論文、連作論文、システム開発論文を選定対象とするソサイエティ論文賞を設定している。ソサイエティ活動について顕著な貢献があった会員を選奨する活動功労賞も設定し、2009 年度からは、従来の活動功労賞を「活動功労賞」と「査読功労賞」に発展的に分割し、貢献のあった会員を選奨している。2023 年度は 2023 年度活動功労賞（10 名）ならびに査読功労賞（10 名）の授与を行った。また、2024 年総合大会 ISS 特別企画ジュニア&学生ポスターセッションにおいて、優秀賞（6 名）、特別賞（4 名）、ジュニア奨励賞（3 名）を決定し、表彰式を行った。

(6-3) 広報

今年度は、ソサイエティ誌や総合大会、受賞者等について随時ウェブサイトへの掲載を行いつつ、ML 配信の審議を 1 件実施した。また、昨年度開始した戦略的講演の実施に関する審議と情報共有の機能、及びメーリングリストのメンテナンスを実施し、昨年度更改した Web サイトについても各研専幹事からの要望や指摘を踏まえて事務局と連携して順次改善を図った。さらに、ISS 入会ページにおいても研究専門委員会のページや電子情報通信学会ホームページへのリンクを更新し、ISS の最新活動内容を提供できるようにした。

1. 5 NOLTA ソサイエティ

(1) ソサイエティ運営

今年度は、COVID-19 に伴う制限が緩和されたことを受け、研究会、大会、国際会議等は完全オンライン形式あるいはハイブリッド形式を原則とする開催から、完全対面形式を原則とする開催に移行した。また、国際会議等の準備状況や方針の確認を各回の委員会にて定期的に行った。その他、協賛や技術共催など、他学会への協力を積極的に推進するとともに、MoU の新規締結や更新に関する検討も行った。また、2018 年度よりソサイエティ次期会長の選挙を、学会の選挙システムを用いて行うことになったが、選出の手続き等の事務処理の実態にあわせて、申し合わせの見直しを行った。

(2) 研究活動とその活性化

(2-1) 研究専門委員会の活動

本ソサイエティには非線形問題研究専門委員会(NLP)と複雑コミュニケーションサイエンス研究専門委員会(CCS)の 2 つの研究専門委員会がある。今年度の研究会は、COVID-19 に伴う制限が緩和されたことを受け、いずれの研究会も完全対面で開催された。NLP は年間 6 回開催され講演数は 116 件であった。CCS は年間 4 回開催され講演数は 40 件であった。NLP と CCS それぞれにおいて前年度の研究会発表論文の中から優秀な発表に対する奨励賞受賞者を選定し、NOLTA ソサイエティ大会において表彰した。

(2-2) 非線形理論とその応用に関する国際シンポジウム

(International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications: NOLTA)

・ NOLTA2023

2023 年 9 月 26 日～29 日にイタリア・カタニーヤおよびオンラインのハイブリッド形式で開催された。参加者数は 289 名、発表件数は 230 件、セッション数は合計 54 セッションであった。

・ NOLTA2024

2024 年 12 月 3 日～6 日にベトナム・ハロンベイでの開催を目指し、準備を進めている。現時点では完全対面で開催する予定である。

・ NOLTA2025

2025 年 12 月 2 日～5 日に沖縄での開催を目指し、準備を開始した。

(2-3) Japan-Korea Joint Workshop on Complex Communication Science (JKCCS / KJCCS)

・ KJCCS2024

2024 年 1 月 29 日～31 日に別府にて開催された。参加者数は 131 名、発表件数は 87 件、セッション数はポスターセッションを含めて合計 10 セッションであった。

・JKCCS2025

韓国マルチメディア学会 (KMMS) がホストとして開催する予定である。例年の開催地は韓国で単独開催であったが、2025 年は KMMS のフラッグシップ国際会議との併催の可能性も含めて、検討を進めている。

(2-4) 総合大会・ソサイエティ大会における活動

2023 年ソサイエティ大会 (名古屋大学) の一般セッション講演数は NLP 27 件、CCS 7 件の合計 34 件であった。また、ソサイエティ大会では ESS と合同でソサイエティ表彰贈呈式を開催した。2024 年総合大会 (広島大学) では 1 件の依頼シンポジウムセッションを開催した。一般セッション講演数は NLP 25 件、CCS 17 件の合計 42 件であった。

(2-5) NOLTA ソサイエティ大会

ソサイエティ全体の活動を総括して、NOLTA ソサイエティがカバーする学問分野の更なる発展・充実を図るため、NOLTA ソサイエティ独自のソサイエティ大会を開催している。今年度は、2023 年 6 月 10 日に東京都市大学にて完全対面の形式で開催された。一般講演数は 43 件であり、この他、1 件のフェロー記念講演、1 件の論文賞受賞記念講演、8 件の研究会奨励賞受賞者講演などが行われた。

(3) 編集活動

(3-1) 論文誌の編集活動

英文電子ジャーナル「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA)」(オープンアクセス(OA)ジャーナル) を 4 回発行し、2023 年度 (Vol.14, No.2~Vol.15, No.1) は 59 編の論文、5 編の巻頭言、(総ページ数 844) を掲載した。それらの発行の中で特集企画 1 件と小特集企画 4 回を実施し、さらに、招待論文を 2 編掲載することによって NOLTA の内容の充実を図った。また、NOLTA は 2023 年 6 月に Clarivate 社の Journal Impact Factor が付与された。引き続き他の Citation Index が付与されることを目指している。

1. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として 1995 年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由に開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、他分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入口的役割を果たしている。

2023 年度は、運営委員会をオンラインで開催したものの、各研究会や HCG シンポジウムでは対面のみでの開催も増え、ハイブリッド開催の良さも活かした企画・実施がなされた。論文誌での特集号の企画は従来通り継続され、学際研究の発表・議論の場を提供した。今年度は、HCG の紹介のため、3 月に開催された総合大会において企画セッションを実施した。ただ、研究会の存在意義を再確認した結果、2 つの特別研専が解散となった。2023 年度の主な活動概要を示す。

(1) 研究会活動

2023 年度は、4 つの研究専門委員会、および 3 つの特別研究専門委員会、1 つの第三種研究会運営委員会による研究会活動が行われた。なお、ヒューマンプローブ特別研専 (HPB) と魅力工学特別研専 (AC) は、2023 年度をもって役目を終え解散したため、委員会数には加えていない。

(2) HCG シンポジウム

2023 年 12 月 11 日から 13 日まで福岡県北九州市 AIM 館にて、HCG シンポジウム 2023 を開催した。このシンポジウムは HCG の全ての研究専門委員会、特別研究専門委員会、運営委員会が合同で運営され、プログラムも研専ごとではなく研究内容によって構成し、研専の枠を越えた議論をおこなう場が提供されている。実施形態は、口頭発表はハイブリッド、インタラクティブ発表は対面のみであった。

発表件数は117件（招待講演：1件，チュートリアル講演：1件，特集テーマセッション：3件，口頭発表とインタラクティブ発表：80件，インタラクティブ発表のみ：32件）であり，2022年度と同程度の規模であった．参加者数は205名であり，ほとんどが現地参加であり，やはり対面でのコミュニケーションに対する希望が強い結果となった．また，今回は，初めての試みとして，インタラクティブ発表用の全てのポスターを会期中掲示できるようにした．これに対して，参加者からは，いつでも閲覧できたので良かったとの好評価を得た．

次回，2024年度のHCGシンポジウムは，12月11日～13日の3日間，石川県金沢市にて，開催予定である．

(3) 総合大会企画セッション

電子情報通信学会内での，HCGの知名度を向上させるべく，初の試みとして総合大会において「2024年HCGの旅」を企画・実施した．そのセッションでは，HCGの成り立ちから現在の構成を紹介した後，4つの研究専門委員会（ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（HCS），ヒューマン情報処理研究会（HIP），メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎研究会（MVE），福祉情報工学研究会（WIT））の特徴と代表的な研究例を紹介し，HCGへの参加を促すと共に，他ソサイエティや他学会との共催可能性を強くPRした．

(4) 研究会運営の改革

財務将来構想ワーキンググループ（WG）の提言に基づき，HCGシンポジウムを主たる収益事業として位置づけて，魅力ある内容にしつつ収益をあげて，グループの収入源とすることを主たる施策として実施した．魅力的な講演を揃え，参加人数を増やすことを試みた．併せて，現地の開催補助金制度（北九州市の共催や北九州コンベンション協会による助成）を活用し収支改善を実現した．また，現在，三種研究会に属している研究会については，その在り方を議論し，工学以外の研究者が多いという事情にも配慮しながら，特別研専への変更を目指すこととなった．

(5) 編集活動

HCGは独自の論文誌を有していないが，2004年から隔年で，2013年からは毎年，和文論文誌のA，D，あるいは英文論文誌のいずれかで「ヒューマンコミュニケーション」特集号を発行してきた．2016年度からは常設の編集委員会を設置して活動している．次回の特集号として，和文A（2025年3月発行予定）と英文D（2025年6月発行予定）を準備している（投稿〆切は2024年4月22日）．

(5) 表彰活動

2023年度ヒューマンコミュニケーション賞（HC賞）の選定を行い，6件を選考し，HCGシンポジウム2023の会場において表彰式を行った．本賞は第一種研究会の発表から25件につき1件，以降50件ごとに1件を基準とし，各研究会で組織したHC賞審査委員会において選考した．またHCGシンポジウム2023の発表の中から最優秀インタラクティブ発表賞4件，優秀インタラクティブ発表賞5件，学生優秀インタラクティブ発表賞7件，特集テーマセッション賞4件を選考し，表彰した．

2. ソサイエティ大会に関する事項(定款 第4条 口号)

2. 1 ソサイエティ大会

下記の期日・会場において基礎・境界、NOLTA、通信、エレクトロニクスの4ソサイエティが合同して開催した。

期 日 2023年9月12日(火)～15日(金)
会 場 名古屋大学 東山キャンパス
参加者 2,626名
懇親会 ザ・コンダーハウス

(a) 企画講演セッション数

企画種別	大会委員会	ソサイエティ				合計
		基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス	
大会委員会企画	3	—	—	—	—	3
ソサイエティ特別企画	—	※2	※1	3	1	7
パネルセッション	—	1	0	1	0	2
チュートリアルセッション	—	1	0	2	0	3
依頼シンポジウムセッション	—	2	0	‡12	‡4	18
合計	3	※6	※1	‡18	‡5	33

※基礎・境界と NOLTA の共催企画 1 件を含む。

‡通信とエレクトロニクスの共催企画 1 件を含む。

(b) 公募講演件数

	ソサイエティ				合計	実数
	基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス		
一般講演	142	34	732	240	1148	1148
シンポジウム講演	0	0	40	10	50	50
合計	142	34	772	250	1198	1198

2. 2 FIT2023(第 22 回情報科学技術フォーラム)

下記の期日・会場において情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して開催した。

期 日 2023 年 9 月 6 日(水)～8 日(金)

会 場 大阪公立大学 中百舌鳥キャンパス (ハイブリッド開催)

参加者 2,256 名 (現地来場者 1,062 名)

懇親会 65 名程度 (大学内で開催)

イベント企画	研究会提案企画	4 件
	委員会提案企画	3 件
	現地提案企画	1 件
	特別企画	1 件
	トップコンファレンスセッション	17 件
	スポンサー系セッション	4 件
講演件数		545 講演

3. 国際会議に関する事項(定款 第 4 条 ロ号、へ号)

次のとおり開催した。

会 議 名	開催年月日	参加者数	論文数	場 所	
IEEE Symposium on Low-Power and High-Speed Chips and Systems (COOL Chips 26)	2023.4.19～4.21	141	28	Tokyo, Japan	ES
光通信インフラの飛躍的な高度化に関する国際シンポジウム (EXAT2023)	2023.5.17～5.19	133名	31	日本島根	CS
The 9th International Symposium on Organic and Inorganic Electronic Materials and Related Nanotechnologies (EM-NANO 2023)	2023.6.5～6.8	250	200	Kanazawa, Japan	ES
The 38th International Technical Conference	2023.6.25～	630	380	South	ESS

on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2023)	6.27			Korea	
2023 Asia-Pacific Workshop on Advanced Semiconductor Devices (AWAD2023)	2023.7.10～7.11	170	93	Tokyo, Japan	ES
18th International Conference on Machine Vision Applications (MVA2023)	2023.07.23～25	139	70	浜松	ISS
The 18th International Workshop on Security (IWSEC 2023)	2023.8.28～8.30	102	24	Kanagawa	ESS
The 2023 International Workshop on Smart Info-Media Systems in Asia (SISA 2023)	2023.8.31～9.1	56	34	Okinawa	ESS
アジア・太平洋 ネットワーク運用と管理シンポジウム (APNOMS 2023)	2023.9.6～9.8	135名	96	韓国世宗	CS
28th Micro optics Conference (MOC2023)	2023.9.24～9.27	220	150	Miyazaki, Japan	ES
2023 International Topical Meeting on Microwave Photonics (MWP2023)	2023.10.15～10.18	150	50	Nanjing, China	ES
2023 International Workshop on Dielectric thin Films for Future ULSI Devices: Science and Technology (IWDTF2023)	2023.10.23～10.25	100	50	Kanazawa, Japan	ES
2023 International Conference on Emerging Technologies for Communications (ICETC 2023)	2023.11.29～12.1	242名	122	札幌	CS
Asia-Pacific Microwave Conference (APMC 2023)	2023.12.5～12.8	1000	750	Taipei, Taiwan	ES
The 29th Asia and South Pacific Design Automation Conference (ASP-DAC2024)	2024.1.21～1.24	452	139	South Korea	ESS
The 12th International Workshop on Image Media Quality and its Applications (IMQA2024)	2024.2.27～2.28	24	15	Osaka	ESS

4. 出版に関する事項(定款 第4条 イ号)

4. 1 和文論文誌の発行状況

各ソサイエティ別(A・B・C・D)に電子版を本会サイトにて公開した。
掲載総ページ数は1,853 ページである。

分冊	論文	レター	その他	計	特集回数
	件数 ページ数	件数 ページ数	ページ数	件数 ページ数	回
JA	16	6		22	2
	172	25	3	200	
JB	68	19		87	6
	723	89	8	820	
JC	42	6		48	4
	361	14	4	379	
JD	38	10		48	3
	408	42	4	454	
計	164	41		205	15
	1,664	170	19	1,853	

※その他：巻頭言、正誤

4. 2 英文論文誌の発行状況

各ソサイエティ別(A・B・C・D)に電子版を本会サイト及びJ-STAGEにて公開した。
EBについては、2024年2月号からIEEE Xploreでも公開を開始した。
掲載総ページ数は5,996ページである。

分冊	論文	レター	その他	計	特集回数
	件数 ページ数	件数 ページ数	ページ数	件数 ページ数	
EA	134	55		189	11
	1,305	235	15	1,555	
EB	154	0		154	6
	1,555	0	7	1,562	
EC	71	33		104	11
	615	144	16	775	
ED	174	59		233	12
	1,830	257	17	2,104	
計	533	147		680	40
	5,305	636	55	5,996	

※その他：巻頭言、正誤

4. 3 電子ジャーナルの発行状況

(1)NOLTA ソサイエティ

NOLTA ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA)」(年4回発行)に59件、844ページを掲載した。

(2)通信ソサイエティ

通信ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「IEICE Communications Express(略称 ComEX)」(月1回発行)に122件、636ページを掲載した。

(3)エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティでは、ペーパーレス研究速報英文論文誌「IEICE Electronics Express(略称 ELEX)」(月2回発行)に201件、1,148ページを掲載した。

4. 4 ニュースレター、ソサイエティ誌の発行状況

各ソサイエティ及びグループでニュースレター、ソサイエティ誌を下記のとおり発行した。

(1) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ	Fundamentals Review	4回	344ページ
(2) 通信ソサイエティ	マガジン誌(通信ソサイエティマガジン)	4回	376ページ
(3) エレクトロニクスソサイエティ	ニュースレター	4回	79ページ
(4) 情報・システムソサイエティ	ニュースレター	5回	80ページ
(5) ヒューマンコミュニケーショングループ	ニュースレター (Web)	4回	

5. 選奨に関する事項(定款 第4条 ホ号、へ号)

所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり各受賞者を決定した。

5. 1 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

(1)基礎・境界ソサイエティ

(1-1)功労賞

業 績	貢 献 者

2023 年暗号と情報セキュリティシンポジウム実行委員長としての貢献	花岡悟一郎
アジア南太平洋設計自動化会議 2023 組織委員長(General Chair)としての貢献	高橋 篤司

以上 2 名

(1-2)貢献賞

(1-2-1) ソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
基礎・境界ソサイエティ「庶務幹事」としての貢献	太田 隆博
基礎・境界ソサイエティ「会計幹事」としての貢献	廣友 雅徳
基礎・境界ソサイエティ「事業担当幹事」としての貢献	葛岡 成晃
基礎・境界ソサイエティ「大会担当幹事」としての貢献	松井 一
基礎・境界ソサイエティ「電子広報担当幹事」としての貢献	森島 佑
基礎・境界ソサイエティ「英文論文誌編集幹事」としての貢献	川村 新
基礎・境界ソサイエティ「ソサイエティ誌担当幹事」としての貢献	八巻 俊輔

以上 7 名

(1-2-2) サブソサイエティ運営、研究専門委員会運営

業 績	貢 献 者
システムと信号処理サブソサイエティおよびシステム数理と応用研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	小林 孝一

以上 1 名

(1-2-3) サブソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
情報理論とその応用サブソサイエティの運営及び活動に対する貢献	三村 和史

以上 1 名

(1-2-4) 研究専門委員会運営

業 績	貢 献 者
超音波研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	平田慎之介
安全・安心な生活と ICT 研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	新 浩一
イメージ・メディア・クオリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	工藤 博章
バイオメトリクス研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	佐野恵美子
応用音響研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	西浦 敬信
VLSI 設計技術研究専門委員会の運営および活動に対する貢献	宮村 信
回路とシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	伊藤 尚
信号処理研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	田中 雄一
ハードウェアセキュリティ研究専門委員会の運営および活動に対する貢献	藤本 大介
高度交通システム(ITS)研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	金 帝演
情報理論研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	野崎 隆之
スマートインフォメディアシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	坂東 幸浩
情報セキュリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	米山 一樹
技術と社会・倫理研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	鈴木 大助
ワイドバンドシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	木下 雅之

以上 15 名

(1-2-5) 会議運営

業 績	貢 献 者
国際会議 IWSEC2022 の運営に対する貢献	國廣 昇
国際会議 SISA2022 の運営に対する貢献	辻 裕之
国際会議 IMQA2022 Vice Co-Chair としての貢献	前田 充

第 45 回情報理論とその応用シンポジウムの運営に対する貢献	小嶋 徹也
バイオメトリクスと認識・認証シンポジウム 2022 の運営に対する貢献	高野 博史
第 35 回回路とシステムワークショップの運営に対する貢献	小中 英嗣
第 37 回信号処理シンポジウムの運営に対する貢献	村松 正吾
国際会議 ISITA2022 の運営に対する貢献	古賀 弘樹
アジア南太平洋設計自動化会議 2023 の組織委員会の運営に対する貢献	小平 行秀

以上 9 名

(1-2-6) その他の事業

業 績	貢 献 者
2023 年暗号と情報セキュリティ小特集号編集幹事としての貢献	穴田 啓晃

以上 1 名

(2) NOLTA ソサイエティ

(2-1) Service Award (貢献賞)

業 績	貢 献 者
Devoted Contribution to Operation of NOLTA Society as A Director, General Affairs	松原 崇
Devoted Contribution to Operation of 2022 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA 2022) as A General Chair	堀尾 喜彦
Devoted Contribution to Technical Committee on Nonlinear Problems as A Secretary	吉岡 大三郎
Devoted Contribution to Technical Committee on Complex Communication Sciences as A Secretary	眞田 耕輔

以上 4 名

(3) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

Fundamentals Review ベストオーサー賞

論 説	著 者
オンライン教育と著作権—改正著作権法第 35 条の施行と課題—	芳賀 高洋

以上 1 編

5. 2 通信ソサイエティ

(1)ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
【優秀論文賞】 MTD を備え高スループット通信を実現するサーバの開発	田邊 優人(広島市大) 前田 香織(広島市大) 大石 恭弘(インターネットイニシアティブ) 相原 玲二(広島大) 高野 知佐(広島市大)
深層展開を用いた GNSS 測位のデータ駆動最適化	葉山 祐輝(同志社大) 衣斐 信介(同志社大) 高橋 拓海(阪大) 岩井 誠人(同志社大)
パイプライン処理によるフレーム内分割 JPEG 圧縮を用いたレースドローン向け低遅延 IP 映像伝送システムの設計と実装	水野 史暁(慶大) 松谷 健史(慶大) 三次 仁(慶大) 中村 修(慶大)
【チュートリアル論文賞】 汎用計算機ベースの高速な情報指向ネットワークルータの実装	武政 淳二(阪大) 小泉 佑揮(阪大) 長谷川 亨(阪大)

【Best Paper Award】 Demonstration of Chaos-Based Radio Encryption Modulation Scheme through Wired Transmission Experiments	Kenya Tomita(Nagoya Inst. Tech.) Mamoru Okumura (Nagoya Inst. Tech.) Eiji Okamoto (Nagoya Inst. Tech.)
Unified 6G Waveform Design based on DFT-s-OFDM Enhancements	Juan Liu(DOCOMO Beijing Commun. Lab.) Xiaolin Hou(DOCOMO Beijing Commun. Lab.) Wenjia Liu(DOCOMO Beijing Commun. Lab.) Lan Chen(DOCOMO Beijing Commun. Lab.) Yoshihisa Kishiyama(NTT DOCOMO) Takahiro Asai(NTT DOCOMO)
Analog-Circuit Domain Cancellation with Optimal Feedback Path Selection on Full-Duplex Relay Systems	Hayato Fukuzono(NTT) Keita Kuriyama(NTT) Masafumi Yoshioka(NTT) Toshifumi Miyagi(NTT) Takeshi Onizawa(NTT)
Toward Predictive Modeling of Solar Power Generation for Multiple Power Plants	Kundjanasith Thonglek(NAIST) Kohei Ichikawa(NAIST) Keichi Takahashi(Tohoku Univ.) Chawanat Nakasan (Kasetsart Univ.) Kazufumi Yuasa(NTT FACILITIES) Tadatoshi Babasaki(NTT FACILITIES) Hajimu Iida(NAIST)
【Best Tutorial Paper Award】 A Survey of Information-Centric Networking: The Quest for Innovation	Hitoshi Asaeda(NICT) Kazuhisa Matsuzono(NICT) Yusaku Hayamizu(NICT) Htet Htet Hlaing(NICT) Atsushi Ooka(NICT)
【ComEX Best Letter Award】 A composite antenna with high-gain at dual-band	Sirao Wu(Tohoku Univ.) Hiroyasu Sato (Tohoku Univ.) Qiang Chen(Tohoku Univ.)
【マガジン論文賞】 高速ビジョンが開くダイナミックプロジェクションマッピング技術	宮下 令央(東大) 末石 智大(東大) 田畑 智志(東大) 早川 智彦(東大) 石川 正俊(東大)

以上 11 編

(2)マガジン賞

記 事 名	著 者 名
生涯一研究者のこだわり人生論	唐沢 好男

以上 1 編

5. 3 エレクトロニクスサイエティ

(1) ソサイエティ賞

分野	業績	貢献者
第1分野	マイクロ波帯大電力レクテナの高効率化技術に関する先駆的研究	伊東健治 様 (金沢工業大学)、野口啓介 様 (金沢工業大学)、坂井尚貴 様 (金沢工業大学)
第2分野	集積光ナノ構造を用いたトポロジカルフォトニクスに関する先駆的研究	岩本敏 様 (東京大学)
第3分野	超伝導ナノストリップを用いた単一光子検出技術の開発	三木茂人 様 (情報通信研究機構)

以上3件

(2) レター論文賞

論文名	著者名
光フェーズドアレーを用いたテラヘルツ波の電子制御ビームステアリング	近藤 和哉 (九州大学) 土居 諒 (九州大学) 車 明 (九州大学) 三上 裕也 (九州大学) 加藤 和利 (九州大学)

以上1件

(3) ELEX Best Paper Award

論文名	著者名
PAM4 48-Gbit/s wireless communication using a resonant tunneling diode in the 300-GHz band	Atsushi Oshiro (Osaka University) Naoki Nishigami (Osaka University) Takumi Yamamoto (Osaka University) Yosuke Nishida (ROHM Co., Ltd.) Julian Webber (Osaka University) Masayuki Fujita (Osaka University) Tadao Nagatsuma (Osaka University)
Small magnetless integrated optical isolator using a magnetized cobalt ferrite film	Mario Alberto (Tokyo Institute of Technology) Serrano-Núñez (Tokyo Institute of Technology) Yuya Shoji (Tokyo Institute of Technology) Tetsuya Mizumoto (Tokyo Institute of Technology)

以上2件

(4) 招待論文賞

論文名	著者名
Recent Progress on High Output Power, High Frequency and Wide Bandwidth GaN Power Amplifiers	Masaru SATO (Fujitsu Laboratories) Yoshitaka NIIDA (Fujitsu Laboratories) Atsushi YAMADA (Fujitsu Laboratories) Junji KOTANI (Fujitsu Laboratories) Shiro OZAKI (Fujitsu Laboratories) Toshihiro OHKI (Fujitsu Laboratories) Naoya OKAMOTO (Fujitsu Laboratories) Norikazu NAKAMURA (Fujitsu Laboratories)

以上1件

(5) エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞

2023年総合大会 (2023年3月)

分野	講演者
----	-----

電磁波理論およびマイクロ波分野	増井 翔 (国立天文台/大阪公立大学) 本間 優作 (東北大学)
光半導体及びフォトニクス分野	岡田 竜馬 (奈良先端科学技術大学院大学) 梶富 直人 (九州大学)
回路およびエレクトロニクス分野	山崎 悠太郎 (東京理科大学) 羅 文輝 様 (横浜国立大学)

以上 6 名

2023 年ソサイエティ大会 (2023 年 9 月)

分 野	講 演 者
電磁波理論およびマイクロ波分野	廣田 昂也 (埼玉大学) 宮本 浩志郎 (日本大学)
光半導体及びフォトニクス分野	小松 憲人 (東京大学) 安森 昌太郎 (兵庫県立大学)
回路およびエレクトロニクス分野	岡本 裕介 (東京工業大学) 押本 夏佳 (山梨大学)

以上 6 名

5. 4 情報・システムソサイエティ

(1)ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
該当なし	

(2)功労賞

(2-1)活動功労賞

業 績	貢 献 者
英文論文誌編集委員・編集幹事としての貢献	河井 恒(NICT)
英文論文誌編集委員としての貢献	岡部 孝弘(九工大)
英文論文誌編集委員としての貢献	平野 靖(山口大)
和文論文誌編集委員としての貢献	近藤 真史(岡山理科大)
和文論文誌編集委員としての貢献	三浦 元喜(千葉工大)
画像工学研究専門委員会幹事補佐、幹事、二種研実行委員会幹事としての貢献	福嶋 慶繁(名工大)
マルチメディア情報ハイディング・エンリッチメント研究専門委員会副委員長ならびに小特集号編集副委員長としての貢献	岩田 基(阪公大)
マルチメディア情報ハイディング・エンリッチメント研究専門委員会副委員長ならびに小特集号編集副委員長としての貢献	藤吉 正明(都立大)
パターン認識・メディア理解研究専門委員会、MIRU への貢献	安倍 満(デンソーアイ ティールボラトリ)
パターン認識・メディア理解研究専門委員会、MIRU への貢献	岩村 雅一(阪公大)

以上 10 名

(2-2)査読功労賞

業 績	貢 献 者
論文誌査読委員としての貢献	石井 育規(パナソニック)
論文誌査読委員としての貢献	福田 直樹(静岡大)
論文誌査読委員としての貢献	中澤 篤志(京大)
論文誌査読委員としての貢献	樫山 淳雄(東京学芸大)
論文誌査読委員としての貢献	和田 康孝(明星大)

論文誌査読委員としての貢献	中谷 多哉子(放送大)
論文誌査読委員としての貢献	越智 洋司(近畿大)
論文誌査読委員としての貢献	相澤 彰子(NII)
論文誌査読委員としての貢献	日野 英逸(統計数理研)
論文誌査読委員としての貢献	川西 康友(理研)

以上 10 名

(3)ジュニア&学生ポスターセッション

(3-1)優秀ポスター賞

論 文 名	著 者 名
AR 技術を用いた歯科インプラントサージカルガイドの改良—治療器具のトラッキング精度向上—	福田 祐介 (茨城大)
表情認知における注意欠如多動症傾向とスキミングパターンの関連	出水 志緒梨 (京都女子大)
ラベルなし音声を用いた自己教師あり学習による器質性構音障害者の音声認識	北条 直樹 (神戸大)
DRR 画像から X 線画像への画質変換—画像間の位置ずれによる影響を低減するネットワークの提案—	林 千咲子 (千葉大)
MR 画像誘導放射線治療における照射中リアルタイム 3 次元腫瘍位置予測の試み	清水 涼音 (千葉大)
連合学習の通信量を削減するための Energy スコアを利用した知識蒸留手法の検討	東 桔也 (東北大)

以上 6 名

(3-2)特別賞 (協創)

論 文 名	著 者 名
力覚装置と CT データを用いたアジの三枚おろしトレーニングシステム	中里 幸敏 (茨城大)
指文字の認識および音声出力のシステム開発	長野 有斗武 (高槻高校)
花火職人の技術継承のための STEAM 教育システムに関する一考察	嶋 諒大 (大島商船高専)
海洋ごみの 3DCG モデルを対象にした YOLOv7 による検出精度の考察	河村 一世 (大島商船高専)

以上 4 名

(3-3)ジュニア奨励賞

論 文 名	著 者 名
電動アシスト自転車の電池について	宮田 創平 (江東区立越中島小)
レゴブロックを使用した宇宙エレベーターロボットの製作	守屋 真帆 (高槻高校)
Web カメラによる顔画像認識を利用したゲーム性のある暗算学習システムの開発	湊 祐太朗 (東京理科大)

以上 3 名

5. 5 F I T の各賞

(情報・システムサイエティ及びヒューマンコミュニケーショングループと情報処理学会との合同)

(1)船井業績賞

業 績	受 賞 者
大規模データベースシステムの超高速化に関する先駆的研究	喜連川 優 (国立情報学研究所)

以上 1 件

(2)船井ベストペーパー賞

論 文 名	受 賞 者
動的メッシュ圧縮における変位量の量子化タイミングに関する検討	西村 仁志・加藤 晴久・河村 圭 (KDDI 総合研究所)
濃煙トンネル空間における避難誘導を目的としたモバイル端末台数推定手法の提案	長久保 伊吹・堀川 三好・岡本 東 (岩手県立大)・堀川 真伸 (阪神高速先進技術研究所)・松浦 弘治 (阪神高速道路)

以上 2 編

(3)FIT 論文賞

論 文 名	受 賞 者
ゲーム性向「金持ち喧嘩せず」は進化するか？-貯蓄とゲーム参加コストを付加した空間型囚人のジレンマゲームに観る複雑性の創発-	内海 忍・晨 申・谷本 潤 (九大)・立川 雄一 (九大/エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ)・Md. Rajib Arefin (ダッカ大)
予測ベースの先行実行による In-Order プロセッサの高速化	灘 洋太郎・塩谷 亮太・入江 英嗣・坂井 修一 (東大)・小泉 透 (名工大)
抗体配列生成への複数モードサンプリング生成モデルの適用と配列多様性向上の検討	豊村 崇・木戸 邦彦・松森 正樹 (日立)
X-Learner を用いた抗がん剤治療による間質性肺疾患誘引リスクの評価	塚田 啓介・徳山 健斗 (中外製薬)・水谷 圭佑 (中外製薬/東工大)
錯乱肢の生成による英語多肢選択問題の適応的難易度調整	内田 時央・バーゴ アンドリュウ・黄瀬 浩一 (阪公大)
深層学習を用いた魚種の自動判別における背景除去の影響	長谷川 達人・益本 英明 (福井大)・瀬能 宏 (神奈川県立生命の星・地球博物館学)
性風俗情報サイトの分析による性接触ネットワークの可視化	伊東 啓・重田 桂子・山本 太郎 (長崎大)・守田 智 (静岡大)

以上 7 編

(4)FIT ヤングリサーチャー賞

論 文 名	受 賞 者
FFT を用いた畳み込み演算の FPGA 上でのハードウェア実装の検討	滝田 涼介 (東京理科大)
ゲーム性向「金持ち喧嘩せず」は進化するか？-貯蓄とゲーム参加コストを付加した空間型囚人のジレンマゲームに観る複雑性の創発-	内海 忍 (九大)
Mixup はヘッシアン正則化を含むか？	杉山 孔亮 (早大)
X-Learner を用いた抗がん剤治療による間質性肺疾患誘引リスクの評価	塚田 啓介 (中外製薬)
フィジカルフレイル診断支援のための歩行時 3 軸加速度データを用いた CNN による低筋力状態検出	中村 早希 (名工大)
濃煙トンネル空間における避難誘導を目的としたモバイル端末	長久保 伊吹 (岩手県大)

台数推定手法の提案	
Solidity コンパイラ更新による脆弱性への影響調査	加道 ちひろ (阪大)
プログラミング初心者向けの Web 学習支援システム	藤坂 直輝 (東海大)

以上 8 名

5. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

(1)ヒューマンコミュニケーション賞

研究会名	業 績	受 賞 者
HCS	発話行為論と日本語における条件付き謝罪 ～ 加害責任の重さが誠実性評価に及ぼす影響 ～ (HCS2023-42)	高木 幸子(常磐大), 坂本 暁彦(東京電機大)
HCS	商品パッケージの視触覚による印象が購買に与える影響 (HCS2022-83)	高橋 理央(日大), 吉田 悠(日大)
HIP	フラッシュラグ効果における非対称な位置ずれの時空間特性解析 (HIP2023-17)	深田 明弘(防衛大), 横井 健司(防衛大),
MVE	嗅覚刺激と鼻腔外電気刺激による VR 空間内の進路誘導効果 (MVE2022-59)	松井 彩里(東大), 青山 一真(東大), 雨宮 智浩(東大), 葛岡 英明(東大), 鳴海 拓志(東大),
MVE	超鏡空中像におけるポインティング手法に関する基礎検討 (MVE2022-118)	巻口 誉宗(NTT), 佐野 文香(NTT), 松元 崇裕(NTT), 望月 理香(NTT), 山本 隆二(NTT),
WIT	神経難病患者の発話シーンに対する口形認識 (WIT2022-24)	権藤 優季(九工大), 中村 祐哉(九工大), 齊藤 剛史(九工大), 伊藤 和幸(NRCPD),

以上 6 件

(2)HCG シンポジウム賞

業 績	受 賞 者
相手に求めるコミュニケーションスタイルの提示がフリマアプリにおける価格交渉のやり取りに与える影響【最優秀インタラクティブ発表賞】	藤原未雪 (メルカリ)・中條 麟太郎・ハウタサーリ アリ (東京大学)
つくば駅及びつくばセンターバスターミナルにおける視覚障害者の移動サポート実証実験【最優秀インタラクティブ発表賞】	松尾政輝・坂尻正次・嶋村幸仁 (筑波技術大学)
自尊感情の向上を目的とした短所のリフレーミングを行うシステムの評価【最優秀インタラクティブ発表賞】	北村美和子 (岡山県立大学大学院)・上田愛斗・柴田理加・石井裕・渡辺富夫 (岡山県立大学)
歩くと感じる「ぶるぶる」から周囲の3次元環境を理解できるか?【最優秀インタラクティブ発表賞】	菊地裕貴・佐伯瞭・森田慎一郎・東孝文・小林春美・武川直樹・中村明生 (東京電機大学)
「プロテウス効果による内発的な肌の潤い向上・保持支援システムの定量評価の検討【優秀インタラクティブ発表賞】	間瀬朱璃 (香川大学)・荒川雅生 (早稲田大学)・福森聡・北村尊義 (香川大学)
ポーカにおけるプレイヤー間での報酬期待が瞳孔運動に及ぼす影響【優秀インタラクティブ発表賞】	安田凌・中山実 (東京工業大学)
生成AIを活用した特殊詐欺訓練ツールの検討【優秀インタラクティブ発表賞】	近野恵・池田妃那・井手健太・岩崎翔・粟井修司・紺野剛史 (富士通)・桐生正幸 (東洋大学)
グループディスカッションにおける成員間の選好推移に基づく移動エントロピーによる説得力・傾聴力の定量化【優秀インタラクティブ発表賞】	浜田百合・長谷川孝太郎・栗原陽介 (青山学院大学)
発言、表情、行動に基づく認知症患者の不穏度合い推定	重清成海・山内雅明 (大阪大学)・辻寛 (日本モンテッソーリケア協会)・下西英之・村田正

	幸・杉田美和・木多道宏（大阪大学）
視聴覚刺激による不安定歩行誘発の試み【学生優秀インタラクティブ発表賞】	小原友誠・村田慎治・和田親宗（九州工業大学）
目撃証言にもとづく正面顔似顔絵スケッチの生成：CLISOTS【学生優秀インタラクティブ発表賞】	阿見翼・小森政嗣（大阪電気通信大学）
ロボットの「話しながらなでる」動作による痛み知覚の軽減効果の評価【学生優秀インタラクティブ発表賞】	新江田航大・澤邊太志・神原誠之・藤本雄一郎・加藤博一（奈良先端科学技術大学院大学）
デジタルペンの筆圧による濃淡表現の有無が図形問題の解答に及ぼす影響の調査【学生優秀インタラクティブ発表賞】	宮崎勇輝・小林沙利・中村聡史（明治大学）・掛晃幸（ワコム）
GANの潜在空間を利用した表情モーフィング画像生成と高次元表情弁別閾値楕円の測定【学生優秀インタラクティブ発表賞】	飯野匠・小林洋明・趙晋輝（中央大学）
表情の曖昧性に寄与する基本6感情の分析【学生優秀インタラクティブ発表賞】	濱野 揚茂・有賀敦紀（中央大学）

以上 20 件

6. 研究会等に関する事項(定款 第4条 ロ号、ハ号)

6. 1 基礎・境界ソサイエティ／NOLTA ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：102回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
回路とシステム	相原 康敏	5	135
情報理論	小嶋 徹也	4	135
信頼性	門田 靖	8	63
超音波	渡部 泰明	9	80
応用音響	小野 順貴	6	133
非線形問題	鳥飼 弘幸	6	149
VLSI 設計技術	中武 繁寿	4	140
情報セキュリティ	花岡 悟一郎	4	134
信号処理	仲地 孝之	5	190
ワイドバンドシステム	庄納 崇	4	123
システム数理と応用	山口 真悟	4	97
思考と言語	森下 美和	5	46
技術と社会・倫理	大谷 卓史	4	113
ITS	高取 祐介	5	81
スマートインフォメディアシステム	木村 誠聡	4	62
イメージ・メディア・クオリティ	工藤 博章	5	91
高信頼制御通信	東 俊一	4	117
バイオメトリクス	高野 博史	4	73
複雑コミュニケーションサイエンス	会田 雅樹	4	78
安全・安心な生活と ICT	内田 理	4	63
ハードウェアセキュリティ	鈴木 大輔	4	100
合計		102	2,128

6. 2 通信ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：139回 また、第二種研究会、第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
アンテナ・伝播	榑原 久二男	12	222
宇宙・航行エレクトロニクス	若山 俊夫	8	113
衛星通信	加保 貴奈	5	78
環境電磁工学	田島 公博	9	111
ネットワークシステム	大石 哲矢	10	245
情報ネットワーク	波戸 邦夫	7	113
コミュニケーションシステム	梅原 大祐	7	128
電子通信エネルギー技術	中島 善康	6	63
光通信システム	小林 孝行	8	81
無線通信システム	樋口 健一	10	294
コミュニケーションオリティ	平栗 健史	6	86
フォトニックネットワーク	塩本 公平	6	92
光ファイバ応用技術	山田 誠	6	77
情報通信マネジメント	野村 祐士	5	66
インターネットアーキテクチャ	秋山 豊和	7	119
スマート無線	田久 修	5	111
短距離無線通信	水谷 圭一	5	79
ヘルスケア・医療情報通信技術	田中 宏和	5	82
無線電力伝送	西川 健二郎	7	59
センサネットワークとモバイルインテリジェンス	門田 和也	5	84
合計		139	2,270

6. 3 エレクトロニクスソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：85回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
機構デバイス	上野 貴博	5	48
磁気記録・情報ストレージ	田河 育也	4	29
超伝導エレクトロニクス	三木 茂人	3	26
電子ディスプレイ	神原 誠之	4	15
電子デバイス	葛西 誠也	6	81
電子部品・材料	中澤 日出樹	7	111
電磁界理論	川口 秀樹	4	108
シリコン材料・デバイス	大見 俊一郎	8	87
マイクロ波	大久保 賢祐	10	196
集積回路	池田 誠	5	129
有機エレクトロニクス	伊東 栄次	9	92
光エレクトロニクス	荒川 太郎	6	129
レーザー・量子エレクトロニクス	西村 公佐	5	77
エレクトロニクスシミュレーション	君島 正幸	4	121
マイクロ波テラヘルツ光電子技術	菅野 敦史	5	96
合計		85	1,173

6. 4 情報・システムソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：111回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ME とハイサイバネティクス	吉田 久	7	7 9
ライフインテリジエンスとオフィス情報システム	戸田 浩之	6	6 6
画像工学	坂東 幸浩	5	1 4 6
言語理解とコミュニケーション	吉田 光男	4	2 6
コンピュータシステム	中島 耕太	4	5 2
コンピューテーション	宇野 裕之	5	3 4
人工知能と知識処理	藤田 桂英	3	4 8
ソフトウェアサイエンス	岡野 浩三	4	8 7
データ工学	豊田 正史	3	3 0
パターン認識・メディア理解	柏野 邦夫	4	8 1
ディープラーニング・ロボティクス	土屋 達弘	7	1 1 8
ニューロコンピューティング	田中 宏和	5	5 9
知能ソフトウェア工学	猿渡 卓也	5	9 1
音声	戸田 智基	5	1 1 5
教育工学	小尻 智子	9	7 2
医用画像	原口 亮	5	8 9
ソフトウェアインタラクション・モデリング	林 章浩	3	1 8
ロボティクス・システム	山口 佳樹	5	1 0 1
情報通信システムセキュリティ	井上 大介	4	9 7
情報論の学習理論と機械学習	杉山 将	4	5 1
マルチメディア情報ハイキング・エンリッチメント	新見 道治	6	9 8
クラウドネットワークロボット	西川 由理	4	4 5
サービスロボティクス	木村 功作	4	3 9
合計		1 1 1	1,6 4 2

6. 5 ヒューマンコミュニケーショングループ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：20回 また、第二種研究会及び第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ヒューマンコミュニケーション基礎	神田 智子	5	1 1 4
ヒューマン情報処理	和田 有史	6	1 1 2
メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎	清川 清	5	1 2 0
福祉情報工学	塩野目 剛亮	4	5 7
合計		2 0	4 0 3

7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項(定款 第3章)

各ソサイエティ及びグループにおける会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数 (ESSにNLSも含む)

	ESS	CS	ES	ISS	NLS	HCG	合計
2022年度末 登録数	4,021	7,710	4,081	7,697	295	792	24,596
	【153】	【327】	【177】	【281】	-	-	【938】
2023年度末 登録数	4,261	8,333	4,338	8,271	363	720	26,386
	【165】	【322】	【185】	【279】	-	-	【951】
前年度との差	240	623	257	574	68	-72	1690

	【12】	【-5】	【8】	【-2】	-	-	【13】
--	-------------	-------------	------------	-------------	---	---	-------------

注) ESS : 基礎・境界ソサイエティ
CS : 通信ソサイエティ
ES : エレクトロニクスソサイエティ
ISS : 情報・システムソサイエティ
NLS : NOLTA ソサイエティ
HCG : ヒューマンコミュニケーショングループ

Ⅲ. 支部事業

1. 北海道支部

2023 年度は、支部連合大会、各講演会等の毎年実施してきて効果的な事業、学生会発表研究会の開催など当支部独自の事業を継続して行い、最大限の会員サービスに努めた。

1-1 事業概要

2023 年度の諸事業は年度当初の計画に沿って以下のとおり実施した。

1-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ア. 講演会：2 件開催した。（北海道大学）
- イ. 支部連合大会：電気・情報関係学会で組織された連合大会を 1 回開催した（一般講演数 156 件、参加者数 268 名）。公立はこだて未来大学
- ウ. 専門講習会：2 名の講師を招へいし、【AI/機械学習の初心者向けセミナー】～いまさら聞けない AI 技術の基礎～をテーマとして講習会を開催した（参加者数 29 名）。
- エ. 総務省北海道総合通信局と電子情報通信学会北海道支部との意見交換会（参加者数：32 名）

1-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ホ号）

- ・応用物理学会が企画した主に小中高生を対象としたイベント（「リフレッシュ理科教室」サイエンス・オリエンテーリング in 札幌 2023）を共同主催した（参加者数：76 名）。

1-1-3 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

- ア. 学生会主催講演会：3 件開催した。（室蘭工業大学 北見工業大学 北海道大学）
- イ. 学生会研究発表会：インターネット上で論文発表を行うインターネットシンポジウムを 1 回開催した（発表件数 28 件）。
- ウ. 室蘭工業大学学生ランチ活動として、講演会を開催。支部連合大会にて IEEE 北海道大学・室蘭工業大学 Student Branch とともに学生交流会を企画した。

1-2 選奨（定款 第 4 条 ホ号）

1-2-1 2023 年度北海道支部学生奨励賞

北海道支部における学生奨励賞の選奨細則に基づき以下の 11 名を選定(推薦 6 名、公募 4 名、学生ランチ 1 名)し、2024 年 3 月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属
風間 啓佑	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
五箇 亮太	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
島田 慎吾	北見工業大学 大学院工学研究科工学専攻 情報通信工学プログラム
寺嶋 啓太	北海道大学 大学院情報科学院 システム情報科学コース
手塚 潤	室蘭工業大学 創造工学科 航空宇宙工学コース
Md. Iquebal Hossain Patwary	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
村松 聖倭	北海道大学 大学院情報科学院 情報エレクトロニクスコース
村上 輝	北見工業大学 大学院工学研究科工学専攻 機械電気工学プログラム
芳形 悠生	北海道大学 大学院情報科学院 情報エレクトロニクスコース
渡部 航史	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
浅野 佑太郎(ランチ活動部門)	室蘭工業大学 創造工学科 電気電子工学コース

1-2-2 2023 年度北海道支部学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞

インターネットシンポジウム優秀発表賞細則に基づき以下の 3 名を選定し、2024 年 3 月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
柴 公晟	北海道大学	音響圧空間分布推定に基づく超音波駆動の神経可塑性誘発法の開発 —神経細胞間結合の低侵襲的な制御方法の開発に向けて—
船木 聖仁	旭川工業高等 専門学校	染色体数可変 GA を用いた到来方向推定における設定パラメータに関する考察
清水 皓大	北海道大学	積雪条件下での駐車場モニタリングシステムのための背景差分法を用いた駐車状況変化検出手法とその評価

*北海道支部学生ランチ顧問表彰（発表賞）

氏名	所属	氏名	所属
高橋 快勢	北見工業大学	陳 浩男	室蘭工業大学

平尾 勇晴	室蘭工業大学	森 建太郎	旭川工業高等専門学校
-------	--------	-------	------------

1-2-3 2023 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会若手優秀論文発表賞

2023 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会における若手発表を対象として、若手優秀論文発表賞選考委員会において選考を行い、以下の 11 名を受賞者として選定、賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属	氏名	所属
山田 隆裕	室蘭工業大学	佐藤 雅也	北海道大学
三上 稜介	北海道大学	寺嶋 啓太	北海道大学
岩部 由芽	室蘭工業大学	岡田 航希	室蘭工業大学
周 金星	北海道大学	藤後 太郎	北海道大学
松崎 泰輝	室蘭工業大学	松田 遥	北海道大学
佐藤 健次朗	北見工業大学		

2. 東北支部

2023 年度は、事業計画に基づき以下の各事業を実施した。また、支部運営委員による事業活性化ワーキンググループを設置して、ジュニア向け事業・地域活性化施策・広報の充実等を重点テーマとして一層の事業充実のための検討を継続して行っている。

2-1 事業概要

2-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ア. 講演会を 8 件（ハイブリッド 2 件、対面 6 件）実施した。
- イ. 見学会を 1 件実施した。
- ウ. 学生と地域企業によるパネルディスカッションを 1 件実施した。
- エ. 電気関係学会東北支部連合大会を 1 件実施した。
- オ. 協賛・後援事業を 3 件実施した。

2-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

小中高生向け事業を 3 件（共催）実施した。

2-1-3 学生会事業（定款第 4 条ロ号、へ号）

東北大学に学生ランチを設置し活動を行った。

2-2 選奨（定款 第 4 条 ホ号）

2-2-1 学生優秀論文賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

授賞者氏名	所属	講演題目
石川 諒	東北大学	超音波による粘弾性特性計測のファントム実験系における内圧と血管形状に関する検討
設楽 裕海	東北大学	U-Net を用いた単一平面波イメージングの高画質化に関する検討

2-2-2 学生優秀発表賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

授賞者氏名	所属	講演題目
安倍 凜生	東北工業大学	睡眠時における手首・腕部呼吸運動の測定
祖谷 星征	山形大学	脈波と皮膚表面温度を利用したイヤークリップ型ストレス評価システムの研究

2-2-3 優秀学生表彰について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

授賞者氏名	所属	授賞者氏名	所属
浅野 海星	一関工業高等専門学校	佐藤 快	弘前大学
浅見 圭祐	福島工業高等専門学校	島野 大輝	東北大学
新井 駿斗	岩手大学	下沢 陽大	仙台高等専門学校
石川 明寛	鶴岡工業高等専門学校	関 智仁	秋田県立大学
伊藤 太一	岩手県立大学	竹内 開徒	八戸工業高等専門学校
岡部 将也	東北工業大学	豊嶋 大翔	秋田工業高等専門学校
小野寺 飛真	八戸工業大学	野原 海輝	会津大学
清田 将生	日本大学	宮川 聖悠	秋田大学
桑原 未智瑠	東北文化学園大学	森田 大貴	東北学院大学
越川 崇貴	東北大学	李 天毅	山形大学
坂元 晴彦	仙台高等専門学校	渡邊 稀帝	医療創生大学

3. 東京支部

2023 年度は、コロナ禍前の支部活動を取り戻すことを優先した。これまで続けていた事業に加え、会員の裾野を広げるといった観点から、今年度は新たな教育イベントとして SSH 指定校との連携事業を実施した。また、昨年度から始めた企業イニシアティブ活動シンポジウムも実施した。これらの活動は、来年度も継続実施の予定である。

3-1 事業概要

2023 年度の諸事業は、年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

3-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

最新の研究開発動向を紹介する企画を継続的に開催しただけでなく、電子情報通信学会の新たな取り組みである企業イニシアティブ活動と連携した第 2 回企業イニシアティブ活動シンポジウムを開催した。社会状況に応じてオンライン/ハイブリッドの開催形態を柔軟に採用し、講演会（1 回、参加者 51 名）、シンポジウム（2 回、参加者 計 100 名）、見学会（1 回 参加者 17 名）を開催し、大変盛況であった。

3-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

- ・東京支部地域内の学校、企業、NPO などと連携し、共同主催の教育イベントの公募を行い、5 件を採択し、5 件とも現地開催にて実施した。
- ・支部主催の教育イベントとして、SSH 指定校の生徒に対する本会の先端研究分野を紹介する講演会を開催し、3 件の講演を実施した（参加者 教員 3 名 生徒約 120 名）。各講演において、聴講者との質疑応答も非常に活発であり、開催予定時間を 1 時間余り超過したが大好評であった。

3-1-3 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

- ・オンライン講演会（1 回 参加者 30 名）を開催し参加者の知識の向上に役立ち大変有意義であった。
- ・当支部学生会活動の PR の一環として、学会誌 11 月号「学生会だより」の記事を執筆した。
- ・学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、また最近行っている研究の紹介のための研究発表会を 3 月 2 日にオンラインにて開催した。本年度の発表件数は 114 件であった。（うちジュニア会員は 8 件）。
- ・学生ブランチの 5 校が子供科学実験教室、委員会、交流会等を実施した。

3-2 選奨に関する事項（定款 第 4 条 ホ号）

3-2-1 2023 年度東京支部学生奨励賞

東京支部学生奨励賞選奨規程に基づき、下記 11 名を選定し、贈呈した。（五十音順、敬称略）

氏名	所属	氏名	所属
蛭澤 魁斗	東京農工大学	虎谷 彬秀	日本大学
奥村 晃明	芝浦工業大学	藤嶋 爽太	工学院大学
小野寺千碩	茨城大学	藤田 一輝	東京電機大学
金成健太朗	工学院大学	Hemthavy Kaybandith	群馬大学
栗田 快志	茨城大学	安田 祐希	日本大学
照井 啓	東京都市大学		

3-2-2 2023 年度東京支部学生功労賞

東京支部学生功労賞選考方針に基づき、下記 3 名を選定し、贈呈した。（五十音順、敬称略）

役職	氏名	所属
学生会委員	栗原 啓弥	拓殖大学
学生会委員	高橋 尚悟	千葉大学
学生会委員	榎 鴻一	明治大学

4. 信越支部

2023 度は、信越地区の会員への貢献、地域に対する社会的責務としての活動の点で、オンライン会議システムを活用した支部大会、対面形式の講演会等のイベントを企画、実施、支援した。長野県、新潟県内における学会活動の活性化や学生会活動の更なる強化を促進するため、信越支部優秀論文発表賞を創設するとともに、信越支部ならではの新たな活動についての検討も進めた。

4-1 事業概要

2023 度の諸事業は年度当初の計画を変更し、下記のようにそれぞれ実施を行った。

4-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ・支部大会（1回、発表件数145件）をオンライン開催で行った。支部からの参加者を中心に、電子情報通信に関する情報交換及び議論の場として役立った。
- ・講演会は6回（新潟地区1回、長岡地区1回、長野地区4回）行った。電子情報通信に関する先端的な知識の向上に役立った。

4-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

- ・研究交流会：本支部の主催するもの3回（新潟大・信州大学・公立諏訪東京理科大学）を行った。学生会員の交流促進、学生自身の電子情報通信技術に対する意識の向上に役立った。

4-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

信越支部内における研究活動を評価し表彰した。

4-2-1 2023 度信越支部学生奨励賞

選奨規程に基づき下記の16名を選定し贈呈した。（順不同、敬称略）

氏名	所属	講演・研究題目
鈴木 慧太	新潟大学	前方監視車載レーダを用いた3次元位置推定におけるアンテナ軌道誤差の影響に関する基礎検討
阿部 寿純	新潟大学	骨密度予測のための機械学習手法の比較
未満 堅人	長岡技術科学大学	運動想起脳波における視覚提示時間を含む学習データは分類性能を過剰に評価する
森谷 隼介	長岡技術科学大学	複数の感情誘発要素を含む聴覚情報による感情生起と文脈理解・記憶の関係
飯沼 柊馬	長岡技術科学大学	ESNによるカオス写像の学習とミラーアトラクタについて
川里 康太	信州大学	平坦な色成分を抽出する色変換における凸制約に基づく第二主成分の計算法
河口 太以凱	信州大学	5Gシステムにおける同一周波数干渉の分布推定を用いた共用判断
頼田 彩	信州大学	超音波通信を用いたPORC-OFDMシステムの適応変調制御
菅原 叶野	新潟工科大学	雑談から行政による貧困対策を紹介するチャットボットの開発
山田 裕介	新潟工科大学	リアルタイムデータに基づくレコメンデーションを用いたナビゲーションシステム
向山 紗矢	公立諏訪東京理科大学	食事開始時の腸音に基づく一日のおむつ替え回予測のための分類法
佐々木 紀華	公立諏訪東京理科大学	加速度を用いたマルチモーダルAI型心筋梗塞部位予測
北澤 颯大	長野工業高等専門学校	QZSS用平面アンテナを用いた自動運転に関する研究
YEOH WEI LOON	長野工業高等専門学校	広帯域薄膜コモンモードフィルタの開発
高野 光生	長岡工業高等専門学校	重力波波形抽出のためのフィルタを生成するニューラルネットワークの検討
五井 響平	長岡工業高等専門学校	改質基板構造を用いた化合物薄膜太陽電池の製造技術に関する研究

4-2-2 2023 年度信越支部優秀論文発表賞

選奨規程に基づき下記の10名を選定し贈呈した。（順不同、敬称略）

氏名	所属	講演・研究題目
川久保 峻	新潟工科大学	マイクロフォンを利用した卓球ボールの3次元位置推定
輪湖 圭祐	新潟大学	人体動作同定における24GHz,60GHz帯比較
佐藤 篤史	信州大学	48V入力2V/50A出力Phase-Shift Double Step-Down Full Bridge型高降圧DC-DCコンバータの二次側回路トポロジー検討
志村 慶	信州大学	過剰パラメータCNNモデルの出力値分布の変化に関する検証
西谷 洋哉	長岡技術科学大学	骨導音声を用いた感情認識に関する検討
高橋 佳史	新潟大学	深層学習による角質細胞の電子線回折像と皮膚物性の相関解析
佐々木 紀華	公立諏訪東京理科大学	加速度を用いたマルチモーダルAI型心筋梗塞部位予測
東隆 志	公立諏訪東京理科大学	iPS細胞由来心筋の動態解析による加速度点群データを用いた分化度評価
高橋 汰規	公立諏訪東京理科大学	ラプラス分布を用いた最尤推定法に基づく調波打撃音分離
市村 奏帆	信州大学	進化的アルゴリズムを用いたFlipIt/FlipThemゲームの戦略最適化における交叉・突然変異の検討

4-2-3 2023 度信越支部ベストプラクティス賞

選奨規程に基づき下記の研究室を選定し贈呈した。

順位	所属
1位	新潟大学工学部知能情報システムプログラム スマートライフ研究室（山崎研究室）

2位	信州大学 工学部 電子情報システム工学科 田久研究室
3位	新潟大学工学部知能情報システムプログラム 波動情報研究室 (山田研究室)

5. 東海支部

2023 年度も引き続き積極的にオンラインを利用しての意見交換をしつつ、コロナ禍前のように現地開催での講演会等の再開も進めてきた。

5-1 事業概要

2023 年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

5-1-1 一般事業 (定款 第 4 条 ロ号)

講演会 (2 回 参加者合計 117 名) を現地開催 1 回・オンライン開催 1 回、専門講習会 (1 回 参加者 42 名) を現地開催した。また、今年度も、電気電子情報工学分野への女性進学を後押しする趣旨の女子学生向けイベント (参加者 35 名) をオンライン開催した。例年共催をしている小中高生向け理科教室は今年度も規模を縮小して開催した。また、見学会は中止となった。

5-1-2 学生会事業 (定款 第 4 条 ロ号)

講演会 (2 回、参加者数 132 名)、学生研究発表会 (1 回、参加者合計 64 名) は、学生の知識向上、学会活動の宣伝、他校学生間交流に役立ち有意義であった。

卒業研究発表会は 2023 年度も現地開催し、発表件数は 77 名、参加者は 97 名であった。

5-1-3 その他 (定款 第 4 条 ロ号)

電気・電子・情報関係学会東海支部連合大会 (参加者 529 名) を 8 学会で、4 年ぶりに現地にて共同開催した。

5-2 選奨に関する事項 (定款 第 4 条 ホ号)

5-2-1 2022 年度 東海支部学生研究奨励賞

学生研究奨励賞選奨規程に基づき下記の 20 名を選定し、2023 年 6 月に表彰した。

(氏名五十音順)

氏名	所属 (2023 年 3 月現在)	研究テーマ
■高専/学部		
石田 匠	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科	大気ゆらぎとポインティングエラーを伴う自由空間光通信における知能反射面位置と通信性能の関係
澁谷 悠大	名古屋大学 情報学部 コンピュータ科学科	ホットスポットの変化に対応するメッシュネットワークのスループット向上のための AP 移動制御
樋口 怜治	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科	短距離コヒーレント光通信システムに適する変復調方式
■修士		
浅野 敬祐	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	電波暗号化変調方式の伝送品質改善及び復号計算量低減の研究
伊東 佑真	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学情報工学系プログラム	教育機関における講義活動支援を目的とした、講義録画支援システムの開発に関する研究
大石 創	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	丁度可知差異による近似バイラテラルフィルタの画質評価
岸 峻平	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	テラヘルツ帯における基板内導波管ロットマンレンズビーム形成回路に関する研究
クルザドケンジ	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	光バス収容設計技術の開発
後藤 友綺	中京大学 工学研究科 電気電子工学専攻	入れ子構造型粒子群最適化を用いた非線形力学系の分岐点導出法について
佐伯 英寿	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻 電気・機械工学系プログラム	920 MHz および 2.45 GHz における IoT 機器の機器配置に対する 10 g 平均局所 SAR に関する研究
鮫島 卓	名城大学大学院 理工学研究科 情報工学専攻	量子通信の普及期に有用な送受信者間の能力の異なる非対称量子通信に関する研究
立松 昭彦	三重大学大学院 工学研究科 電気電子工学専攻	few-bit ADC を用いた確率共鳴受信機における信号復調に関する研究
富田 佳吾	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	短時間フーリエ変換と非線形フィルタに基づく光線空間の雑音除去
西田 錬	三重大学大学院 工学研究科 電気電子工学専攻	IEEE 802.11ah システムにおけるネットワーク不均一性を考慮した端末グルーピング方式に関する研究
橋本 拓磨	静岡大学大学院 総合科学技術研究科 工学専攻	マイクロ波無線電力伝送用オンチップ整流器の設計
吉田 征弘	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	車載イーサネットのイミュニティ試験に関する研究

■博士		
伊藤 滉一朗	名古屋大学大学院 情報学研究科 知能システム学専攻	音声会話エージェントのための語りに傾聴を示す応答の自動生成
川原 泰正	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科 電気・電子情報工学専攻	水中における電界型ワイヤレス給電の高効率化
竹本 修	名城大学大学院 理工学研究科 電気・情報・材料・物質 工学専攻	低遅延を指向したエッジデバイスのセキュア実装に関する研究
黄 瑞怡	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	未来都市モビリティのための高速度二眼カメラを用いた可視光通信の高 速化と高精度測距

5-2-2 2023年度 卒業研究発表会

2月29日、現地(名古屋大学)にて卒業研究発表会が開催され、下記9名を表彰することとした。
(所属五十音順)

最優秀卒業研究発表賞 (1件)		
講演者名	所属	講演題目
長谷川 滉	名古屋工業大学	量子計算機シミュレーションにおける量子画像表現
優秀卒業研究発表賞 (8件)		
講演者名	所属	講演題目
中野 幸亮	名古屋大学	可視光通信信号を用いたセンサ情報の共有によるスロットカーの優先道路横断と遅延測定
水野 智貴	名城大学	視点推定に基づくカメラアーム制御による物体姿勢推定精度向上
加藤 洗瑠	沼津工業高等専門 学校	様々な要望に対応するスケジューラの開発
福田 直季	名城大学	カメラ画像と三次元地図を用いた悪天候下における障害物検出
近藤 涼太	名古屋大学	車載ローリングシャッター方式イメージセンサによる路車間可視光通信システムの時速 50 km の受信性能評価
長谷川 滉	名古屋工業大学	量子計算機シミュレーションにおける量子画像表現に関する研究
井川 正太郎	南山大学	電磁誘導を用いた学習ゲーム教材開発とその評価
富永 葉	名古屋市立大学	DeepLabCutを用いた歩行データの動作追跡の条件探索

5-2-3 2023年度 学業成績優秀賞

学業成績優秀賞の規程に基づき下記30名を表彰した。(所属五十音順)

受賞者名	受賞者所属
砂場 俊輝	愛知県立大学 情報科学部 情報科学科
池田 宗士郎	愛知工科大学 工学部 情報メディア学科
菱田 皓心	愛知工業大学 工学部 電気学科
和田 健	愛知工業大学 情報科学部 情報科学科
土田 裕登	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 情報コース
森 貴哉	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 電気電子コース
柏原 巡	近畿大学工業高等専門学校 生産システム工学専攻 (情報工学)
土岐 琉星	近畿大学工業高等専門学校 生産システム工学専攻 (電気電子工学)
阿部 颯汰	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科 電気電子コース
谷口 虎羽	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科 制御情報コース
竹内 蓮	静岡大学 工学部 電気電子工学科 エネルギー・電子制御コース
廣田 周作	静岡大学 工学部 電気電子工学科 情報エレクトロニクスコース
福谷 友翔	鈴鹿工業高等専門学校 電子情報工学科
吹野 悠太	豊田工業高等専門学校 情報工学科
大前 歩	豊橋技術科学大学 工学部 電気・電子情報工学課程
五箇 俊介	豊橋技術科学大学 情報・知能工学課程
加藤 翼	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科 電気電子分野
神谷 拓光	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科 電気電子分野
永田 温子	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科 電気電子分野
櫻井 崇貴	名古屋工業大学 工学部 情報工学科 知能情報分野
上保 達也	名古屋工業大学 工学部 情報工学科 ネットワーク分野
松原 悠真	名古屋工業大学 工学部 情報工学科 メディア情報分野
井上 智紀	名古屋大学工学部 電気電子情報工学科
内山 一哲	名古屋大学工学部 電気電子情報工学科
兵頭 佳	名古屋大学工学部 電気電子情報工学科

谷野 文香	三重大学 総合工学科 情報工学コース
平賀 礼二	三重大学 総合工学科 電気電子工学コース
川西 萌未	名城大学 理工学部 情報工学科
谷口 健太	名城大学 理工学部 電気電子工学科
芝 莉々花	名城大学 理工学部 メカトロニクス工学科

6. 北陸支部

北陸地区の会員に対する情報提供、会員相互の情報交流を目指し、講演会・研究発表会・見学会等を開催した。また、支部選奨規程に基づき、学生に対する表彰を行った。

6-1 事業概要

2023年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

6-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

- ・講演会（2回）・見学会（1回）

講演会の実施を1回、講演会および見学会を1回実施した。

その他、シンポジウム、講演会等の共催、協賛、後援を3件行った。

- ・電気・情報関係学会北陸支部連合大会（1回）

金沢工業大学が開催を担当し、オンライン形式で9月2日（土）に実施した。

発表件数は203件、うち82件が電子情報通信学会の発表であった。

また、大会内で本支部が担当する招待講演（1回）を実施した。

6-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ヘ号）

- ・学生向け講演会（0回）

現時点で実施をしていない。

6-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

6-2-1 2023年度学生優秀論文発表賞

電気関係学会北陸支部連合大会における学生の発表を対象として、支部学生優秀論文発表賞規程に基づき審査を行い、下記の20名を受賞者として選定した。2024年2月に賞状と賞金を贈呈した。

（順不同、敬称略）

受賞者名	所属	発表論文タイトル
小林 真樹	金沢工業大学	抵抗付加PN-Body Tied SOI-FETによるニューラルエンコーディングの実現
渡邊 俊也	金沢大学	ピアノの右手/左手パートの音源分離のための MIDI データを用いた Fusion-ResUNetDecouple
永末 玲央	富山県立大学	Fractional-N PLLにおける周波数変動抑制に関する考察
青木 洗介	富山県立大学	合流をともなうフレキシブル・シヨップ問題の混合整数計画モデルの検討
坂東 裕太	富山県立大学	仮想力覚の水平方向提示と垂直方向提示の弁別
村上 由喜	富山県立大学	害獣対策のためのニホンジカ検出 AI モデル構築
山田 啓人	富山県立大学	積層ペーパーズゴースト型ライトフィールドディスプレイにおける立体映像の品質評価のための環境整備
佐伯 慎吾	富山県立大学	画像再構成法を利用した空気揺らぎ量メッシュの生成
倉田 真輔	富山県立大学	マルチチャンネル分光器を用いたブドウの糖度推定の検討
尾山 阿廉	富山県立大学	近赤外スペクトルを用いた気象パラメータの推定における予測精度
岩本 歩夢	福井高専	他者運動観察時における運動強度が ミラーニューロンシステムの活動に与える影響の検証
玉山 琉弥	福井高専	書字運動が視覚記憶に与える影響
北野 翔	福井大学	レイトレース法を用いた 67GHz 帯における到来角度・到来波数の解析
森下 優	福井大学	レイトレース法を用いた屋外電波伝搬推定における地面の高低差の影響
井上 彰梧	福井大学	透過領域において近似波動関数が高い精度を示すための条件
小松 佳生	福井大学	セルオートマトンを用いた音データの離散力学系特性
中島 基晴	福井大学	スマートフォンシェイクに基づく認証精度の時間経過依存性
松宮 波弥汰	福井大学	量子エンタングルメントの高効率スワッピングを実現する量子オーバーレイネットワーク構成法
大崎 隼平	福井大学	ChatGPT によるレポート発見支援システムのための類似度評価手法
濱口 克海	福井大学	CBOW モデルを用いた文学作品のジャンル分類

6-2-2 2023 年度優秀学生賞

支部優秀学生賞選奨規程に基づき審査を行い、下記の 11 名を受賞者として選定した。2024 年 2 月に賞状と賞金を贈呈した。(順不同、敬称略)

大学名	学科専攻等	学生名
富山大学	理工学研究科（修士課程） 理工学専攻 数理情報学プログラム	隋 清雅
富山県立大学	大学院工学研究科知能ロボット工学専攻	吉岩 慎之助
北陸先端科学技術大学院大学	先端科学技術研究科・先端科学技術専攻	ZHOU, Xiajie
金沢工業大学	工学研究科 情報工学専攻	坂内 遼太郎
金沢大学	理工学域 電子情報通信学類	加藤 翼
国立大学法人 福井大学	工学研究科 総合創成工学専攻	橋本 健吾
福井工業大学	工学部・電気電子工学科	NGUYEN MINH PHU
富山高等専門学校	制御情報システム工学専攻	北 寛登
国際高等専門学校	国際理工学科	畠中 義基
石川工業高等専門学校	電子情報工学科	佳山 凌也
福井工業高等専門学校	電子情報工学科	岡田 知士

7. 関西支部

関西（大阪府、京都府、奈良県、滋賀県、和歌山県、兵庫県）を拠点としている会員に対するサービスおよび社会的責務として、講演会、見学会、講習会、教育事業等を企画し実施した。

講演会等の開催にあたっては、学会の会員数の維持・増加を目指し、多くの方に参加いただけるテーマを選定した。また、学生会活動を通じ、地域学生にとっての学会の価値向上を図った。

7-1 事業概要

7-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ア. 講演会：1 回（計画 1 回）、参加者 92 名、テーマ「無線通信技術の探求：基礎から応用まで」をオンラインで実施。
- イ. 見学会：1 回（計画 1 回）、参加者 4 名、少人数制の開催として、株式会社島津製作所様とサンシード株式会社様を見学。
- ウ. 講習会：4 回（計画 5 回）、参加者 174 名（4 回の合計）であった。少人数制の講習会として、画像処理（6 名）、暗号技術（5 名）に関する講座をそれぞれ 1 回の計 2 回実施した。また、社会人が参加しやすいように 18 時から開始されるイブニングセミナーを「大規模言語モデル（LLM）の最前線 ～技術概要・最新動向・社会実装～」というテーマで 2 回開催した。第 1 回は「大規模言語モデルの技術的背景と将来展望」（90 名）、第 2 回は「大規模言語モデルの基礎・最新動向」（73 名）という小テーマで、それぞれ開催した。

7-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ロ、ヘ号）

- ア. 講演会：1 回（計画 1 回）、参加者 12 名、テーマ「小さなコンピュータでビジュアルプログラミング」で、実習もふくめた講演会を開催。
- イ. 関西支部地域内の学校、企業、NPO などと連携し、共同主催、協賛等の教育イベントについてコロナ禍の影響で開催を見送った。

7-1-3 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号、ホ号、ヘ号）

- ア. 講演会：1 回（計画 1 回）、参加者 30 名、パナソニック ホールディングス株式会社、住友電気工業株式会社の各社から若手技術者を招いて「若手企業技術者に関する講演」を対面で実施。
- イ. 研究発表会：1 回（計画 1 回）、参加者 99 名（うち発表者 59 名）、2024 年 3 月 7 日に関西大学にて開催。

7-2 選奨に関する事項（定款 第 4 条 ホ号）

7-2-1. 2023 年度 関西支部学生会支部長賞 奨励賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の 6 名を選定し、2024 年 3 月 7 日に贈呈した。

氏名	所属	講演題目
小川 颯太	大阪府立大学	マルチモードファイバによるデータ変換を用いた エクストリームラーニングマシンに基づく 画像識別の基礎検討
荒深 健伍	奈良工業高等専門	AI-OCR を用いた電子部品の印字検査システム

	学校	
早川 透央子	大阪府立大学	クリッピング制約を導入した深層学習による OFDM 信号の PAPR 抑圧
東條 瑞己	大阪大学	ドローンを用いたサブテラヘルツ無線通信用受信技術の検討
田中 碩彦	大阪大学	300 GHz 帯シリコン誘電体導波路のコネクタ構造化に関する検討
巽 大地	大阪府立大学	光カプラを用いた Ethernet 基盤型光ファイバセンシングシステムの低温度計測域の拡大

7-2-2. 2023 年度 関西支部 優秀論文発表賞

関西支部優秀論文発表賞規定に基づき下記の 3 名を選定し、2024 年 4 月 20 日頃に郵送で贈呈する。
(敬称略)

氏名	所属	講演題目
福永祥利	兵庫県立大学	3.7GHz 帯広帯域準集中 LC はしご形非等電力分配器
佐野遼介	大阪公立大学	近赤外分光による水中のアンモニア及び塩化アンモニウムの濃度測定
西本賢司	大阪公立大学	モデルポイズニング攻撃に対処する適応的連合学習に関する研究

7-2-3. 2022 年度 関西支部学生会支部長賞 功労賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の 17 名を選定し、2024 年 3 月 7 日に贈呈した。
(敬称略)

本賞は関西支部学生会に属する学生のうち、学生会幹事として、支部の活動活性化に多大な貢献をなした功績により表彰するものである。

特別功労賞

該当者なし

功労賞

ハンネーアウン (関西学院大学)、井上翔太 (関西学院大学)、豊岡祥太 (関西大学)、
王一棹 (関西大学)、藤原侑斗 (大阪大学)、添田 椋生 (大阪電気通信大学)、
皆本 颯佑 (大阪電気通信大学)、波多優介 (同志社大学)、原一真 (同志社大学)、
茶田春希 (奈良先端科学技術大学院大学)、中嶋悠斗 (舞鶴工業高等専門学校)、
中島滉太 (舞鶴工業高等専門学校)、福永祥利 (兵庫県立大学)、竹田蒼麻 (兵庫県立大学)、
林彩葉 (龍谷大学)、多計琳太郎 (和歌山大学)、明石将季 (和歌山大学)、

8. 中国支部

2023 年度事業において、全て計画どおり事業達成。また、選奨においても規定どおり実施。

8-1 事業

8-1-1 一般事業 (定款 第4条 ロ号)

- ア. 講演会：20回実施 (主催・共同主催：9回、共催等11回) <計画：15回 (主催3回含む)>
※講演会詳細は【別紙1】参照
- イ. 見学会：電気学会との共催により1回実施 <計画：関連団体と提携し、年1回程度開催>
『令和5年度電気学会中国支部 見学会』(JFEスチール株式会社 西日本製鉄所倉敷地区)
- ウ. 専門講習会：電気設備学会との共催により1回実施<計画：関連団体と提携し年1回程度開催>
『～受変電設備の安全性と経済性の共存～次世代に向けた予防保全の必要性について』
／會沢 雅美・藪 雅人(株式会社日立産機システム)、菊池 浩司(独立行政法人 製品評価技術基盤機構)
- エ. シンポジウム：後援により2回実施 <計画：シンポジウムへ積極的に協賛>
『第25回IEEE広島支部学生シンポジウム (HISS)』(IEEE広島支部)
『大学等におけるクラウドサービス利用シンポジウム2024』(広島大学情報メディア・情報科学部)
- オ. 電気記念日行事：共催団体の一員として2024年3月の記念行事に参加予定
日時：2024年3月25日 (月) 14:00~15:40
場所：広島市中区小町4-33 中国電力本社ビル 2階大会議場
- カ. 電気・情報関連学会中国支部連合大会：2023年10月28日(土)オンラインにて開催
特別講演：題目『モータ高性能化と省資源化に貢献する圧粉磁心の開発』
講師：齋藤達哉(住友電気工業株式会社アドバンストマテリアル研究所)

8-1-2 教育事業 (定款 第4条 ロ号、へ号)

<計画：大学等にて小中高生向けイベントを共同主催>

中国支部学生会にて中国地方の学生を対象にIoT活用に関するアイデア・作品のコンテストを主催
イベント名：『フレッシュITあわ〜ど2023』
今年度テーマ：＜生活を楽しむ方法・便利にする方法＞
開催日・場所：2023年10月29日（日） 現地(広島市立大学)およびオンライン(oVice)
応募総数：65件（アイデア部門：大学生9件／高校生54件、作品部門：2件）
表彰件数：8件（アイデア部門：大学生3件／高校生3件、作品部門：2件）
※最終審査会の様子を配信中 <https://youtube.com/live/nL1T9U6g208>

8-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ホ号、ヘ号）

ア. 学生向け講演会及び見学会

＜計画：オンデマンド配信/年間計画6回程度（オンデマンド配信の場合は年1回）＞

モバイルアプリ講習会の開催および講演会の実施（開催期間：2023年6月15日（水）～9月15日（金））

『フレッシュITあわ〜ど2023＜～開発者だけじゃない！～モバイルアプリ開発に関わる上でおさえておく10のポイント＞』/岡本 和也（株式会社コトブキソリューション ケムコゲームビジネス推進事業部）

イ. 学生会自主活動の活性化：学生会と支部との連携を図り、学生会自主活動への支援

＜フレッシュITあわ〜ど＞実行委員にてイベント開催に向けた開催方法等を検討

【実行委員会開催（オンライン開催）】

第1回：2023年4月22日（土）、第2回：2023年5月21日（日）、第3回：2023年10月8日（日）

第4回：2023年10月29日（日）

ウ. 学生員による支部・支部学生会ホームページの維持管理

学会活動の普及を目的に、広島市立大学の学生員にてホームページを更新（51回）

8-2 選奨（定款 第4条 ホ号、ヘ号） ※詳細は【別紙2】参照

ア. 連合大会発表論文の中から優秀な発表を行った学生の論文を選定（発表論文数10%を四捨五入）し、電子情報通信学会中国支部における連合大会奨励賞として表彰

【連合大会奨励賞表彰式】

開催日：2024年3月1日（金）16：40～17：30

受賞者：19名

イ. 高校、高専、短大の優秀卒業生表彰を、関連学会と連携して実施

受賞者：中国地区58校90名

※電気・電子・照明・映像情報メディア・情報・電気設備に関する学術振興を図るため、中国5県下の高専・短大・高校の電気・情報関連学科卒業生のうち成績優秀者に対して例年賞状ならびに記念品を贈呈し激励

ウ. 学生功労賞の表彰を学生会活動の発展に貢献した学生に対し実施

【学生功労賞表彰式】

開催日：2024年3月1日（金）16：40～17：30

受賞者：10名

※＜フレッシュITあわ〜ど＞開催等により学生会活動の発展に貢献した学生会役員

9. 四国支部

2023年度は、四国における電子・情報・通信工学分野での学術・技術振興に寄与できるよう、講演会、講習会、連合大会などの事業を実施し、四国内の研究者、技術者、学生へのサービス充実を目指した。また新規事業として、四国支部地域内の学校、企業、NPOなどと連携し、小中高生や専門学校の学生向けの教育イベント(メーカーズチャレンジ)へ協賛した。

9-1 事業概要

2023年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

9-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

・講演会は6回(主催4回、共催2回)実施した。

・専門講習会はいずれも対面にて2回(香川高専、香川大)実施した。

・支部協賛・後援事業はサマースクールと次世代光フォーラムの2回実施した。

・2023年度電気・電子・情報関係学会四国支部連合大会（2023年9月23日）は、対面にて実施した。講演論文について、論文を収録した論文集（ダウンロード版、CD-R版）が9月16日に発行され、公知された。（申込件数：237件、発表件数：231件）

9-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ホ号、ヘ号）

- ・学生向け講演会は1回実施し、優れた業績を持つ講師を招き、参加者は幅広く技術情報や知識を得た。
- ・学生ランチとして、2校(愛媛大、徳島大)が講演会、見学会、交流会等の活動を実施した。

9-2 選奨に関する事項(定款 第4条 ホ号)

9-2-1 令和5年度電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞

電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞選奨規程に基づき下記の53名を選定し、各機関の卒業式・修了式において贈呈した。(機関別、敬称略)

No	所属	氏名
1	愛媛大学 工学部 工学科 電気電子工学コース	戎森 郁弥
2	愛媛大学 工学部 工学科 電気電子工学コース	山岸 杜夢
3	愛媛大学 工学部 工学科 コンピュータ科学コース	森岡 拓
4	愛媛大学 工学部 工学科 応用情報工学コース	田中 晴人
5	愛媛大学大学院 理工学研究科 電子情報工学専攻 電気電子工学コース	片岡 洋志
6	愛媛大学大学院 理工学研究科 電子情報工学専攻 情報工学コース	黒田 勇斗
7	愛媛大学大学院 理工学研究科 電子情報工学専攻 ICT スペシャリスト育成コース	黒澤 慶太
8	高知大学 理工学部 情報科学科	森 清忠
9	高知大学大学院 総合人間自然科学研究科 理工学専攻・情報科学コース	内田 十内
10	徳島大学 理工学部 理工学科 電気電子システムコース	梶野 泰史
11	徳島大学 理工学部 理工学科 電気電子システムコース	鶴岡 蒼久
12	徳島大学 理工学部 理工学科 情報光システムコース情報系	佐藤 みずき
13	徳島大学 理工学部 理工学科 情報光システムコース情報系	猪谷 瑠里花
14	徳島大学 理工学部 理工学科 情報光システムコース光系	増原 涼
15	徳島大学大学院 創成科学研究科 理工学専攻 電気電子システムコース	加藤 歩
16	徳島大学大学院 創成科学研究科 理工学専攻 電気電子システムコース	河野 大洋
17	徳島大学大学院 創成科学研究科 理工学専攻 知能情報システムコース	河原田 理愛
18	徳島大学大学院 創成科学研究科 理工学専攻 知能情報システムコース	大月 凌
19	徳島大学大学院 創成科学研究科 理工学専攻 光システムコース	日下 智貴
20	香川大学 創造工学部 創造工学科 造形・メディアデザインコース	新田 宗史
21	香川大学 創造工学部 創造工学科 情報システム・セキュリティコース	山田 純平
22	香川大学 創造工学部 創造工学科 情報通信コース	源 龍之介
23	香川大学 創造工学部 創造工学科 機械システムコース	米澤 凜
24	香川大学大学院 創発科学研究科 創発科学専攻	三瀬 奈智
25	香川大学大学院 創発科学研究科 創発科学専攻	島田 啓司
26	徳島文理大学 工学部 機械創造工学科	廣瀬 雄也
27	徳島文理大学 理工学部 電子情報工学科	南部 和希
28	徳島文理大学大学院 工学研究科 システム制御工学専攻	谷澤 良城
29	高知工科大学 システム工学群	上田 陸斗
30	高知工科大学 情報学群	田邊 梨樹
31	高知工科大学 情報学群	佐藤 希来
32	高知工科大学大学院 工学研究科 基盤工学専攻 電子・光工学コース	地主 拓未
33	高知工科大学大学院 工学研究科 基盤工学専攻 情報学コース	佐々木 勝一
34	四国大学 経営情報学部 メディア情報学科	島内 悠衣
35	阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 電気コース	吉田 一陽
36	阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 情報コース	アン ゼン チェン
37	阿南工業高等専門学校 専攻科 創造技術システム工学専攻 電気電子情報コース	齋藤 智哉
38	高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科 エネルギー・環境コース	三浦 竹次朗
39	高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科 情報セキュリティコース	熊岡 詩真
40	高知工業高等専門学校 専攻科 ソーシャルデザイン工学専攻	大畑 凱斗
41	新居浜工業高等専門学校 電気情報工学科	森高 礼菜
42	新居浜工業高等専門学校 電子制御工学科	北野 太一
43	新居浜工業高等専門学校 専攻科 電子工学専攻	若山 ことみ
44	香川高等専門学校 電気情報工学科	加藤 士温
45	香川高等専門学校 機械電子工学科	西村 海星
46	香川高等専門学校 専攻科 創造工学専攻	溝渕 悠朔
47	香川高等専門学校 通信ネットワーク工学科	佐野 圭亮
48	香川高等専門学校 電子システム工学科	真鍋 凜太郎
49	香川高等専門学校 情報工学科	石川 将丈
50	香川高等専門学校 専攻科 電子情報通信工学専攻	瀧本 一斗

51	弓削商船高等専門学校 電子機械工学科	仁田 梓穂
52	弓削商船高等専門学校 情報工学科	門田 智樹
53	弓削商船高等専門学校 専攻科 生産システム工学専攻	門口 安左馬

10. 九州支部

2023年度は、対面での開催を中心に活動を行い、学生会講演会、連合大会は4年振りの対面開催を行った。また、オンラインのメリットも生かし、ハイブリット開催を行うなど新たな活動方法を取りながら、九州支部管内の研究者、技術者、学生へのサービス充実を目指した。

10-1 事業概要

2023年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

10-1-1 一般事業（新定款第4条ロ号）

- ア. 講演会：特別講演会をハイブリットにて1回開催、一般講演会7回を開催した他、協賛・後援の講演会、シンポジウムを6件行った。
- イ. 専門講習会：九州工業大学にて「音声音響信号処理とその実用化」および「高周波における磁性体のモデル化とその応用」を、それぞれ講師2名を招聘しハイブリットにて2回開催を行った。
- ウ. ワークショップ：アンテナ・伝搬における設計・解析ワークショップ 「アンテナ伝搬基礎講座」を3日間に渡りオンライン開催し、学生、企業、大学関係者など参加者約300名と盛況であった。
- エ. 電気・情報関係学会九州支部連合大会：崇城大学にて4年振りに2日間に渡り開催された。参加者は一般講演数383件、企業講演8件、招待講演2件、特別講演1件、企画セッション1件、聴講者213名を数え大変盛況であった。
- オ. 総合通信局連携企画：九州総合通信局と当支部の連携事業として、連合大会の企画セッションにて1名の講師を招聘し、講演を行った。

10-1-2 教育事業（新定款第4条ロ、へ号）

- ア. 子供の科学教室：九州産業大学にて「お手軽電子工作」を開催。小学生20名が参加し好評であった。また、長崎大学にて「試して学ぼう！カメラとAI」を開催、中学生8名が参加し好評であった。
- イ. 科学体験プロジェクト：熊本高専と共催にて「熊本高専生による小中学生のためのプログラミング講座 in 湯前町」を熊本県湯前町で2日間開催。小中高生38名が参加し好評であった。
- ウ. ものづくり教室：有明高専と共催にて「第18回エレクトロニクスものづくり体験教室2023」を開催。FMはこらじ作成を行った。小中学生26名が参加し好評であった。

10-1-3 学生会事業（新定款第4条ロ、ホ、へ号）

- ア. 学生会講演会：学生員で組織された学生実行委員会を中心に、崇城大学にて4年振りに開催された。103件の講演と19名の聴講者が、高専生から院生まで幅広い学生が多数参加し、大変盛況であった。
- イ. 学生ランチ交流会：学生会講演会にて、管内11の学生ランチ代表者が参加者に向けて活動報告のポスターセッションを行い、学会活動についての周知を図った。また、学生ランチ委員会を開催し、各ランチ同士の情報交換および交流を図り大いに有意義であった。
- ウ. 学生ランチ：11ランチが活動し、各自講演会や見学会、交流会などの活動を行った。

10-2 選奨に関する事項（定款第6条ホ号）

10-2-1 2023年度 連合大会講演奨励賞

「電気・情報関係学会九州支部連合大会における講演奨励賞」表彰規程に基づき下記9名を選定し、2024年1月付けにて表彰した。（順不同、敬称略）

授賞者	所 属	演 題
貝出 凌汰	九州大学 工学部 電気情報工学科	波長可変レーザを用いた2値周波数変調テラヘルツ波の生成手法の実証
岩本 真治	九州大学 工学部 電気情報工学科	アレーUTC-PD送信器によるテラヘルツ波の伝送実験
江口 達大	九州大学 大学院システム情報科学府 情報理工学専攻	深層学習を用いた光超音波画像の画質改善

授賞者	所 属	演 題
前田 夏希	崇城大学 大学院工学研究科 応用情報学専攻	壁面・天井面への貼付設置が可能な LED 照明用薄型 DC-DC コンバータ
蘭 敬太	大分大学 大学院工学研究科 博士前期課程工学専攻 知能情報システム工学コース	妊産婦に寄り添うモバイルアプリケーションのための 拡張機能の提案
江藤 陸玖	大分大学 理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース	テーブル型タッチディスプレイで実現する PC 操作の 新しいユーザエクスペリエンス
河野 直希	長崎県立大学 情報システム学部 情報システム学科	長崎市東山手・南山手区域における歴史まちづくり計 画のためのアンケート調査による年代別分析
矢野 仁也	福岡工業大学 大学院工学研究科 システムマネジメント専攻	スパースガウス過程回帰を用いた手書きデジタルイン クの圧縮と復元
渡邊 朝子	福岡大学 工学部 電子情報工学科	細菌叢解析における複数の機械学習手法の比較検討

10-2-2 2023 年度 学生会講演奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記 13 名を選定し、2024 年 1 月付けにて表彰した。(順不同、敬称略)

授賞者	所 属	演 題
早島 未来	福岡工業大学 工学部 電子情報工学科	道路を横断する歩行者の横断挙動計測システムの開発
宮崎 滉大	長崎大学 大学院工学研究科 総合工学専攻	血管検出用電波型内視鏡マイクロストリップアンテナ に関する研究
鈴田 高登	長崎総合科学大学 工学部 工学科 電気電子工学コース	直並列ソフトスイッチング DC-DC コンバータのバラ ンス制御手法
長谷 健吾	鹿児島大学 大学院理工学研究科 工学専攻 電気電子工学プログラム	CGAN を用いたデータ拡張における耐候性鋼材のさび 画像生成の多様性の改善
満江 祐人	佐世保工業高等専門学校 専攻科 複合工学専攻 (情報工学系)	低精度スキャンデータに対する高精度化の一手法
時元 康貴	九州大学 大学院 総合理工学府 総合理工学専攻	IGZO TFT のオーミック・ショットキー接触時におけ るプレーナ・スタガ型の比較
安部 萌	九州産業大学 大学院情報科学研究科 情報科学専攻	光学式 CO2 センサと総合環境センサの併用による有用 性の検討
川野 幹斗	九州工業大学 大学院情報工学府 情報創成工学専攻	腫瘍認識を行う FCN の出力サイズ削減に関する一検 討
今村 遥弥	九州工業大学 情報工学部 知能情報工学科	順序付き区間グラフに対する部分グラフ同型性判定問 題に対する考察
井上 哲平	宮崎大学 大学院工学研究科 工学専攻 機械情報コース	エビを模倣したパドリング遊泳による運動学モデル創 出と水上推進機構としての評価
川津 駿斗	宮崎大学 工学部 環境ロボティクス学科	尺取虫とエノコログサを模倣した管内移動メカニズム
渡辺 拓哉	宮崎大学 工学部 環境ロボティクス学科	高齢者における下肢動作支援を目的とした相対距離デ ータに基づいた起立着座の認識手法
春田 大河	久留米工業大学 大学院工学研究科 電子情報システム工学専攻	人の動きを追従するヴァーチャルメンターによる障碍 児への教育支援

10-2-3 2023 年度 成績優秀賞

学生会表彰規程に基づき下記の 64 名を選定し、2024 年 3 月付けにて表彰した。(順不同、敬称略)

学 校	学 部	学 科	表彰者名
九州大学	工学部	電気情報工学科 計算機工学課程	川畑 考太郎
		電気情報工学科 電子通信工学課程	秋吉 秀真
福岡大学	工学部	電子情報工学科	斉藤 篤稀
福岡工業大学	情報工学部	電子情報工学科	坂元 圭佑
		情報通信工学科	坂井 ひかる
		情報工学科	福岡 優太
		情報システム工学科	月野 駿佑
九州産業大学	理工学部	システムマネジメント学科	鎮守 健
		情報科学科	山口 遥稀
九州工業大学	工学部	電気工学科	宮原 考輝
		機械知能工学科 知能制御工学コース	山口 貴也
	情報工学部	電気電子工学科 電子システム工学コース	中島 優介
		物理情報工学科	小野 雄世
		情報・通信工学科	岩井 正輝
		知能情報工学科	松藤 憲吾
知的システム工学科	安立 楓		

学 校	学 部	学 科	表彰者名
北九州市立大学	国際環境工学部	情報システム工学科	中川 颯人
久留米工業大学	工学部	情報ネットワーク工学科	井 悠生
西日本工業大学	工学部	総合システム工学科 電気情報工学系知能制御コース	八谷 達磨
		総合システム工学科 電気情報工学系情報コース	毛野 雄貴
近畿大学	産業理工学部	電気電子工学科	松井 一朗
		情報学科	嶋村 颯人
佐賀大学	理工学部	理工学科 情報ネットワーク工学コース	江下 駿人
		理工学科 知能情報システム工学コース	岸本 蒼唯
		理工学科 電気エネルギー工学コース	山下 彰太
		理工学科 電子デバイス工学コース	永留 和真
長崎大学	工学部	工学科 情報工学コース	井上 海星
	情報データ科学部		
長崎総合科学大学	工学部	工学科 電気電子工学コース	鈴木 高登
	総合情報学部	総合情報学科 知能情報コース	永田 将
熊本大学	工学部	情報電気工学科 電気工学教育プログラム	知念 愛夏
		情報電気工学科 電子工学教育プログラム	齋藤 優佳
		情報電気工学科 情報工学教育プログラム	田村 祐貴
崇城大学	情報学部	情報学科 未来情報コース	栃原 幸佳
		情報学科 電子通信コース	古田 朱音
		情報学科 知能情報コース	藤末 尚久
東海大学	基盤工学部	電気電子情報工学科	中本 泰誠
大分大学	理工学部	創生工学科 電気電子コース (電気工学系統)	山口 力樹
		創生工学科 電気電子コース (電子工学系統)	島田 駿
		共創理工学科 知能情報システムコース	松本 悠介
宮崎大学	工学部	電気システム工学科	西 啓太
		情報システム工学科	高崎 球宇我
鹿児島大学	工学部	電気電子工学科	石橋 尚樹
		情報生体システム工学科	傅 星儿
第一工科大学	工学部	情報電子システム工学科	前野 太洋
琉球大学	工学部	工学科 電子情報通信コース	上地 宏夢
		工学科 電気システム工学コース	具志堅 太成
		工学科 知能情報コース	當山 寛人

学校名	学科名	表彰者
北九州工業高等専門学校	生産デザイン工学科 知能ロボットシステムコース	前川 実佳子
	生産デザイン工学科 情報システムコース	服部 雄太
有明工業高等専門学校	創造工学科 情報システムコース	近藤 瑛
久留米工業高等専門学校	制御情報工学科	井田 匡彦
佐世保工業高等専門学校	電子制御工学科	藤永 悠生
熊本高等専門学校	人間情報システム工学科	氏江 美羽
	情報通信エレクトロニクス工学科	松岡 朝陽
	制御情報システム工学科	吉田 凧沙
大分工業高等専門学校	電気電子工学科	小室 祥汰
	情報工学科	生野 舞
都城工業高等専門学校	電気情報工学科	大内田 健太
鹿児島工業高等専門学校	情報工学科	松下 拓海
	電子制御工学科	和田 悠輝
	電気電子工学科	下吉 健斗
沖縄工業高等専門学校	情報通信システム工学科	伊敷 真乃介
	メディア情報工学科	前原 東洋

10-2-4 2023 年度 学術奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記の 27 名を選定し、2024 年 3 月付けにて表彰した。(順不同、敬称略)

	所 属	表彰者
九州大学	大学院システム情報科学府 情報理工学専攻	重安 勇輝
福岡大学	大学院工学研究科 電子情報工学専攻	赤池 春輝
福岡工業大学	大学院工学研究科 情報通信工学専攻	二又 頌太
九州産業大学	大学院情報科学研究科 情報科学専攻	浅野 公平
九州工業大学	大学院工学府 工学専攻	谷 穂香
	大学院情報工学府 情報創成工学専攻	大森 涼平
北九州市立大学	大学院国際環境工学研究科 情報工学専攻 計算機科学コース	木下 集人

所 属		表彰者
久留米工業大学	大学院工学研究科 電子情報システム工学専攻	春田 大河
西日本工業大学	大学院工学研究科 生産・環境システム専攻	ハン セイナン
近畿大学	大学院産業理工学研究科 産業理工学専攻	林元 辰己
佐賀大学	大学院理工学研究科 理工学専攻 電気電子工学コース	遠山 周衛
長崎大学	大学院工学研究科 総合工学専攻	松尾 亮汰
長崎総合科学大学	大学院工学研究科 修士課程 電子情報学専攻	筒井 爽斗
熊本大学	大学院自然科学教育部 博士前期課程 情報電気工学専攻	財頭 直希
崇城大学	大学院工学研究科 応用情報学専攻	柴田 美桜
大分大学	大学院工学研究科 工学専攻知能情報システム工学コース	佐藤 理子
宮崎大学	大学院工学研究科 工学専攻	大中 健登
鹿児島大学	大学院理工学研究科 工学専攻 情報・生体工学プログラム	溝添 昂一郎
琉球大学	大学院理工学研究科 工学専攻	末光 航大
北九州工業高等専門学校	専攻科 生産デザイン工学専攻	中本 菜月
有明工業高等専門学校	専攻科 生産情報システム工学専攻	山本 裕季
佐世保工業高等専門学校	専攻科 複合工学専攻情報工学系	満江 祐人
熊本高等専門学校	専攻科 電子情報システム工学専攻	羽山 昂伸
大分工業高等専門学校	専攻科 電気電子情報工学専攻	小野 竜也
都城工業高等専門学校	専攻科 機械電気工学専攻	谷口 蓮
鹿児島工業高等専門学校	専攻科 電気情報システム工学専攻	美坂 大希
沖縄工業高等専門学校	専攻科 創造システム工学専攻 電子通信システム工学コース	津波 琉

以上

IV. 2023 年度役員及び代議員の構成

2023 年度役員

29 名

役 職 名	先 任	後 任
会 長	森川 博之	
次期会長	山中 直明	
副会長（学術強化担当）	眞田 幸俊	田口 亮
副会長（学会運営・組織強化担当）	浅井光太郎	中村 元
総務理事	岡 宗一	大槻 知明
会計理事	井上 真杉	平 明德
編集理事	佐波 孝彦	橋本 俊和
企画理事	太田 賢	吉敷由起子
調査理事	伊達木 隆	松尾 綾子
編集長（理事）	笹瀬 巖	
企画戦略室長（理事）	水落 隆司	
規格調査会委員長（理事）	浅谷 耕一	
ESS 会長（理事）	梶川 嘉延	
CS 会長（理事）	笠原 正治	
ES 会長（理事）	川西 哲也	
ISS 会長（理事）	藤井 俊彰	
ESS 次期会長（理事）	和田山 正	
CS 次期会長（理事）	中尾 彰宏	
ES 次期会長（理事）	永田 真	
ISS 次期会長（理事）	斎藤 英雄	
監 事	河東 晴子	中野 義昭

2023 年度代議員

106 名

相澤 清晴	太田 賢	菊池 仁	高村 誠之	葉玉 寿弥	守屋 俊夫
アギレ エ	太田 隆博	菊間 信良	宝田 隼	馬場 暁	安野恵実子
浅井光太郎	大橋 弘美	楠 晃典	竹内 啓悟	原田 崇司	山里 敬也
浅谷 耕一	大橋 正良	小林 正宏	橋 拓至	藤井 威生	山田 昭雄
足立 朋子	岡 宗一	坂本 雄児	伊達木 隆	藤井 俊彰	山中 直明
安部田貞行	尾上 孝雄	佐々木宣介	田中 良明	藤島 実	山本 剛之
飯田 佑輔	葛西 恵介	笹瀬 巖	太郎丸 真	前田 譲治	横谷 哲也
伊賀崎伴彦	笠原 正治	佐藤 真一	陳 強	正柳 博之	吉田 享広
石川 悦子	梶川 嘉延	佐藤 洋一	辻 ゆかり	松井 知子	米澤 拓郎
石田 亨	柏野 邦夫	眞田 幸俊	津田 裕之	松島 裕一	和田 親宗
伊藤 信之	加藤 景三	佐波 孝彦	寺田 純	松田 広	渡辺 昌洋
稲垣 潤	鎌部 浩	椎屋 和久	永妻 忠夫	松原 崇	
井上 真杉	亀田 裕介	塩本 公平	仲村 泰明	松本 慎平	
今田 美幸	川上 朋也	清水 隆志	中山 正敏	三浦 達	
岩井 誠人	川添 雄彦	白尾 瑞基	難波 一輝	水落 隆司	
岩野 公司	川西 哲也	鈴木恵治郎	西田 好宏	三宅 功	
植松 友彦	川端 明生	鈴木 正敏	西原 明法	村上 修二	
宇佐見庄五	河東 晴子	高橋 篤司	西原 基夫	森川 博之	
内田 誠一	姜 錫	高橋 浩	野村 亮	森永 聡	

V. 2024 年度役員候補者及び代議員の選挙

2024 年度役員候補者（規則第 5 章）及び代議員（定款第 5 条 3 項及び 6 項）の選挙は、2024 年 2 月 6 日～3 月 5 日に Web による投票で実施した。

-----< 参 考 >-----

2024 年度代議員

108 名

相澤 清晴	海野 祐輔	金 ミンソ	平 明德	永田 真	水谷 浩之
青木 直史	大河 正志	今野 佳祐	高橋 篤司	中野 秀洋	三宅 功
浅井光太郎	太田 賢	斎藤 英雄	高橋 徹	中野 義昭	森川 博之
浅谷 耕一	大槻 知明	斎藤 秀俊	高橋 浩	中村 元	山中 直明
阿多 信吾	岡 宗一	佐々木邦彦	高村 誠之	西浦 敬信	山本健太郎
足立 朋子	岡田 将吾	笹瀬 巖	田口 亮	西原 明法	山本 剛之
安部田貞行	尾上 孝雄	佐藤 真一	伊達木 隆	西原 基夫	山本 直克
石井 望	笠原 正治	佐道 泰造	田中 良明	野村 亮	吉田 毅
石川 悦子	梶川 嘉延	佐藤 洋一	田村 昌也	橋本 俊和	吉本潤一郎
石田 亨	柏野 邦夫	眞田 幸俊	太郎丸 真	橋本 昌宜	與那 篤史
伊藤 京子	加藤 毅	佐波 孝彦	辻 ゆかり	葉玉 寿弥	リム 勇仁
伊藤 みほ	鎌部 浩	塩本 公平	都築 伸二	八田 俊之	和田 親宗
稲村 浩	河口 民雄	重田 和弘	鉄本 良	廣瀬 幸	和田山 正
井上 真杉	川島 龍太	篠浦 伸得	寺迫 智昭	藤井 威生	
岩城 護	川添 雄彦	芝 宏礼	寺田 純	藤井 俊彰	
上嶋 明	川西 哲也	白井 僚	鳥山 朋二	藤島 実	
植松 友彦	河東 晴子	白勢 政明	中尾 彰宏	松尾 綾子	
内澤 啓	菊間 信良	関屋 大雄	中川 匡夫	松田 広	
内山 英昭	吉敷由起子	宋 天	中田 崇行	水落 隆司	